

と三轉すれば、壇の大小にかなひて、即ち金剛堅固の域と成る。密言に曰はく。

唵、薩囉薩囉、嚩囉鉢囉迦囉吽發吒。

(一) 瑜伽者以下  
道場觀に入る。  
(二) 摩尼如意寶  
珠。

(三) 切樹 天然の  
國王長者等衣服  
等裝ひ懸けて之を  
施すを切樹と名く  
(四) 此觀以下の偈  
三力偈なり。

印を結び密言を誦じ、作意し加持するに由るが故に、一切の諸佛すら遠越したまはず、何んぞ況んや、諸餘の難調の者、毗那夜迦及び毒蟲利牙爪の者、而も能く侵陵せんや。(一) 瑜伽者又須彌山の頂に大寶殿を觀すべし。其殿は無價の(二) 摩尼の所成なり。四方正等にして四門を具足し、其門の左右に吉祥幢あり、軒楯周環して徧く珠鬘瓔珞を垂れ、鈴鐸、繒旛種々に間錯して、而かも莊嚴を爲し、殿の中に彌布し、微風搖撃して和雅の音を出す。復た殿外の四角及び諸の門角に於て、半滿月等の金剛寶を以て鈿飾せり。寶柱行列し妙天衣を垂れ、香雲を周布し普く雜草を雨す。復た其外に於て無量の(三) 切樹ありて行列せり。諸天競ひて衆々の妙音樂を奏し、寶餅・闍伽・天妙・飲食あり、摩尼を燈と爲す。(四) 觀を作し已はりて此偈を誦す。

我が功德力と。

如來の加持力と。

及び法界の力とを以て。普く供養して而も住す。

此の偈を説き已はりて大虚空藏の印を結ぶ。

(一) 金剛縛 兩手  
を縛するを云ふ  
之に二種ありて内  
縛と外縛とあり  
今は外縛なり。

(二) 法爾所成 自  
ら十指に無邊の功  
徳あるが故に  
觀は成ぜざるも印  
言の加持を以ての  
故に眞實の功徳を  
成す。  
(三) 寶樓閣以下五  
尊即ち五明王の種  
子を觀す。

(四) 金剛因菩薩  
金剛界曼荼羅四  
方阿彌陀佛の四親  
近の一なり。

十度(一) 金剛縛にして進力を盛めて寶の如くし、禪智並べ伸べて忍願を逼して、檀・慧・戒方・合せて幢の如くせよ。是の印を結び密言を誦じて、印より上の如き供具樓閣等を流出すと想へ。眞言に曰はく。

唵、誑々曩三婆嚩嚩囉囉。

此の密言印の加持を以ての故に、縦ひ觀を成せずとも皆廣大眞實の供養と成る。此の(二) 法爾所成に由るが故に。

(三) 又寶樓閣の中央に於て阿字を觀じ、兩邊吽字を觀す。是れ甘露軍荼利の法身種子の字なり。

次に東方に於て吽字を觀す、是れ降三世の法身種子なり。

又南方に於て怛悞字を觀す、是れ忿怒金剛藏の法身種子なり。

又西方に於て訖唎字を觀す、是れ金剛軍童子の法身種子なり。

次に北方に於て惡字を觀す、是れ金剛羯拏の法身種子なり。

即ち(四) 金剛因菩薩の印を結ぶ、教令輪曼荼羅を成就せしめんが爲めの故に、普く一切有情をして冥然に金剛界等の曼荼羅に入らしめんが爲めの故に。

瑜伽者即ち一切の曼荼羅に入るに同じきが故に、一切の灌頂を受くることを得るが故に、事業に約して建立する所の一切の曼荼羅は、吉祥清淨にして不増不減なることを成じ、一切の如來稱讚したまふが故に、まさに金剛因の契を結び及び密語を誦すべし。二手各々金剛拳を作り、進・力・檀・慧・互に相ひ鉤結して、印を自らの口の上に安き、誦すること三徧にして、則ち金剛界等の教令輪の一切の曼荼羅に入ることを成す。次に頂上に安じて則ち一切の灌頂を受くることを成す。復た印を以て所建立の事相を按さへ、及び所成等の曼荼羅の上を觀すれば則ち眞實と成る。金剛薩埵の親のあたり建立したまふ輪壇の如し。此密語を誦じて曰はく。

唵、嚩囉斫羯囉吽、弱吽鑊解。

次に金剛寶車輅の印を結ぶ。

十度内に相又へ、掌を仰げ、進力側めて相拄へ、禪智を以て各々進力の根の下を捻し、金剛使者金剛の寶車を駕御して、空に乗じて妙喜世界に至ると想へ。密言を誦すること三徧す。眞言に曰はく。

唵、靺嚩靺嚩吽。

(二)阿闍如來  
佛の東、東方金剛  
部主、日輪の受  
茶羅に住す、諸  
央に住して、諸  
の淨を破して、現  
の淨を破して、現  
王、愛、喜、願、現  
薩、四、親、近、四、苦  
請、本、宮、親、近、四、苦  
寶、車、路、本、宮、親、近、四、苦  
中、の、行、路、本、宮、親、近、四、苦  
輪、行、路、本、宮、親、近、四、苦  
着、したる所なり。  
門に請じて車を即ち止

此の密語印の加持に由るが故に、七寶の車輅(二)阿闍如來の妙喜世界の大會の中に至りて本尊甘露軍荼利菩薩、並に諸の大忿怒の菩薩眷屬を請じ奉る。無量の供養菩薩圍遶して此輅車に乗す。

次に(三)請車輅の印を結ぶ。

前印に準じて禪智を以て身に向け、忍願を撥して、密言を誦すること三徧すべし。密語に曰はく。

曩莫悉底哩也地尾迦南、但佉孽修南、唵、嚩囉朗彌也迦哩灑也娑嚩訶。

此の印密言の加持に由るが故に、聖衆本土より道場の空中に來至して住す。

次に請本尊三昧耶降道場の印を結ぶ。

十度内に相又へ、拳を作り禪度掌に入れ、智度を以て身に向け之を招く。密言を誦じて曰はく。

唵、嚩囉持嚩、嚩保曳咽婆誑鑊、阿密哩修軍拏里娑嚩訶。

此の密言印の加持に由りて、菩薩本誓の願を越えざるが故に、集會道場に赴きたまふ。次に諸魔作障難者を辟除すべし、降三世の威怒眼の印密言を用ふべし。兩目の瞳人の

上に四字を觀すべし、變じて日輪となり、無量の威光を流出し、一々光道の上に種々の金剛火焰猛利の杵ありと。眉を繋め目を怒らして、右旋して菩薩大衆を顧視す。此の金剛怒眼を以て視るに由りて、諸魔の隠れて大衆中に在る者悉く退散す。此れを以て瞻視すれば、本尊及び聖衆ことごとく皆歡喜したまふ。

(二)上方金剛網の印  
虚空網なり。

次に(二)上方金剛網の印を結ぶ。

前の牆印に準じて、禪智を以て各各進力の下節を捻し、印を結び成じ已はりて、印金剛杵と成ると觀すべし。又印より無量の金剛杵を流出す。一々の杵より皆無邊の威焰を流出して相續して網を成す、頂上に印を旋らすこと三市して、此密語を誦じて曰はく。  
唵、尾塞普囉捺囉乞叉、嚩囉半惹囉吽發吒。

此の網の印密言の加持に由るが故に、即ち金剛堅固不壞の網を成す。

(三)火院密縫印  
此印は十八契印の一方、五結界の外に火を圍繞せしめて火の入りこま能はざらしむなり。

次に(三)火院密縫の印を結ぶ。

左手を以て右手の背を掩ひ、禪智を豎て、印を結び成じ已はりて此觀を作すべし。印より金剛熾盛の火焰を流出すと。密言を誦すること三遍、右に身を遠らすこと三市すべし、金剛牆の外に於て火焰圍遶すと想へ。此密語を誦じて曰はく。

唵、阿三麼嚩你吽發吒。

(二)大三昧耶印  
五結界の一なり。

又(二)大三昧耶の印を結ぶ。

十度内に相又へ拳と爲し、忍願を並べ豎て、力を屈すること鈎の如く、忍願の兩邊にありて三胡杵形の如し。禪智を進力の側に付け、右に印を旋らすこと三市して密語を誦すること三遍、火院の界外を護すべし。密語を誦じて曰はく。

唵、賞羯嚩、摩訶三麼琰婆嚩訶。

此の印密言の加持に由るが故に、金輪王等の(三)佛頂經に説くが如きは、若し人ありて、頂輪王等の佛頂を誦持すれば、五百由旬の内に餘部の密言を修するもの、本所尊を請じて念誦するに、聖者降赴したまはず、亦た悉地を與へたまはず、一字頂輪の威徳に攝せらるゝのみなりと。此大界を結ぶときは、設ひ頂輪王を持誦する人鄰近するも、阻礙すること能はず、威力を奪はず、所持の餘部の密言、皆速かに成就することを得。次に獻華座の印を結ぶ。二手芙蓉合掌にして禪智各各檀・慧・の甲を臺と爲す、餘度は金剛の如くし、印成じて、印金剛蓮華と爲ると觀すべし。又印より無量の金剛蓮華座を流出して、本尊及び聖衆等に奉獻したてまつると想へ。此密語を誦じて曰はく。

(三)佛頂經又一  
字頂輪王經と名づく、六卷百四十七紙、菩提流支譯。

唵、嚩囉味嚩也娑嚩訶。

此の印を結び密言を誦するに由るが故に、本尊及び營從則ち眞實に各座を受得し已る。

(二) 闍伽 佛に供する水、修法の時、身を洗滌し、佛の水をなす。

瑜伽者(一) 闍伽の二の新器を辨すべし。商估或は金銀雜寶及び熟銅、下も瓦木等に至れ、充滿して香水を盛り、時華を上に乗べて、二手に捧げて額に當て、即ち本尊軍荼利を思惟すべし、身色瑩ること碧玻璃の如し、威光切焰に餘り赫奕として日輪を佩ぶ。眉を繋めて笑怒の容なり、虎牙上下に現せり。千目ありて視るに瞬るからず、晃曜日の如し、千の手に各々金剛の諸の器仗を操持せり。首に金剛寶を冠むり龍環虎皮の裙あり、無量の忿怒の衆、金剛及び諸天圍遶して侍衛をなせり。觀念して分明に見るべし、曼荼羅に住したまふことを。復た闍伽水流出して本尊及び聖衆の二足に注ぐと觀すべし。能く一滯の水を以て闍伽雲海を成じて普く諸佛の刹に徧す、後の密言を誦すべし。

曩謨囉怛曩怛囉夜也、曩謨嚩囉囉矩囉駄也、唵、婀密哩哆軍拏里、訶娑訶娑遇者遇者吽發吒。

闍伽香水を獻するに由るが故に、速に清淨の妙法身を獲。

次に(二) 金剛塗香の印を結ぶ。

(一) 金剛塗香印 以下五種供養に入る、五種供養とは、塗香、花鬘、焚香、飲食、燈明なり。

塗香を加持して本尊及び諸聖衆に奉獻す。其の印左手を以て右手の腕を握り、右手の五度を舒べて掌を揚ぐ、施無畏勢の如し。印を結び成じ已はりて、密語を誦し思惟すべし。印より塗雲海を流出して、一切世界盡虚空界に徧じ、一切微塵の佛刹の大海會の聖衆の前に徧滿して、皆自身ありて塗香の器を持して、一一の尊に供養して廣大の供養と成ると。此の密語を誦じて曰はく。

唵、嚩駄莽里你、嚩囉泥鉢囉底、儼唎恨拏娑嚩訶印を結び、密言を誦し作意するに由りて、速に(三) 五分法身を獲て、能く一切有情の煩惱の炎熱を除く。

次に金剛華の印を結ぶ。

(三) 五分法身 戒身、定身、慧身、解脫身、智見身にて、衆生の五種を解見して此五分法身五智功德を得とす。

諸華を加持して本尊及び諸の聖衆に奉獻すべし。下も一華に至るまで、皆な無量の雲海と成りて、周徧して一切の聖衆に供養したてまつる。若し華無くんば但だ此印を結びて奉獻すべし。その印は、二手の十度を以て内に相叉へ圓らかにし、進力を屈して峰相柱へ、禪智を進力の側に附く。印を結び成じ已はりて、兼ねて密語を誦し、また思惟す

べし。印より種々の華雲海を流出して一切の世界、虚空界、法界に周徧して、一切微塵の佛刹の海會の六衆の前に徧滿して廣大の供養と成る、此の密語を誦じて曰はく。  
唵、莽囉馱囉、嚩囉馱囉娑嚩訶。

此印を結び密言を誦じて加持するに由るが故に、速に三十二相を獲、能く一切有情の菩提心の華をして開發せしむ。次に金剛焚香の印を結びて、焚香を加持して本尊及び聖衆に奉獻す。二手を以て背相合はせ、進力の峯を側めて相拄へ、禪智各各進力の側を捻すべし。印を結び成じ已はり即ち此の觀を作す、印より焚香雲海を流出して、一切世界、虚空界、法界に周徧し徧滿し、氣馥して一切微塵刹土の大海會に供養し奉り、一一の聖衆の前に自身ありて、種々の合和香を持して焼供養すと。此の密語を誦じて曰はく。  
唵、度麼式契矩嚩、嚩囉泥娑嚩訶。

此の印を結び、密言誦して加持するに由るが故に、速に(二)無礙智を獲。

次に金剛飲食の印を結びて、本尊及び聖衆に奉獻す、二手を以て芙蓉掌に合す、印を結び成じ已はりて、密語を誦じて又思惟すべし。印より無量の飲食雲海を流出して、一切世界、盡虚空界、法界に周徧し、一切微塵刹土の佛の大海會の、一一の聖者の前

(二)無礙智 佛智のこゝを云ふ、何物にもさえられず一切の事理を知りつくす智慧なるが故に名づく。

(一)法喜禪悅の食 法喜は佛法に對して歡喜愛樂の心を起すこと、禪悅の食は、禪法を以てその神心を資して禪定の樂を得て諸根を増長せしめ、諸命を資するこゝ世間の食の命を支持するに等しきが故に名づく。

(三)五眼 肉眼。天眼。法眼。慧眼。佛眼の稱。  
(三)普供養印 三世十方の諸佛に普く供養するを云ふ。一椀の飯一枝の花も此加持に依りて無量廣大の功徳を成す。

に徧滿して、無限廣大の供養を成就すと。若し此の印を以て世間、微少の飲食を加持すれば、天甘露食雲海と成りて、周徧して一切の聖者に奉獻す。此の密語を誦じて曰く。  
唵、麼囉麼囉、冥伽莽里爾、鉢囉底囉哩恨拏、嚩囉泥娑嚩訶。

此の印を結び密語を誦するに由るが故に、速に三解脱味を證して、(二)法喜禪悅の食を得。次に金剛燈印を結びて本尊及び聖衆に奉獻すべし。其の印の右手を以て拳を作り忍度を舒べ、禪を以て進の甲を押し、禪の峰忍の中文の側を捻し、右に旋らして照す。即ち此の觀を作すべし。印より無量の金剛燈雲海を流出して、一切世界、盡虚空界、法界に周徧し、一切微塵刹土の海會の大海の前に徧滿して廣大の供養を成す。此の印を以て一燈を加持すれば、便ち無量の金剛燈雲海と成りて、能く周徧して一切の佛刹の聖衆の海會を供養し照曜す、此の密語を誦じて曰はく。  
唵、入嚩囉莽里爾、捺跋式契娑嚩訶。

此の密語印の加持に由るが故に、速に如來の淨(三)五眼を獲。  
次に(三)普供養の印を結びて本尊及び聖衆を供養す、二手の十度の初分相交ふべし。印を結び成じ已はりて密語を誦じて思惟すべし。印より種々の供養雲海・天妙妓樂・歌舞・

嬉戲等・天妙衣服・飲食・燈明・闍伽・賢餅・劫樹・寶幢・幡蓋・諸寶等の類・一切人天所有の受用の物を流出して、衆多の差別の供養の具、大乘の契經に説く所の供養の具の如くして、一切世界、盡虚空界、法界の一切微塵刹土の諸佛の海會に周徧して、一切の聖衆の前に、皆眞實の供養有り。此密語を誦じて曰はく。

曩謨薩嚩沒駄胃地薩怛嚩南、薩嚩佉欠嚩娜誑帝、娑頗囉囉舍誑誑曩劔娑嚩訶。

供養し已はりて、了々に本尊兼ては諸の眷屬を觀想すべし。即ち此の讚を誦じて聖者無量の功德を讚揚すべし。

(二)字を布して云入る。以下布字觀に入る。

摩訶麼邏也戰拏也、尾爾也邏惹也娑駄吠、訥難踰曩麼迦夜也、曩謨悉帝嚩曰囉播拏曳本尊を讚嘆し已りて、然して後(三)字を布して自身をして本尊の三摩地を成せしむべし。二手金剛縛にして、仰いで齋の下に安じて、目を閉ぢ心を澄まし慮を定めて、大慈悲心を一切の有情に起すべし。願はくは諸の衆生に速に本尊の三摩地を證せしめ、威徳熾盛にして壽命神通聖者に等同ならしめん。即ち自の頂上に唵字を想ふべし、赤色にして大光明を具して十方を照耀す。次に婀字を觀じて心に當つ、珂雪の如く内外照耀して大月輪の如し。又密哩字を觀すべし、兩の眉の上に色虹霓の如くして一切の

世界を照す。又帝字を齋輪に觀すべし、皓素の如くして光明潤澤せり、無邊の世界の一切の惡趣を照す。次に吽字を兩の脛に觀すべし、其色黄金の如くにして光明無間惡趣を照耀す。次に頗字を觀じて兩の脛に安すべし、其色玄雲の如くにして、諸の修羅を照觸し正道を悟らしむ。次に吒字を觀じて二足の掌に安すべし、素色にして其形半月の如くにして、光明を流出して、諸の外道を照觸して諸の邪見の網を捨て、三寶に歸信せしむ。此の布字の三摩地に由りて、自身變じて本尊と成る。

(三)次に本尊の身已下本尊觀に入る

次に(三)本尊の身と相應することを説かん。四面四臂にして、右手は金剛杵を執り、左手は滿願の印なり。二手に羯磨の印を作して、身に威光熾鬘を佩びて月輪の中に住して青蓮華色なり。瑟瑟の磐石に座せり、正面は慈悲なり。右の第二の面は忿怒なり。左の第三の面は大笑の容に作して、後の第四の面は微怒にして口を開く、即ち本尊羯磨の印を結ぶべし。智は慧度の甲を押す、餘は三股の形の如く、慧の手亦た之の如くして、右は左を押して臂を交ふべし。密言に曰はく。唵、婀密哩帝吽發吒。

此の密語印を以て加持するに由りて、自身甘露尊に等同なり。意の所樂に隨ひて四臂

國譯甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌

八臂乃至兩臂千臂を觀念すべし。本尊の瑜伽三摩地に住して、ますく歴然分明にすべし。

次に(一)金剛部母莽莫鷄印。

二手内に相叉へ、忍・願・檀・慧・禪・智並べ伸べて三股金剛杵の如くし、印を結び成じ已はりて、此の密言を誦すべし。曰はく。  
曩謨囉但曩但囉夜也、曩麼室戰拏囉曰囉播拏曳、摩訶藥乞叉細曩跋但曳、但爾也他、唵、矩蘭駄里、滿駄滿駄、吽發吒娑嚩訶。

(一) 金剛部母莽莫鷄印。大禪に莽莫鷄印。亦金剛杵の母なり。身を嚴れり。此は生れ命剛智力を出説ける。三昧なり。

前の如く自身の五處を印せよ、部母の印を以て加持するに由るが故に、悉地現前することを待。一功の摩障悉く皆遠離す、人間所有の怨敵、不善心の者皆摧壞することを得て大慈悲心を發す。瑜伽者に向はんに、忽ちに惡夢を見、或は不詳事を現せんときは、一切皆消散することを得て大吉祥を得ん。瑜伽者即ち觀せよ、此の聖者本尊の前に在りて蓮華臺に坐せり、頭冠瓔珞天女形の如し、左手に五股金剛杵を持ち、右手は(二)施無畏印勢にす。即ち想へ部母の口中より金字の本尊の密言を流出すと。行列して具に光明あり、瑜伽者の口に入りて舌上に右旋して華鬘の如し。是の如

(二) 施無畏印。佛が無畏を衆生に施す印。腕を擡げ、五指伸べて掌を外に、如き形にす。

く觀行を作し已はりて、頂上に此の印を解散すべし。

次に本尊三昧耶印を結ぶ。

檀慧相交へ掌に入れ、戒方を並べ屈して又へたる間を押す、忍願並べ申べ、進力屈して鉤の如くし、忍願の初節の後に住して三股金剛杵の形の如くし、禪智並べ申べて戒方の背を押して忍願の間に處せよ。此の密言を誦じて曰はく。

曩謨囉但曩但囉夜也、曩麼室戰拏囉曰囉囉俱嚩駄也、唵、戶嚩戶嚩、底瑟吒、底瑟吒、滿駄滿駄、賀曩賀曩、阿密哩帝吽發吒娑嚩訶。

七徧を誦じて、了了分明に本尊を觀じ、及び自身を本所尊と爲すべし、此の印密言の加持に由るが故に聖者本誓を越えず、悉地を授與したまふ。(三)即ち捻珠兩手の中に安じ、未敷蓮の如く合掌し、捧戴して金剛語菩薩の密言を誦じて加持すること七徧すべし。密言に曰はく。

唵、嚩囉嚩嚩也惹跋、三麼曳吽。

此の密言に由りて捻珠を加持して、即ち密言を誦すること一徧して、一珠を移せば即ち密言一千徧を誦すると爲す。二手の五指頭指を以て心に當て、珠を捻じ餘の三指散じて

(三) 即ち捻珠なり。下は加持捻珠なり。

國譯甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌

直くし、在手に珠を引く。右手に珠を指し、轉法輪の相の如くして念誦すること一百八徧、或は一千徧せよ。若し一百八徧に満たざれば、即ち祈願の徧數に充たす。念誦の時心間斷せず、身を觀じ本尊と爲せよ、之を誦する時聲を出だすべからず、緩ならず急ならず、娑嚩賀の字に至りて珠を移すことを齊しく畢はるべし。數限滿ち已はりなば、念珠を捧げて加持して安置すべし。又本尊三昧耶の印を結び密言を誦すること七徧し、然して後に部母の印を結びて七徧を誦して想へ。自口中より却りて本所持の密言を流出す、金字行列して部母の口に入る。兼て所持の本尊の密言の徧數及び功德を部母に付與す、収掌し守護して終に散失したまはず。然して後に(一)金剛縛(二)の定印を結べ。(三)本尊の密言の字輪實相三摩地に入りて、即ち兩の目の瞳人の上に唵字を觀せよ、色燈焰の如し、微かに頸を屈し目を閉ぢて、心の慧眼を以て心道を照了せよ、胸臆の内に當りて圓滿の菩提心月輪を觀想して、炳現して身器に在り、了了分明にして外の散動を離れ、智慧の定水澄淨なるに由りて、菩提心月の影中に現はるゝことを得、よく心を一縁に專注して、即ち圓明上に心密言を以て、右旋して一々の字を布列して、意に誦じて乃ち三五徧に至る。即ち觀せよ、初の阿字は、一切の法本來無所得なり、義と相應

(一) 金剛縛の定印之に二種あり、内縛と外縛とあり、今は外縛なり。  
(二) 本尊の密言已下字輪觀なり。

する時但し心理を緣じて字を緣せず、一道清淨にして法界に周徧す。即ち第二の阿字門に入りて即ち觀せよ、一切法本不生なりと。既に觀じ已はりて即ち第三密哩字門に入る、一切の法我不可得なり、即ち平等真如の自性成就の恒沙の功德を成す。次に第四の帝字門に入るべし、一切の法真如不可得なり、諦かに觀じ已はるに、内に微細の能所縁の因縁の法義あり。即ち第五の吽字門に入る、一切の法因不可得なり、因無所得なるが故に果も亦た所獲なし、次に第六の頗字門に入る、一切の果不可得なり、果無所得なるに由るが故に、即ち究竟圓滿の法身を成す、一切の無漏の法の諸の依止なり。即ち第七の吒字門を觀せよ。一切の本不可得なり、一切の法無諍なるに由るが故に、一切の法本不可得なり、一切の法無所得なるに由るが故に、一切の法本無生なり、一切の法無生なるに由るが故に、一切法我不可得なり、一切法無我なるに由るが故に、一切法真如不可得なり、一切法真如無所得なるに由るが故に一切の法果不可得なり、一切の法果所獲なきが故に、即ち一切の法諍を離る、一切の法無諍なるに由るが故に、清淨無戲論の實相三摩地を獲得す。周りて復た始めよ、一念清淨の心相應するに由るが故に、無礙の般若波羅蜜を獲得す。無始の時より來の一切の業障、報障、煩惱障



(二)後の十六生後世にあらすして功德の生なり。

(三)火院密縫の印前出。但し此の印を以て諸印を解くなり。

(三)三部の印、蓮花部、金剛部、蓮花部の印なり。  
(四)護身の印、被甲護身の印なり。

一時に頓滅す。十方一切の諸佛及び本尊現前して、久しからずして、隨意所樂の世間出世間の悉地成就を獲得し、現生に初歡喜地シヨクワンギダの菩薩を證し、(二)後の十六大生に無上正等菩提を證すべし。則ち定より出で、二手金剛合掌して、運心して本尊及び聖衆セウシユウを觀じ、微妙の讚歎の聲調を以て功德を讚揚す。又五種の供養を以て前の如く運心して之を獻せよ。又闕伽を獻じて心中求むる所の悉地を聖衆に啓白せよ。惟し願はくは聖者本誓大悲の弘願を越えず、我れに悉地を授與したまへと。則ち(三)火院密縫の印密言を以て左に轉じて前の諸の結車輅の印を解け。本尊及び眷屬車輅に乗じたまふと想へ、外に向ひて忍願を撥せよ。聖衆を送りて本土妙喜世界に還皈せしめ奉れ。密言前の如し。又前の金剛部母を結びて、智度を以て外に向ひて、擲ちて此の密言を誦じて曰はく。唵、嚩日囉孽絳孽絳、婆譏鏤、阿密哩多軍拏里、娑嚩婆嚩南、補曩囉譏麼曩也那娑嚩訶。

又(三)三部の印を結びて密言を誦すること三遍し、(四)護身の印を結び已はりて佛菩薩を禮し、意に隨ひて經行し、大乘經典を讀誦して、福を以て一切の有情に廻向して、心中所求の悉地を衆生に速疾に獲得せしめんと願ふべし。瑜伽者食を喫する時。都主の

密言印を以て自身の五處を加持して、然して後に食を喫せよ。寢食の時は部母の密言を以て自身の五處を加持せよ。便易及び諸の穢處には、(一)烏樞瑟摩金剛の密言印を用ひて五處を加持せよ、諸魔其の便を得ず、速に成就することを得。烏樞瑟摩の心密言に曰はく。唵、俱囉駄曩吽弱。

(一)烏樞瑟摩金剛の密言印、烏樞瑟摩金剛の密言印なり。  
(二)烏樞瑟摩金剛の密言印、烏樞瑟摩金剛の密言印なり。  
(三)烏樞瑟摩金剛の密言印、烏樞瑟摩金剛の密言印なり。  
(四)烏樞瑟摩金剛の密言印、烏樞瑟摩金剛の密言印なり。

國譯甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌

終

國譯甘露軍荼利菩薩供養念誦成就儀軌

(二)十方の所有の  
佛 五佛をいふ。

(三)普賢 金剛薩  
埵なり。

(三)東方 壇の東  
方なり。

(四)二の闍伽器  
漱口器と澆淨器と  
なり。

(五)爐 香爐なり

(六)五輪 五體を  
いふ。

### 國譯大威怒烏芻澀麼儀軌

唐北天竺三藏沙門大廣智不空 詔を奉じて譯す

(一)十方の所有の佛の妙智を以て悲濟し玉ふ者は、常に菩提心に住し玉へり。是の故に我れ稽首し上る。(二)普賢即ち諸佛に於いて、職を受け金剛を持し、難調を調伏せんが爲めに、此の明王の體を現す。其の法勝を以ての故に淨と不淨と俱なり。眞言は先づ最初の承事の法を脩せよ、紫檀を以て地に塗れ、方にまれ圓にまれ意に隨て成せよ。彼の(三)東方に於て前に本尊の像を置き、(四)二の闍伽器を取りて香水を以て充足せよ。(五)爐に衆の名香を焚き、一の空器を以て水を承けんとして壇の内に布在せよ。食と或は不食と俱なり、洗滌することも亦た是の如し。(六)五輪を地に投じて、十方の佛と菩薩と方廣大乘經とを體せよ。掌を合して至心にすべし、右膝を地に著くべし、多生の非善の業衆罪を、具さに陳べ難きを今誠實の心を以てし、懺するに隨て願くは清淨ならんと。前の如く發願し已りて全跏或は半跏にし、大菩提心を興し堅固にして時として捨つること無れ。名香を手に塗り佛部三昧耶を結べ、二羽を虛心に合せ、進・力を開きて微し屈し、



囉也、囉訖叉、囉訖叉、唵娑訶。

三徧之を稱誦すれば、亦た本尊の頂に同じ。前の二契の相の如くし、進力皆な屈し、相捻し、勢ひ環の如くし、即ち五處の甲を成す。

唵、薩嚩伽髻、摩訶帝髻、嚩曰囉舍寧、嚩曰囉播舍、摩那鉢囉尾舍、薩嚩努瑟姪、娑擔婆也、娑擔婆也、吽泮吒。

内に其の二羽を又へ掌を開き、諸度を舒へ檀・慧を合して峰と成し、微しく禪・智の節を屈して、互に進力の側を捻し、甲を近け普焰を成せよ。大心眞言を誦し、胸に當て其印を安き、三徧明句を持すれば、心、本尊に同ず。甲の進・力の環を改め、極めて舒べ自ら相合はせ針の如くせよ、棒印と名く。其の後の眞言を誦せ。

唵、俱嚩駄曩吽惹。

普焰の契を又陳べて禪・智を針狀に成し、眞言は根本を用ゐよ。獨鈷金剛と名く。

唵、吽發吒發吒、卽佉囉戍囉播寧、吽吽吽、發發發、唵擾羯寧囉曩娜、吽吽吽、發發發、唵唵唵、摩訶麼囉娑嚩訶。

本尊身に徧入すれば、即ち大方の體に同じ、其他を堅持するが故に、金剛概を用て結

び、戒度をば方・慧の間にし、忍をば亦た願・力に入れ、方をば復た檀・戒に入れ、願をば忍・進の中に處し、餘度は皆な直く舒べて相合せて三鈷を成じ、禪・智を以て地を柱へ、一たび掣して一たび明を稱せよ。

唵、枳里枳里、嚩曰囉嚩曰哩、勃律滿駄滿駄吽發吒。

下、金剛輪に至り、堅固にして能く壞することなし、前概に准じて本と爲し、禪智を極めて開きて直に豎てよ。即ち壇を成じ三轉して明を誦して曰く。

唵、娑囉娑囉、嚩曰囉鉢囉迦囉吽發吒。

諦かに所居地を想ひ、澄徹して大海生せりと。次の後の眞言を誦すること七徧すれば、當さに成就すべし。

唵、尾麼盧娜地娑嚩訶。

次に應さに其の海より大須彌山を湧かすと思ふべし。復た此の眞言を誦すること七徧を経て方に止めよ。

唵、娑者囉吽。

又た想へ寶山の上に師子座莊嚴せりと、其の明、後の如く誦すること亦た七徧して止

めよ。  
唵、婀者囉味囉娑囉訶。

師子法座の上に百千葉の寶蓮あり、香潔にして盛りに敷榮すと想ひて、此の密言を誦して曰く。

唵、迦麼囉娑囉訶。

彼の蓮華の裏に於て樓閣あり、衆寶を以て成す、懸るに妙なる縉旛を以てし、(二) 於羯尼の名なり。 寶石

尼を以て網と爲し、眞言を後の如く誦すること七遍して想ひ隨て成す。  
那莫薩囉但佉孽帝毗逾、尾濕囉慕契毗藥、薩囉佉欠耶娜誑帝、娑頗囉兮給誑娜劍娑囉訶。

次に復た<sup>(三)</sup>香爐を執り、治路の明を誦して曰く。

唵、蘇悉地羯哩入嚩里多、鄭多慕囉多曳、入嚩囉入嚩囉、滿駄滿駄、訶曩訶曩吽登吒。

空中の有ゆる關鍵、及び障難は皆な除かる。次に寶輅の印を結び、諸の聖衆を邀迎せよ。  
<sup>(三)</sup>單に己にまれ、眷屬と并なるにまれ、意に隨ひて之を奉請せよ。二羽を内に又へ、

<sup>(二)</sup> 於羯尼 寶石の名なり。

<sup>(三)</sup> 香爐 香爐を以て空路を清め治す、諸佛の路は空中なるが故に、又香は佛の使なるが故に。

<sup>(三)</sup> 單己 本尊唯獨なり。

進・力舒べ相拄へ、禪智を以て進・力の根の側の第一文を捻すべし。其の腕を極開き、指の背を互ひに掌に著くべし。眞言を誦すること三遍せよ。七寶の輅車成す。  
唵、觀嚩視嚩吽。

<sup>(二)</sup> 阿摩迦囉底 毗沙門天宮なり。

念へ、本尊の居し玉へる<sup>(二)</sup>阿摩迦囉底に至ると想へ、車輅に乘じ已ると。次に之を奉請すべし。前の寶車輅に准じて、忍・願・禪・智・撥して内に向ひ請契を成し、眞言は後の如く誦せよ。

曩麼悉底哩野地尾迦南、薩囉但他誑跋南、唵、嚩日嚩儂娘野迦囉沙野、隨係曳咽若し奉送ならば即ち薄誑挽娑囉訶。

聖者寶車に昇り、金剛駕に御し至る。當さに部主契を以て、道場に降入し玉へと請ふべし。二羽を内に相又へ、禪を進・力の際に入れ、拳を成して智度を豎て、招く毎に後の明を誦せ。

唵、嚩日囉特力、隨係曳咽婆誑挽嚩日囉特力、若し奉送の時は隨係曳咽を除きて摩蹉摩蹉を加ふ。

棒の契を以て又た旋らすべし。次に忍・願度を舒べ、自ら進力と與に並べ、右を上居き相又へ、股の如く徐ろに之を動かせ、諸の障者を剪除するなり。眞言の句は後の如

くして三轉して右に周旋せよ。

唵、嚩囉俱嚩、馱摩訶麼攞、羯囉羯囉、親那親那吽發吒。

次に金剛網を結べ。前に準じて概印に於て禪を進の根下に捻し、智も亦た力叟の根の側の第一の文に加ふ。眞言は後の如く稱せよ。牆に網を以て彌覆すとおもへ。

唵、尾塞普囉捺囉乞叉、嚩囉半惹囉吽發吒。

火院密縫の印は、二羽を並べて舒べ、定に慧羽を以て加へ、直に禪・智度を堅てよ。三周右旋し已れば、皆な後の眞言を誦せ。

唵、阿娑憐儼爾吽泮吒。

金剛牆の外に圍らして、威焰熾然として住す。堅固の界を成し已ぬれば、能く之を沮壞することなし。當さに右膝の傍の闕伽香水器を奉るべし。舉げて額と齊等にして、大心眞言を誦して慰懃に之を持獻せよ。聖衆の足を浴することを成して、心に希求する所の願を此に於て具陳すべし。微しく空器の中に澆き水を置き、本位に在け。前の蓮華部の如く彼の三昧耶を結び、六度の端を鉤し、微敷蓮の勢の如くすべし。想へ金剛業の爲めに三たび後の眞言を誦せ。

唵、嚩囉味囉耶娑嚩賀。

前の如くの運想已ぬれば、衆聖儼として座に依り玉ふ。次に當さに心を以て供養すべし。水陸の有ゆる諸の華の主の攝する所なき華と、十方盡空界の人天の塗香等と、燒香と、燈明との雲と、傘蓋と、及び幢幡と、鼓樂歌舞の伎と、眞珠の妙羅網に懸るに諸の寶鈴を以てすると、白拂と華鬘と微妙音の磬等と、矜羯尼を網と爲せる如意寶樹王と、衣服と、天厨雲の上妙にして美く香潔なると、樓閣の寶を以て嚴飾せると、天の瓔珞と及び冠と、是の如くの供養雲の虚空界に徧滿せるを誠心にして運想せよ、又た印眞言を以てせよ。聖力の加持する所を以て、虚空庫の供給を衆聖受用し玉ふこと眞實にして、殊なりあることなるべし。十力を相交へ、右を以て左を押し合掌し、印を舉げて頂に按じ、樓閣の眞言を用ゐよ。次に美はしき言音の金剛の妙歌を以て讀し上れ。摩訶麼攞也贊拏也尾爾夜囉惹也、難拏寧尾曩野迦地哩多娘也、那莫俱嚩馱野嚩囉吽發吒。戒・方・進・力を屈して二羽虚心に合せよ、屈せる度は皆な相著けよ。遂に部母契を成じ、明を誦し、寂靜意にして七徧して本尊を護れ。

唵、矩嚩馱哩、滿馱滿馱吽發吒。

珠を合掌の中に蟠<sup>わだかま</sup>げ、大心を誦<sup>よ</sup>すること七徧し、智・方を目ら相捻し、禪・戒も亦復た然り、餘の度を皆な直く舒べ、進を忍の背に捻し、力も亦た願の上に附け二の環にし、用つて珠を承け思惟せよ。己心の中皎白なること満月の如し、分明に觀に住し已りて、部母の眞儀を想へ。所持の密言は口より流出して字字皆な金色にして、普く無量の光を放ち、相繼ぐこと珠を連ぬるが若し、行人の口より入りて月輪の上に散布し、色を變ずることは本尊に隨ふべし。焰鬘自ら相ひ穿ち、文句は錯謬なからしめよ。行人は威武の相にして、秘眞言を稱誦し、歸命と唵<sup>おん</sup>とは皆な寂にせよ、餘文は瞋猛の意にして、末の字にて戒を以て一珠を捻り、句と與に齊ふすべし。此の三昧門に住し力を極めて持念すべし。修行を將さに止息せんとせば、念珠を掌中に於て前の如く再び加持し、頂戴して本處に還せ。須臾に住して靜かに月輪の上の眞言の義理、及び文詞を觀じ、諦かに其の實相を思へ。次に當さに定を出で已るべし。眞言は金色光にして、口より連珠の若く部母の處に歸し奉る。是の如くの願を作すべし。此の眞言を攝受して、慈悲を以て之を加護し、功用をして失はしめ玉ふこと無れと。所得の徧數は部母を誦し、加持すること七徧して以て之を護れ。應さに是の如くの願を作すべし。一切の有

情の類の諸の苦惱は、身を逼して其の菩提の中に於て、法器を堪任せざらんことを、我れ彼等を濟はんが故なり。獨り己身のみ濟はんとは非ず、惟れ願くは世尊に於て成就しなば、徧數を還し玉へよ。三部の三昧の契を、初めの如く重ねて之を作せ。次に本尊の身を護するには、前の部母の印を以てせよ。左の闕伽器を捧げ、奉獻して所求を陳べよ。儀式は前に異らず。次に運心に供養せよ。火院密縫印を頭上にて左に之を旋らし、諸印を都て解除せよ。當さに聖衆を奉送すべし。降入道場の契を以て、智度を以て外に之を彈せよ。又た請車輅を結び、聖衆を其の上に昇り玉ふとおもひ、禪・智を改めて外に撥せよ、想へ本宮に歸り玉ふと。前の如く己身を護り、意に隨ひて道場を外<sup>い</sup>でよ。塔を印するに、當さに方廣大乘經を轉念すべし。心に祈る所の上中下の悉地を廻助し、諸の觸穢處に往き、慧羽を握りて拳と成し、禪度を豎てて峰の如くし、身を護り五處を加持し、眞言は棒の印を用て衆の魔羅を被らざれ。此の徧運心に説き、飲食を加するに尤も上<sup>う</sup>れたり、辨するに隨つて任<sup>ま</sup>に陳布せよ。大心眞言を用よ。萎華を去らんと欲する時は、此の秘密を誦して曰く。

唵、濕<sup>シ</sup>瘞<sup>ペ</sup>帝<sup>イ</sup>摩<sup>マ</sup>訶<sup>カ</sup>濕<sup>シ</sup>瘞<sup>ペ</sup>帝<sup>イ</sup>、佉<sup>キ</sup>娜<sup>ダ</sup>寧<sup>ニ</sup>娑<sup>ソ</sup>嚩<sup>ワ</sup>賀<sup>カ</sup>。

若し睡眠を欲せば、部母を以て身を護り、部主契眞言を以て其の處所を護せよ。前の降入契の如く、智度を以て進の傍を押せ、當さに後の眞言を誦すべし、警むるまで想ひを以て、當さに清淨なるべし。

唵、嚩日囉特力。

精を失ひ及び悪夢あらば、部母の明を百遍すべし。凡そ食を喫せんと欲ふ時には、食を圍め、其處に置き、所持の明を以て加護して本尊に奉獻せよ。部主の前の眞言を以て食を加持し乃ち食し、次に(一)四微密儀軌を陳べ、當さに修習すべし。(二)扇底迦は寂災なり、聰明と及び長壽と並びに冤と禍とを除く法なり。北に面し脛を交し居て、膝を豎て右脛を先にせよ。衣服を當さに潔白にすべし。食飲と香と華と地と燈燭とも亦復た然なり。月輪に眞言文字を布き、亦た白なるべし、先きにも歸命と并べて誦して三七にして乃ち之を除き、唵より起りて初めて爲し、某甲の與めに禍を除き玉へと云ふべし。娑嚩訶は最後なり、本と無くんば事に臨みて加へよ。念誦は小聲を以てし、當須に寂靜の意なるべし。若し火壇を作らば圓く其の爐形を穿ち中に於て輪に泥るべし。尊を護するに忿怒の相にせよ。若し増長を求むれば(三)布瑟置迦と名くる五通と轉輪と、寶

(一)四微密儀軌、増、增、敬、愛、降、伏の四法をいふ。  
(二)扇底迦は息災の梵語なり。

(三)布瑟置迦、増益の梵語なり。

(一)續施迦羅、敬愛の梵語。

(二)阿毗遮嚩迦、降伏の梵語。

藏・輪・劍・杵の一切の財物を致せ。藥丸・眼藥・俱なり。東に面して結跏趺せよ。其の色は皆な赤を上ぶ、眞言の句を増減すること前の如く、復た殊なることなし。娑嚩訶を稱へんと欲はば、其の所求を願の如くならんと云ふべし。小聲にして寂靜の意にし、尊を護るに忿猛に爲し、火壇は方に爐を穿ち、杵を安くに三鉢を具せよ。若し歡喜法を求むれば(一)嚩施迦羅と名く。人及び天龍鬼神非人類を召し、西に面して半跏坐し、赤を上ぶこと増長と同くせよ。歸命の文を加減し、娑嚩訶も亦た爾なり。某甲の與めに某を攝して願所求を成就し玉へと云ふべし。明を持するに歡喜心を以てし、尊を護するには寂靜の意を以てし、并に忿怒の相を以てせよ。二種を以て皆な之を護り、爐は八葉の蓮の如くし、開敷して臺藥を具せよ。若し降伏法を作さば(二)阿毗遮嚩迦なり、鬼神と惡人と三寶を損壞する者を制せよ。左足の指を以て右を押し、南に面し坐し蹲踞せよ。大忿怒の形を示し、諸色は青黒を上ぶ。心中に圓明を觀せよ。變じて大日輪に同じく、熾盛にして與に儔ふものなし。輝を發すること猛焰の如くにして、娑嚩訶を除くして、願はくは某甲の爲めに某の事を成じ玉へ叫發吒と云ふべし。火爐は三角に作れ、獨鉢杵を中に置き、眞言を猛勵に稱して傍人に聽ゆる如くせよ。尊を護するには寂靜

翻譯大威怒烏菟羅慶儀軌



の意にせよ。事法を次に陳ぶべし、相應して本尊を置き、中間は是れ爐の位なり。或は精室の外に於て、爐より遙かに尊に對して、地を治すること二肘間、形は爐口の勢に隨ひ、塔を築き高さ一指にせよ、中量を一肘穿ち、深さ半肘にして爐を成し、周りの縁は高さ四指にし一寸外方に作れ。爐を作るに法の如く治し、輪・杵・を泥りて之を爲し中に置き、其の底に稱はしめよ。瞿摩夷を以て塗飾し、檀香等を又た施し、其の色は所求に隨へ。塔上の祥茅草は日に隨ひ、右に旋して布せよ。本を以て其の苗に覆へ、所燒の物は茅に在いて行人の右手に近けよ。二器の闕伽水を茅に置き左邊に在け。柴相は類に隨ひ推り、長さ力指量に截り、酥・密・乳・酪の内にして其の薪の兩頭を搵し、半爐に炭を熾して充てよ、投げて亦た威熾を起せ、火を熾つて舊を以ゆること勿れ、扇を用ひよ、口を以て吹くこと非れ。爐に燃えんには後の明を誦すること三徧すれば加持を成す。

唵、步入嚩囉吽。

火既に火燄を發しなば、當さに忿怒王を用て、垢を瀉して能く淨除すべし。秘契は是の如く結べよ、二羽の背を相著け、八度の頭を以て鈎し、腕を轉じて反つて相合せ、拳を成

して徧に物を印せ、觸るる毎に皆な次後の秘眞言を稱誦せよ。

唵、枳里枳里嚩囉吽頗吒。

又た當さに火天を請すべし、直に其の慧羽を舒べ、禪を横へて掌に納れ、微しく進度を以て招げ、招ぐ毎に後の明を誦し、三輪すれば火天降し玉ふ。

唵、瞿係曳呬、摩訶步多泥嚩哩使備尾、惹娑多摩佉哩呬怛嚩、護底芥訶囉麼塞泐散備呬都婆嚩、阿佉曩曳賀尾也迦尾也嚩訶曩也娑嚩訶。

便ち想へ爐の内に入り玉ふと。次に三昧耶を結べ、禪を檀度の初めに捻し、餘の波羅蜜を舒べよ。直に闕伽水を火に灑ぎて淨除と成し、三灑して皆な明を誦せよ、眞言の句は左の如し。

唵、阿蜜哩帝訶曩訶曩吽發吒。

次に其の慧羽を以て、右に旋して闕伽水を灑ぎ、文殊の密言を誦して、想へ火天の口に漱ぐと。

唵、嚩囉娜、嚩囉曇。

大約は定の羽に執り、小をば慧に持すべし。三度名酥を取りて其の大約に灌ぎ滿し、

慧は小を捨て、大を執り、劍等あらば之に按じて、次後の眞言を誦し、句の終りに火の上に灌げ。

阿訖曩曳賀、尾也迦尾也嚩訶曩也、爾波也爾波也娑嚩賀。

其の訶字に至る毎に皆な聲を引き長く呼び。空杓を卻けて之に按じ、其の音と齊く畢れ。劍藥の類に加するに非ずんば、但だ灌いで杓を按せざれ。是れ即ち火天を祀るに、三度皆な此の如くせよ。前に依り再び火を淨め、口に漱ぎ、文殊を用ひ、火天を請じて爐を出し、東南方の位に就けしめ。當さに諸の供養を設け、次に部主尊を請ふべし。爐の中に行人より遠く諦想せよ、位に依りて住すと。又た本尊を念じ爐中に入れ、行人に近けよ。部主と相當して二聖を儼として對せしめ、忿怒王を以て瀉垢し、火を淨め口を漱ぎ、明かに法の如く重ね之を爲せ。二羽を膝の間に住し、前の火を祀る法の如くせよ。各各三杓の酥を獻じ、澆す毎に想へ、己身と本尊と部主と火と及び劍藥の等と、一相にして殊りあることなしと。五の體既に合同せば、各々本明を以て獻じ、是の如く供養し已れ。求事に隨ひて護摩し、其の所燒に應すること杓に宜しく、或は手に宜しく觀せよ。所須の杓の類を用ゐんには、前の小さきを取り澆らして、執り已れ

ば進度を舒べ、其の柄を順ならしめ、檀・戒及び忍等を共に禪度の初を握り、定羽を以て其の珠を拵り、一たび誦して一たび火に投じ、徧數既に畢れば、前の如く各各酥を獻じ、二聖を壇に歸し上れ。又た火天を請ひ祀れ、酥を三たび大約し畢り、位に依らしむること、其の切の如くし。若し八方を祀らんとせば、一一を皆な請ふべし。諸の供養も亦た爾り。解界して儀の如く送り、火天の契を次に陳べ、前の請召の時の如く、進禪を以て相捻し。後の明を誦すること一徧して、火天を宮に還し上れ。

布爾觀徒麼也薄底也、孽蹉阿訖爾娑嚩婆嚩南、補娜囉跋夜誑摩那也娑嚩訶。

前の如く己身を護り、衆魔は復た擾かす、若し佛と菩薩と金剛と諸の天王と婆羅門と居士と粳米と酥と飯と甘露と乳と果との等きを、華と林と若くは山に登り、塔及び樓閣に履り、或は車と馬と象と白鶴と孔雀王と金翅鳥とに同くし、海と清き流水とに及び、或は空に騰ること自在にし、威焰は身に徧し、聽法の座の中にあり、及び諸の清淨の事を夢みば、此れ皆な成就の應なり。覺め已れば復た眠る勿れ。若し魁胎の人と猪と驢と駱駝と狗と、或は觸れ或は近きに在り、死屍も亦復た然り。惡鬼と怖畏して歩ることを夢みば、是れは障ありて成らざる相なり。或は妄念の起ることありて、三昧

耶に違闕せば、當さに此の眞言を誦して其の過患を除くべし。如前の金剛杵の進力を改めて相合せ、忍願を甲の傍に依せて上に遶らして、亦た相ひ挂へよ。眞言は後の如く誦すること三七せよ。障り皆な銷せん。大輪明に曰く。

娜莫悉底哩野地尾迦南薩嚩但他誑多南、菴尾囉耳尾囉耳、摩訶斫羯囉嚩曰哩、薩哆薩哆、娑囉帝娑囉帝、哆囉以哆囉以、尾澹末爾三畔惹爾哆囉末底、悉駄孽麗但藍娑嚩訶。

凡そ觀想する所の時は、目を閉ぢ心を凝らし作して了了に分明にし、己れ目觀するが如くせば道は成らざるべし。護世八方天の眞言は後に説くが如し。

摩醯首羅王の位は東北の隅に居す、眞言は後に種するが如し、諸天の遵奉する所なり。

唵、嚩捺囉也娑嚩訶。

東方は帝釋の位なり、眞言に曰く。

唵、設訖囉也娑嚩訶。

東南方は火天と名く、眞言に曰く。

唵、佉娑曩曳娑嚩訶。

南方は閻羅天の位なり、眞言に曰く。

唵、吠嚩娑嚩哆也娑嚩訶。

西南方は羅刹王なり、眞言に曰く。

唵、囉乞叉娑地跋多曳、娑嚩訶。

西方は水天の位なり、眞言に曰く。

唵、冥伽、捨曩也、娑嚩訶。

西北方は風天の位なり、眞言に曰く。

唵、嚩也吠、娑嚩訶。

北方は毗沙門天の位なり。眞言に曰く。

唵、藥乞叉尾爾夜駄哩、娑嚩訶。

八方の尊を迎請し、及び須らく供養すべし、其の所願の事に隨ひて、皆な本の眞言を用ゐよ。凡そ曼荼羅を建て、及び諸の事法を興さんには、皆な先づ供養を施し、飲食・香・燈明・鬘伽・華・塗香・等の物を皆な周布く布き、永く一切の障を無くして、所願皆な心に遂はん。本尊及び部主には皆な本眞言を用ゐよ。

國譯大威怒烏芻澀麼儀軌 終

靈十九、縮開十二  
續藏二套五

國譯大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴  
王經卷上

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戶賜紫贈司空諡  
大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空 詔を奉じて譯す。

(一) 薄伽梵 佛の  
こと。  
(二) 鷲峰山 又は  
靈鷲山とも稱し印  
度摩訶陀國王舍城  
の東北角に在る山  
の名、佛の常に説  
法せし處なり。  
(三) 大慈菴衆 佛  
門に入りし人とし  
て所謂乞士さか又  
は沙門と稱す。  
(四) 慈氏菩薩 彌  
勒菩薩のこと。  
(五) 上首 上座の  
意。  
(六) 俱胝 梵語  
億と譯す。  
(七) 蘇迷盧 須彌  
山のこゝ。世の中  
央の大山なり。

是のごとき我れ聞く、一時(一)薄伽梵、王舍城(二)鷲峰山中に住まして、大(三)慈菴衆一  
千人と俱なりき。菩薩八萬四千、みな無上正等菩提に於て、不退轉を得たり。謂はゆ  
る、(四)慈氏菩薩、文殊師利菩薩、觀自在菩薩、得大勢菩薩、(五)上首となる。復た七十  
二(六)俱胝の諸天衆ありて俱なりき。みな悉く菩薩の乘に住したまふ。復、天帝釋、娑  
訶世界主、大梵天王あり、その眷屬四萬天衆と俱なりき。亦、みな菩薩の乘に住した  
まふ。復た四阿蘇羅王あり。謂はゆる、毘摩質多羅阿蘇羅王・末利阿蘇羅王・驢肩阿蘇  
羅王・歡喜阿蘇羅王なり。百千阿蘇羅眷族と俱なりき。  
復た、六萬二千の諸大龍王あり。いはゆる、難陀龍王・烏波難陀龍王・水天龍王・摩那  
斯龍主・地持龍王・無熱惱龍王・(七)蘇迷盧龍王・伏魔龍王・月上龍王なり。是のごとき等を

國譯大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴王經卷上

(一) 四大天王  
持國天王・增長天王・廣目天王・多聞天王  
西方多聞天は北方は  
南方廣目天は東方は  
北方持國天は南方は  
西方增長天は北方は  
諸天をも稱す

(二) 藥叉 又は夜叉  
(三) 鬼神なり

(三) 大神境通 神  
通と同じ  
(四) 烏鉢羅華 鉢頭紅  
蓮花といふ  
(五) 摩訶鉢頭華 鉢頭紅  
蓮花といふ  
(六) 寶蓋 寶蓋  
是れ衆生濟度のた  
め眞實(本體)の菩  
薩より假現せる菩  
薩なり  
(七) 結跏趺坐 兩  
足を相互に結し  
て坐する坐法なり

(一) 魔羅軍 煩惱  
の軍のこと  
(二) 釋師子 釋迦  
如來のこと  
(三) 牟尼 釋迦如  
來のこと  
(四) 俱胝劫 俱胝  
前在  
(五) 劫とは時間の事なり

(五) 薩婆若 梵語  
一切智と譯す總て  
に通達する眞實の  
智力なり  
(六) 檀那 梵語  
(Dana) 布施と譯  
す。即ち一切のも  
のに惠施すること  
(七) 律儀 戒律と  
儀式のこと  
(八) 勝功德 釋迦  
如來を指していふ  
(九) 寂靜心意 同  
上  
(十) 大梵音 同上

上首となす。復、(一)四大天王あり。謂はゆる、持國天王・增長天王・廣目天王・多聞天王・  
なり。百千の藥叉眷屬と俱なりき。いはゆる、金毘羅大藥叉・阿吒嚩俱大藥叉・針毛大  
藥叉・妙慧大藥叉・形相大藥叉・遍形藥叉・不動藥叉なり。是のごとき等を上首となせ  
り。

時に、王舍城の國王大臣、及び諸の四衆・天龍・(二)藥叉・人・非人等、各々衣服、飲食臥  
具、醫藥種種の資具を以て、如來の所に於て、恭敬尊重して奉獻を爲せり。  
そのとき、世尊、王の請食を受け、晨朝の時に於て、衣を着、鉢を持って、諸の苾芻、  
及び、天人百千人の衆に前後に圍繞せられて、王舍城未生怨王宮に向ひたまふ。佛の威  
神力を以ての故に、(三)大神境通ありて、百千種の妙色光明を放ち、百千の音樂同時に  
俱に奏す。衆の妙華、(四)烏鉢羅華・鉢頭摩華・俱勿頭華・芬陀利華を雨ふらして、繽紛  
として下る。この時、如來神通力を以て、足を按む處に隨て、寶蓮華を涌かしたまひ、  
大さ車輪のごとし。白銀を莖と爲し、黄金を葉と爲し、吠瑠璃を以て、その鬚と爲す。  
華臺の中に、(五)化菩薩あり。(六)結跏趺座したまふ。この諸の菩薩は、寶蓮華と俱に、王  
舍城を遶て、右に旋ること七匝にして、頌を説て言さく。

商主世間を利する者、有情を拔濟して福田と爲し、

釋雄寂靜大威徳、世尊今當にこの城に入りたまふべし。

若し天衆に生れんことを樂求するあらば、生老病死の苦を解脱し、

(一)魔羅軍を摧伏することを求めんと欲はば、當に(二)釋師子を供養すべし。

(三)牟尼の名號は甚だ聞き難し、(四)多俱胝劫に精進を行じて、

世間を悲愍して利益をなし、大仙今この王城に入りたまふ。

無量無邊劫に施を行じて、飲食衣服及び車乘、

所愛の男女ならびに妻子、及び王位を捨て城に入りたまふ。

能く手足と眼耳とを施し、頭及び鼻と諸の支分を捨つ、

一切の捨功德を具するに由て、殊勝(五)薩婆若を獲たまふ。

善く(六)檀那を學び(七)律義を淨ふし、戒に於て缺くことなし人中の勝、

忍辱を具足せる(八)勝功德、(九)寂靜心意今城に入りたまふ。

精進を修習すること俱胝劫、厭離悲愍して世間を觀じ、

禪定に入りて寂靜に住す、是れ(十)大梵音今城に入りたまふ。

(一) 大法自在 同上  
 (二) 善逝 佛のこ  
 (三) 三十二相 佛の相貌にして、之れ常人と異りて、三十二の端嚴の相あるにより常に三十二相八十隨好とも稱す。  
 (四) 行願 廣く他人を救済せんとの念願のこと。  
 (五) 釋提桓因 印度の天帝釋天のこ。  
 (六) 大自在 大自在天即ち摩醯首羅(濕婆)なり。

無量の智慧、等倫なし、猶ほし虚空の際あることなきがごとし。善忍の功德戒も亦然り、是のごとく勝行皆清淨なり、勤勇を以て魔羅衆を摧伏し不動の慧を獲て憂惱なし、微妙法輪、教に依て轉じ(一)大法自在今城に入りたまふ。それ我が(二)善逝に樂ひ求むることあらば、(三)三十二相以て莊嚴し、彼の菩提心(四)行願成じて、應に往て親近し供養すべし。慾・瞋・癡の諸の煩惱と、乃し餘の覺觀惡思欲を斷じ、速に無量供養の具を辨じて、應當に大師に親近すべし。若し人梵天の位を求めんと欲はば、(五)釋提桓因(六)大自在、妙供具と諸天樂とを以て、應に大牟尼に奉獻すべし。輪王をして四洲に王たらしめんと欲はば、七寶を獲得して願成就せん。千子を具足して皆勇猛、應に人中の尊を供養すべし。長者及び小王を求めんと欲はば、資財を獲得して盡くることあるなし。顏貌端嚴の勝眷屬、速に應に往て牟尼を供すべし。

(一) 攝受 佛の衆生に對する慈悲のはたらきをいふ。

(二) 六種震動 佛の説法せられたる時、大地震動して奇端を現したる事、即ち動・起・踊・震・吼・擊なり。

(三) 刹那 時間の最短をいふ。

若し修行し解脱する者あらば、樂つて殊勝大仙の法を聞け、是の故に汝當に速に往て聽かば、この難聞に於て今聞くことを得ん。そのとき、王舍大城、及び百千の村邑、聚落、此の頌を聞き警覺し已て、その中の男童女童男女、各々華香・燒香・塗香・末香・華鬘・并びに、金銀・華幢・商伎・鼓角・絃管種種の音楽を賣して、一心に思惟して、佛の(一)攝受を願ひ、踊躍歡喜して、恭敬供養す。是に於て、世尊、將に城に入らんとする時、即ち、右の足を舉げ、城の門闔に按ず。城中の地、(二)六種震動して、諸天及び人、百千の音楽、鼓せざるに自ら鳴りて、天の妙華を雨ふらす。城中の有情、盲者は視ることを得、聾者は聞くことを得、狂者は本心を得、裸者は衣服を得、飢者は飲食を得、貧者は資財を得。此の時にあたりて、亦復た、貪慾・瞋恚・愚痴・慳慳・嫉妬・忿慢の逼惱するところとならず。慈心の相向ふこと、猶ほ父子のごとし。彼の樂音の中に頌を説て曰はく。

世尊十方城に入りたまふ、是れ大丈夫師子なり。

(三)刹那に皆な大安樂を獲、盲者は視ることを得、聾者は聞くことを得、狂者は心に復して散亂なく、裸露のものは衣服を獲、

有らゆる飢渴は飲食を得、貧窮の人は財寶を獲ん。

無量の諸天虛空に在り、恭敬禮拜して讚歎す。

華を雨ふらして如來月を供養せよ。鼓角・商佉・諸の樂音、

佛の城に入りたまふを以て悉くみな奏す、その城中の地六種動き、

見る者奇持に悦意を懷き、貪愛瞋癡に逼らず、

慳嫉慢等悉くみな除き、慈心の相向ふこと父子の如し、

如來(二)十力城に入りたまふ時、人民安樂にして悉く歡喜す。

音樂鼓せざるに皆自ら鳴り、非常の極喜悅を獲得す。

みな如來の威神を以ての故に、天人蘇羅世間の衆、

是の如く多種俱時に現じて、奇特殊勝不思議なり、

世尊入城したまふときに當て、廣く多人利益の事を作したまふ。

そのとき、世尊、王舍城に入りたまふ。時に家に居る菩薩摩訶薩あり。是れは豪姓長

者の子にして、摧過咎と名づく。里巷の中に於て、遙かに世尊を觀たてまつるに、相

好奇特端嚴澄眸、諸根寂靜にして、觀る者厭ふことなし。(三)奢摩他に住して、最上調

(二)十力 佛の具  
へたる十種の力用  
なり。佛は十力を  
具へて一切に通達  
し大觀す。

(二)奢摩地 寂定  
のこと。

(二)三十二相 前  
出。八十隨好  
の具へたる圓滿の  
瑞相のこと。これ  
に八十種あり。故  
に八十種好ともい  
ふ。

(三)阿耨多羅三藐  
三菩提 梵語、無  
上正覺と譯す  
悟のこと。

伏、諸根を防護すること、善く象を調ぶが如く、正念にして亂れざること、淨き泉池  
の如し。(二)三十二相、(三)八十隨好を以て、その身を莊嚴せり。時に、かの菩薩、如來  
の色相の端嚴成就せるを見て、極めて尊重淨信の心を生じ、すなはち、佛の所に往て、  
雙足を稽首し、右に遠ること三匝にして、却きて一面に住す。時に、摧過咎菩薩摩訶  
薩、世尊の前に於て、合掌恭敬して、佛に白して曰はく。世尊、菩薩幾ばくの法を成  
就してか、速に(三)阿耨多羅三藐三菩提心を得、希求する所に隨つて、佛國界を淨め、  
佛刹を嚴淨せんや。

是に於て、世尊、摧過咎を哀愍せんと欲せんがため故に、化緣將に至ると知て、衢路  
の中に住したまふ。時に無量百千俱胝の人衆あつて、皆な佛の所に詣て、佛足を稽首し  
合掌して住す。虛空の中に、復た無量百千の諸天有て、世尊を禮敬す。時に、薄伽梵、  
摧過咎菩薩摩訶薩に告げて言さく。菩薩一法を成就して、速疾に無上菩提を證得して  
その音樂に隨て、佛刹を淨むることを獲。云何んが一法。善男子。菩薩摩訶薩は、一  
切の有情に於て、大悲愍を起し、増上意樂、應に無上菩提の心を發すべし。云何んが  
増上意樂。善男子増上意樂とは、若し菩提心を發し已て、少不善の法行を起すべから

(一) 蘊・界・五蘊  
十二處十八界のこ  
と。  
(二) 五蘊 色・受・  
想・行・識なり。

す。云何んが少不善の法行。いはゆる、貪愛を行せず。瞋恚を行せず。愚癡を行せず。若し家に住居せば、威儀あつて調戲の行を行すべからず。若し、出家せば、恭敬利養を求むべからず。善く出家所修の行蘊に住せば謂く一切法如實に通達す。云何んが一切法如實に通達す。善男子一切法とは、(一) 蘊・處・界なり。云何んが五蘊に通達す。應に(二) 五蘊は幻の如く、空性を遠離して所縁なく、寂靜にして不生不滅なりと觀すべし。是のごとく、通達を作せ。亦た通達せられざる者は、亦た所見なく、知もなく、思もなく、亦た分別及び分別する所もなし。一切の分別、寂滅通達するを、名けて菩薩摩訶薩の正行して有情を捨てずとなす。何を以ての故に、彼れ自らその法を知る。是の如く、他の有情のために、有情及び法は皆不可得なりと演説す。善男子、一法成就するに由るが故に、速に無上正等菩提を證し、則ち能く圓滿して、佛刹土を淨む。此の佛刹功德莊嚴成就の法門を説きたまふ時、摧過咎菩薩、(三) 無生法忍を得、歡喜踊躍して、虚空に上昇し、高さ七多羅樹なり。彼の衆の中に於て、二千の有情、菩提心を發し、一萬四千の諸天及び人、塵垢を遠離して、諸法の中に於て、法眼淨を得。こゝに於て、世尊、憇怡微笑したまひ、その面門より、青黃白赤紅紫等の光を放て、無量世

(三) 無生法忍 三  
法忍の一にして一  
切法の不生不滅に  
して盡くることな  
き理に通達するこ  
と。

(一) 伽陀 偈頌の  
こと。

界を照したまふ。照し已て還り來て佛を遶ること三匝にして、頂より入る。是の時に、具壽阿難陀、即ち座より起て、衣服を整理し、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、世尊の前に於て、(二) 伽陀を説て曰はく。

諸法自在に彼岸に到る、十力導師最勝尊、

一切智者世普ねく聞く、唯だ願はくは今説て微笑を現じたまへ。

牟尼云何んが過去を覺り、云何んが未來悉く覺悟せん。

現在云何んが覺知せん、唯だ願はくは演説して微笑を現じたまへ。

一切有情の心行、下中最上の差別あり、

諸想を解脱して彼岸に到り、唯だ願はくは(三) 調御、笑因を説きたまへ。

億那庾多の諸天來て、世尊を禮敬して合掌し、

大衆の中に於て渴仰を生じ、唯だ願はくは牟尼、妙法を説きたまへ。

智を以て彼岸に到る、僣過も得べからず。

一切の勝行を知る、何に縁てか笑を現せん。

かくの如く億俱胝、法を求むる諸天衆、

(三) 調御 佛の、  
こと。



無量の諸の苾芻、皆な來て正法を聽き、  
供養して發願するが故に、無量種の音聲、

一切皆渴仰したてまつる、願くは佛、疑惑を除きたまへ。

佛、具壽阿難陀に告げたまはく。汝、今、この摧過咎菩薩摩訶薩の、虛空に上昇する  
こと、高さ七多羅樹なるを見るや、不<sup>いか</sup>ん。阿難陀、佛に白して言さく、世尊、已に見る、  
伽陀を修し、已に見る、佛の言さく、阿難陀、この摧過咎菩薩は、却て後、六十二阿僧  
企耶百千劫を過て、この三千大千世界に於て、熱惱を離れ劫中當に阿耨多羅三藐三菩提  
を得、寂靜調伏音聲如來正等覺と號すべし。阿難陀、彼の寂靜調伏音聲如來、佛刹功  
德莊嚴、及び聲聞菩薩の衆も不動如來妙喜世界の如くにして異なることなし。是の時、  
世尊この法を説き已て、彼の處より、漸次に、未生怨王の宮に往き、到り已て、苾芻  
衆と各々次第に隨て、座を敷きて坐したまふ。時に未生怨王、その世尊並に苾芻僧の坐  
し已るを知りて、即ち、種種の飲食、色香美味を以て、手づから斟酌して、世尊及び  
苾芻僧に供養したてまつり、悉く充足せしむ。復た上妙衣服を以て、如來のために、  
躬自ら披擯す。披擯し已訖て、佛のために禮を作し、即ち佛の前より、退きて一面に

就き、卑座に處して、佛に白して言さく。世尊、忿恨、及び覆、ならびに諸の過咎、  
及び無知は、何によりて生じ、何によりて滅すや。

佛、大王に告げたまはく。忿恨、及び覆、並びに、諸の過咎は、みな我我所より生ず。

(一) 我我所 自身  
さ及び自身已外の  
境界をいふ。

(二) 我我所とは、無處に建立す。若し功德、及び過患を知らざるを名けて無知となす。

若し、如實に我我所を知らば、智と非智と施設すること能はず。この故に、大王、應  
に是の如く學すべし。(三) 一切有爲の法は本來去なく、亦た言説なしと。大王、法に來  
去なし、來去なきの法は不生不滅なり。生滅なき者は、則ち名けて智となす。而して  
是の無知も、亦た名けて智となす。何を以ての故に、諸法の入出互に相知らず。若し  
所知なくば、之を名けて智となす。

(三) 一切有爲法  
生滅變遷する一切  
法のこと。

そのとき、未生怨王、佛に白して言さく。世尊、甚だ奇なり、甚だ特なり、如來應正  
等覺かくの如く善説したまふ。我れ今、寧ろ法を聞て中天すべくとも、聞かすして、  
壽命長遠ならんことを願はず。この時、大王、また世尊に晡時に説法せんこと請ふ。  
そのとき、世尊、すなはち、聽許し、飲食をし已訖て、衣鉢を收め、靈鷲山<sup>リョウジユン</sup>に往き、  
足を洗ひ、座を敷きて、三摩地に入りたまふ。時に、世尊、爲めに法を説かん<sup>レ</sup>と欲し

(一) 三摩地 梵語  
禪定又は靜慮と譯す。  
(二) 聲聞 佛弟子  
をいふ。

其の晡時に、(一)三摩地より起ちたまふ。ときに、具壽舍利子及び諸大(二)聲聞、みな定より起ちたまふ。時に、文殊師利童真菩薩、亦た定より起ちて、四萬の天子と俱なりき。慈氏菩薩、五千の菩薩衆と俱なりき。師子勇猛雷音菩薩、五百の菩薩衆と俱なりき。みな定より起ちて、諸の眷屬を領して、前後に圍繞して、靈鷲山に詣り、頭而佛を禮し、各各座を敷き、一面に退坐したまふ。時に、未生怨王、諸の眷屬と、前後圍繞して靈鷲山の諸の如來の所に往き、佛の足を稽首して、一面に退坐したまふ。

時に、王舎城に、復た、無量百千の有情あり、悉くみな共に、鷲峰山中に往き、如來の所に至りて、佛の足を稽首し、一面に退坐したまふ。

(三) 一切智 佛の  
證得せし如き絕對  
智のこと。

そのとき、舍利子、佛の威神力を以ての故に、座より起ちて、偏へに右の肩を袒ぎ、右の膝を地に着け、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく、世尊如來、適ま、王舎大城四衢路中に於て、既に摧過答菩薩摩訶薩のために、略して菩薩摩訶薩圓滿佛利功德莊嚴を説きたまふ。善いかな、世尊、唯だ願くは廣く説て、諸の菩薩の如く、菩薩の行を行じ、無上菩提を退轉せしむること勿れ。(三)一切智を獲て、魔羅を摧伏し、諸の

(一) 外道 內道、  
(佛敎)に對して印  
度波羅門敎等をい  
ふ。  
(二) 薩婆若智 佛  
の有する如き一切  
智。

(一) 外道を降し、諸の煩惱を淨め、佛刹を嚴淨して、その願を滿じ已て、善巧慧を起して、佛地を離れ、聲聞及び緣覺地に住して、善く法輪を轉じ、諸の波羅蜜を修し、それをして(二)薩婆若智を獲得せしめ、現に菩薩と無量無數の有情との爲めに、大利益をなし、この會中に於て、菩提を求むることあり。善男子、善女人、親り佛に従て、妙法を説きたまふを聞きて、歡喜踊躍することを得、彼れ歡喜し已て、説のごとく修行す。そのとき、世尊この思惟を作さく、我れ今現に、是の如くの神通を起し、この神通現行の境界に由りて、普ねく十方に遍じて、即ち、多百千の光明を放ち、一一の光明、多佛刹に於て、那庾多百千の光明と作り、かの諸刹土の中を照曜して、日月を映蔽す。是れその光明は、眼根所有の諸天龍・藥叉・摩尼・雷火等の光を映奪して、悉く復た現せず。亦た地獄の色相及び、餘の有情の光明もなく、乃至、十方諸世界の中、輪圍山・大輪圍山・目真隣陀山・大目真隣陀山・蘇迷盧山王・及び餘の黑山・牆壁・樹林・佛の光明を以て、照曜するが故に、みな悉く透徹す。

そのとき、世尊この光を放ち已て、譬效の聲を作して、十方無量の世界を警覺したまふ。この時、東方この世界を去りて、八十四殞伽沙數の諸佛刹土を過ぎて、世界あり、普

遍と名づく。彼の土に佛あり。吉祥積王如來應正等覺と號し、今現に世に住したまふ。かの佛刹の中、聲聞緣覺の名を聞かず。唯だ、清淨の大菩薩衆、のみありて、その國に充滿せり。一一の菩薩に、各々百俱胝の不退轉菩薩摩訶薩有て、前後に圍繞して、眷屬と爲る。かの世界の中に、一の菩薩摩訶薩あり、名づけて法勇と爲す。何の義を以ての故に、名づけて法勇となす。彼の吉祥積王如來の處衆法を説きたまふ。法勇菩薩、説法を聞き已て、虚空に上昇し、高きこと七多羅樹、自ら其の身を隠して、衆のため法を説きたまふ。謂はゆる菩薩藏法門陀羅尼金剛の句なり。時に彼の衆會咸く念言を作さく、一切の諸法は唯だその聲のみありと。善男子、何を以ての故に、その身を見ず、而してその聲を聞く、是の如き聲色を出して成就して現せざること、色聲の如く亦た爾り、聲の如く一切の法も亦た爾り。無量の菩薩而して忍を獲得す。是の義を以ての故に、名て法勇と爲す。時に法勇菩薩摩訶薩、大光明を見て、警歎の聲を聞き、即時に吉祥積王如來の所に往詣して、頭面足を禮し、退て一面に住して、佛に白して言さく。世尊、何の因縁を以て、世間の中に於て、大光明あり、及び大警歎の聲を聞くや。昔より未だ曾て有らじと。時に、吉祥積王如來告げて言さく。善男子、西方こ

(一) 殊伽沙數 無  
(二) 娑訶 吾人が  
住する此の世界の  
事。

(三) 他化自在天の  
宮 他化自在天の  
の住する宮殿の  
六天能く他人の  
樂を自己に名く。  
する故に名く。

を去りて、八十四(四) 殊伽沙數の佛刹を過ぎて、世界あり。(五) 娑訶と名づく。佛を釋迦牟尼如來應正等覺と號す。今現に世に住したまひて、十方世界俱胝那由他の諸菩薩を召し集めんと欲せんがための故に、今法を聽きたまふ。一切の毛孔より、この光明及び警歎の聲を放ちたまふ。法勇菩薩、即ち吉祥積王如來に白して言さく、世尊、我れ今娑訶世界に往きて、釋迦牟尼如來應正等覺を禮拜瞻視し、供養承事せんと欲す、兼ねて、彼の諸の菩薩衆を見んと欲し、及び法を聽かんが故に。佛の言さく、往くべし、今は正にこの時なり。法勇菩薩、即ち六十俱胝の大菩薩衆と、前後に圍繞して、彼の土より没して、猶ほ壯士の臂を屈伸するとき頃、この世界の中に現す。是の時、法勇菩薩摩訶薩、この思惟を作さく、今我れ何れの神境通をなすが故に、彼に往きて、釋迦牟尼如來を禮拜し親觀し供養すと。この念を作し已りて、即ち一切莊嚴三摩地に入りたまふ。この三摩地神境通の威力に由るが故に、この三千大千世界をして、中に滿つる妙華、積りて膝に至らしむ。百千の音樂同時に俱に、寶幢、旛蓋、種種の莊嚴を作す。復た、妙音を以て、普ねく此の界に薫じて、猶ほ他化自在天の宮のごとし。是の時、法勇菩薩、神通を現じ已りて、諸の菩薩と、釋迦牟尼如來の所に詣り、

頭面禮足し、右を繞ること三匝にして、所來の力に隨ひ、願力を以ての故に、蓮花を化現して、その上に坐したまふ。

そのとき、南方、こゝを去つて、九十六俱胝那庾多佛刹を過ぎて、世界あり、離塵と名づく、かしこに現に佛あり、師子勇猛奮迅如來應正等覺と號す、無量の大菩薩衆のために恭敬圍繞せらる。かの世界の中に、一りの菩薩摩訶薩あり。名づけて、寶手と曰ふ。何の義を以ての故に、名づけて寶手となす。謂はく、彼の菩薩、諸佛の土に於て、有情を化するのとき、即ち右の手を以て、遍ねく若干の諸佛世界を捫して、即ち所欲に隨ひて能く成辨し、其の手より、佛・法・僧の聲、施・戒・忍・進・禪定・智慧・慈悲・喜・捨の聲、及び餘の種種百千俱胝那庾多法寶の聲を出したまふ、是の義を以ての故に、名づけて寶手となす。

そのとき、寶手菩薩摩訶薩、大光明を見、聲效の聲を聞きたまふ。昔より未だ聞かざる所、昔より未だ見ざるところなり。即ち、師子勇猛奮迅如來の所に詣り、頭面禮足して、佛に白して言さく、世尊、何かなる因縁を以てか、此の瑞有りて、大光明を現じ、及び是の如くの大聲效の聲を聞きたまふや。佛の言さく、善男子、北方こゝを去りて、

(一) 雜染世界 邪惡の世界のこと。

九十六俱胝那庾多佛刹を過ぎて、世界あり、娑訶と名く、佛を釋迦牟尼如來應正等覺と號す。今現にかしこに住して、一切の毛孔より、大光明を放て聲效の聲を作し、佛刹功德莊嚴を演說せんと欲せんがために、無數の菩薩、各々本願佛刹莊嚴ホクケツンブツセツシヨウオンを取るが故に、斯の瑞を現す。そのとき、寶手菩薩、又た師子勇猛奮迅如來ユウモウフンジンニヨライに白して言さく、我れ今娑訶世界に往きて、釋迦牟尼如來を禮拜・親覲・供養・承事し、並びに、諸の菩薩を見んと欲し、及び法を聽かんが故に。佛の言さく、何んぞ彼の(一) 雜染世界ソセウセカイに往くことを用ゐん。寶手菩薩、佛に白して言さく、世尊、釋迦牟尼如來應正等覺は、何んの義利を見て、彼の雜染世界を取り、而して乃ち、淨佛國土を取らざる。佛の言さく、善男子、彼の佛世尊は、昔長夜に於て、是の如くの言を作したまふ、願はくは、我れ速に大悲を成就することを得て、常に蔽惡ヘイアクの有情の中に於て、無上正覺を成じ、妙法輪を轉せんと。寶手菩薩、復た師子勇猛奮迅如來に白して言さく、世尊、彼の釋迦牟尼如來は、乃ち能く、往昔むかし、この大悲難發の願を發して、是のごとき惡世界の中に現じたまふ。是の如き慈尊は、甚だ遇ひ難しと爲す、我れ今當に往きて禮拜親覲すべし。佛の言さく、往くべし、今は正にこの時なり。然して、汝かしこに詣りなば、應に善く謹察して、

自ら毀傷することなかるべし。彼の佛菩薩は、遇ひ難しとなすと雖も、その餘の有情の心行は險詖にして、調伏すべきこと難し。寶手菩薩、復た佛に白して言さく、彼の士忿恨怨讐ありと雖も、我れを傷ふことなからん、假使ひ一切の有情未來際を盡して俱胝劫に於て、瞋恨罵辱し、乃至、刀杖、瓦石を打擲せんも、悉く能く之を受けて、終に報を加へじ。時に師子勇猛奮迅如來、一切衆菩薩に告げて言さく、諸の善男子、汝等若し能く寶手菩薩のごとく、忍辱の甲冑を被らば、與俱に、娑訶世界に往くべしと。師子勇猛奮迅如來、この語を説き已るや、寶手菩薩、一心一意に、彼の會中の無量の菩薩と、前後に圍繞して、彼の刹より没して、この界に現じたまふ。時に寶手菩薩、即ちこの念を作さく。今我れ何かんが神通境界を以て、釋迦牟尼如來を禮拜し、云何んが無量の有情を安樂せん。この念を作し已りて、即ち神通現行の境界を作し、右の手を以て、此の三千大千世界を覆ひ、千手の中より、諸の飲食・衣服・車乘・金・銀・瑠璃・眞珠・珂貝・珊瑚・璧玉を雨ふらし、諸の有情の心に稀願する所に隨ひて、悉く能く充滿す、法を聞かんと樂ふ者には、即ち手中より、法を聞くことを得せしむ。復た無量の法を聞く有情をして、現に眞實を證し、亦た、無數の有情をして、勝妙の樂を

受けしむ。是のとき、寶手菩薩摩訶薩、是の如くの神通境界を作し已りて、諸の菩薩と、釋迦牟尼如來の所に往詣り、頭面禮足して、右を繞ること三匝にして、所來の方に隨ひて、願力を以ての故に、蓮華を化現して、その上に坐したまふ。

そのとき、西方、こゝを去りて、九十俱胝那由多百千佛刹を過ぎて、世界あり、寶藏と名づく、彼の土に佛あり、寶積王如來應正等覺と號す。今現に、かしこに住したまふ。その佛刹土は清淨瑠璃の成就するところ、聲聞、緣覺あることなし。唯だこの清淨の大菩薩衆のみ、去來坐立して、瑠璃の地に於て、みな寶積王如來を見、分明顯現すること、猶ほ清淨なる明鏡の、その面像を觀るがごとし。これ諸菩薩、彼の地中に於て、佛世尊を見ること、亦復た是のごとし、見已りて法を請す。佛、すなはち、爲めに、往昔の(一)本願を説きたまふ。彼の諸菩薩、法を聞きて忍を得、かの寶積王如來は、常に、(二)眉間毫相摩尼寶の中より、大光明を放ちて、遍ねく彼の刹を照したまふ。日月の光明、悉くみな映蔽して、晝夜を辨せず、花の開合を以て、方に晝夜を辨す。時に、彼の寶積王如來の刹中に、一の菩薩摩訶薩あり。殊勝願慧と名づく。釋迦牟尼如來の光明照觸するに遇ひ、警效の聲を聞き、便ち、寶積王如來の所に詣り、頭面禮足して、一面

(一)本願 佛の本願の御誓願のこと  
(二)眉間毫相摩尼寶 眉間の如意寶珠のこと常に大光明を放つこと

(一) 傍生 畜生の  
 (二) 餓鬼 餓鬼の  
 (三) 地獄 地獄の  
 (四) 畜生 畜生の  
 (五) 餓鬼 餓鬼の  
 (六) 地獄 地獄の

に退住して、佛に白して言さく、世尊何かなる因縁を以て、世界の中に於て、是の如く  
 の譬喩の聲、及び大光明ありや。佛の言さく、善男子、東方、(一)を去りて、九十俱胝  
 那庾多百千佛刹を過ぎて、世界あり、娑訶と名づく。佛を釋迦牟尼如來應正等覺と號  
 す。十方世界俱胝那庾多の、菩薩を召し集めんと欲し、それをして、法を聞かしめん  
 がために、遍ねく毛孔より、大光明を放ち、譬喩の聲を作したまふ。時に、殊勝願慧  
 菩薩摩訶薩、是の語を聞き已りて、又た佛に白して言さく。世尊、我れ今、娑訶世界に  
 往きて、釋迦牟尼如來應正等覺を禮拜、親覲、供養、承事し、並びに彼の諸の菩薩を見ん  
 と欲し、及び法を聽かんが故に。佛の言さく、往くべし、今は正に是の時なり、その  
 とき、殊勝願慧菩薩摩訶薩、即ち諸の菩薩と、刹那(二)の頃に、娑訶世界に來到る。時に  
 殊勝願慧菩薩、即ち是の念を作さく、我れ今、何んが神變を以て、かしこに往きて、親  
 り釋迦牟尼如來を覲たてまつるべきと。是の念を作し已りて、三摩地に入りたまふ。こ  
 の三摩地神境通に由るが故に、この三千大千世界の(三)傍生(四)、(五)餓鬼(六)の苦をして、悉く  
 皆な停息せしめ、刹那の頃に、無上殊勝の安樂を獲得し、及び地獄の火も悉く皆殄滅し、  
 餓鬼、畜生、及び焰魔界の有情のあらゆる飢渴、みな飽滿することを獲、刹那の間に

(一) 胎生 母胎よ  
 (二) 化生 母胎よ  
 (三) 空性 諸法は  
 (四) 三昧 諸法は  
 (五) 無相 諸法は  
 (六) 無願 諸法は  
 (七) 空性 諸法は  
 (八) 三昧 諸法は  
 (九) 無相 諸法は  
 (十) 無願 諸法は

便ち安樂を得ること、猶ほ苾芻の初靜慮に入るが如し。是の時に當て、一有情の貪恚・  
 愚癡・忿恨・惱害・慳慢・嫉妬・矯・誑の爲めに覆藏せられ、逼惱せらるなし。一切諸趣の  
 有情、互に慈心及び利益の心を起せり。是の時、殊勝願慧菩薩、是の如くの神境通を  
 現じ已りて、諸の菩薩と、釋迦牟尼如來の所に詣り、頭面禮足して、右を繞ること三匝  
 にして、所來の方に隨て、願力を以ての故に、蓮華を化現して、その上に坐したまふ。  
 そのとき、北方(一)を去りて、六萬三千佛刹を過ぎて、世界あり、常莊嚴と名く。か  
 しこに現に佛あり、生婆羅帝王と號す。彼の世界の中に、在家の、俗服を衣る者ある  
 ことなく、一切の菩薩、みな袈裟を服したまふ。而してかの世界、尙ほ女人の名ある  
 ことを聞かず。況んや、(二)胎生の者をや。一切みな袈裟の服を著、結跏趺坐して、  
 蓮華より(三)化生したまふ。かの佛世尊、諸の菩薩のため、常に性印法門を説きたまふ。  
 云何んが名けて性印法門となす。謂はゆる菩提心を發して、即ち菩薩の律儀を満足せ  
 んがため、即ち菩薩藏陀羅尼根本處に入り、心散動せずして、能く捨を行するが故に、  
 即ち(四)空性三摩地(五)に入り、正行に住するが故に、即ち(六)無相三摩地(七)に入り。怖望する  
 ところなきが故に、即ち(八)無願三摩地(九)に入り。性貪欲を離るるが故に、蘊處界に通

達す。希望の事に於て、覺悟を得、佛智に於て、正願(二)無生乃至一切法に通達す。一切法分別無分別に於て、悉くみな斷除す、彼等の是の如くの見を作すに由る。是の故に名づけて、性印法門となす。彼の會中に於て、一の菩薩摩訶薩あり、相莊嚴星宿積王本願殊勝と名づく。若し衆生有りて、その身を見れば、必定らず、當に三十二相を得べし。時に彼の菩薩、佛の光明に遇ひ、譬效の聲を聞き、便はち生娑羅帝王如來の所に詣り、雙足を頂禮して、右を繞ること三匝にして、一面に退住して、白して言さく。世尊、何かなる因縁を以て、大光明及び譬效の聲ありや。彼の佛、告げて言さく、善男子、この南方に於て、六萬三千佛刹を過ぎて、世界あり、娑訶と名づく。佛を釋迦牟尼如來應正等覺と號す。一切の毛孔より、この光明を放ち、譬效の聲をなし、十方無數世界の諸大菩薩を召し集めんと欲せんとす、法を聽かしむるが故に。相莊嚴星積宿積王菩薩の言さく。何かなる因縁を以て、名づけて娑訶世界となす。佛の言さく、彼の世界、能く貪恚・愚癡・及諸の苦惱を忍ぶ。是の故に、名づけて娑訶世界となす。相莊嚴星宿積王菩薩の言さく、彼の娑訶世界の諸の有情等、毀罵捶打して、みな能く忍受すや。佛の言さく、善男子、かの佛の世界の諸の有情等、少しく能く

斯くの如くの功徳を成辨して、多く貪恚・愚癡・怨恨・纏縛に隨順す。かの菩薩の言さく、若し、是の如くならば、かの世界は、應に娑訶と名くべからざるなり。佛の言さく、相莊嚴星宿積王、彼の佛刹土に、亦た菩薩乘を行する諸の善男子、及び善女人あり、已に曾て、無量の諸佛を供養し、忍辱を成就して、將に有情を護し、善く自ら調伏すべし。若し、諸の有情、衆苦の具を以て、來りて害を加ふとも、悉く能く含忍して終に、放逸・貪恚・愚癡をなさず。善男子、是の如く、諸の善丈夫あるに由て、是の故に、彼の界を名づけて、娑訶と曰ふ。又た彼の釋迦牟尼如來世界の中に、亦た有情あり、衆惡を具足し、能く過を悔むること少く、其の心龜嶺にして、愧耻なし、佛を敬せず、法を重んぜず、僧を愛せず、當に地獄・傍生・餓鬼に墮すべし。彼の釋迦牟尼如來、この下劣の有情の中に於て、悉く能く、罵辱・嫌恨・誹謗・惱亂・惡害・怨憎の心を忍受して、大地の動搖すべからざる如く、違逆する所なし。若し供養を得るも、及び得ざるも、心高下なく、亦た憎愛なし、この故に、彼の界を名づけて、娑訶となす。

そのとき、相莊嚴星宿積王菩薩、また佛に白して言さく、世尊、我等、今大善利を得て、

(一) 滅盡定 眼識  
 耳識乃至意識等の  
 六識の心所を滅  
 盡して起らざらし  
 むる禪定の事。  
 (二) 梵行 清淨な  
 る行為のこと。

彼の蔽惡下劣の有情の中に生ぜず。佛の言さく、善男子、この説を作すこと莫れ、何を以ての故に、東北方に世界あり、千莊嚴と名づく、かしこに現に佛あり、大自在王如來應正等覺と號す。かの土の有情、皆な悉く、一向安樂を具足すること、譬へば、苾芻の(一)滅盡定に入るがごとし。かの安樂も亦復た是の如し。若し諸の有情、彼の佛刹に於て、百俱胝歳に、諸の(二)梵行を修さば、此の娑訶世界一彈指の頃に於て、諸の有情、慈悲心を起すに如かず。獲る所の功德、尙ほ彼より多し。何に況んや、能く一日一夜に於て、清淨心に住せんをや。そのとき、相莊嚴星宿積王菩薩、佛に白して言さく、世尊、我等、娑訶世界に往きて、釋迦牟尼如來應正等覺を禮拜し親覲し、供養し承事し、ならびに、彼の諸の菩薩を見んと欲し、及び、法を聽かんが故に。佛の言さく、往くべし、今は正に是の時なり。そのとき、相莊嚴星宿積王菩薩摩訶薩、百俱胝の菩薩と、彼の土より没して、刹那の頃に、娑訶世界に到り、即時に相莊嚴星宿積王菩薩、便ち是の念を作さく。今我れ、何んが神通力を以て、釋迦牟尼如來を供養し、禮覲したてまつるべき。是の念を作し已りて、自ら神境通を以て、虚空の中に、寶蓋を化成し、この三千大千世界を覆ふて、百千萬億の珠瓔・寶旛・周匝垂布す。その

(一) 乾達嶮 食香  
 尋香等と譯す。印  
 度樂神常に香を食  
 せり。  
 (二) 阿蘇羅 非天  
 の一なり。鬼神  
 の譯す。印度の鬼神  
 (三) 藥路茶 命翅  
 鳥と譯す。常に龍を  
 食となす。  
 (四) 緊捺囉 疑神  
 又は疑人に譯す。印  
 度の樂神にして歌  
 舞を司る。  
 (五) 摩呼羅伽 寶  
 朴又は大腹と譯す。  
 印度の樂神の一なり。  
 (六) 非人 天龍八  
 部等。鬼神を人に  
 對して非人といふに

蓋の中に於て、種種の華を雨ふらし、百千の音樂、鼓せざるに自ら鳴る。又この會の、苾芻・苾芻尼・優波索迦・優波斯迦・天龍・藥叉・(一)健達嶮・(二)阿蘇羅・(三)藥路茶・(四)緊捺囉・(五)摩呼羅伽・人・(六)非人等をして、各自、身を見るに三十二相を具して、寶蓋の中に現せしむ。そのとき、相莊嚴星宿積王菩薩、是の如くの神境通を作し已りて、諸の菩薩と、釋迦牟尼如來の所に詣り、雙足を頂禮して、右を繞ぐることを三匝にして、所來の方に隨ひ、願力を以ての故に、蓮華を化現して、其の上に坐したまふ。是の如く、乃至十方に遍じて、各々無量阿僧祇佛刹の中、無量阿僧祇の百千億菩薩有りて、大光明を見、聲效の聲を聞き、みな彼の世尊に問ひたてまつり、而して此の土に來りて、頭面佛を禮して、各一面に坐すること、亦復かくのごとし。又この三千大千世界・天龍・藥叉・健達嶮・阿蘇羅・藥路茶・緊捺囉・摩呼羅伽・乃至釋梵護世・及び餘の大威德諸天等、みな光明を見聲效の聲を聞き、咸く佛の所に來て、雙足を頂禮し、却きて一面に坐したまふ。そのとき、世尊、是のごとくの神通現行を作し已て、十方阿僧祇無量無邊百千那由多佛刹の有らゆる菩薩の來りて、會に集る者、みな此土の功德莊嚴を見、ならびに、佛身の量、菩薩聲聞及び受用の具名、自利と悉くみな同等なり。一一の諸菩薩、



各各自己の身のその中に在ることを知りたまふ。そのとき、慈氏菩薩、即ち座より起ちて、衣服を整理し、偏へに、右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、合掌して佛に向ひて、頌を説きて言さく。

無邊の智慧十方に開ゆ、六光普ねく照らす人天界、  
一切の有情共に度量し、能く佛智を測ることあることなし。

十方無量の諸の菩薩、法を求めんがための故に咸く來り集り、  
此に住して悉く皆佛を瞻敬し、皆大牟尼を渴仰せり。

(一) 戒定慧のこゝ。

如來(カイヤウエ)戒定慧を具する者、端嚴無畏なること師子のごとし、

慧光、日の虚空を照らすごとく、名稱普ねく諸の佛國に開ゆ。

諸天龍神と土女と、並びに及び苾芻苾芻尼、

皆悉く合掌して恭敬したてまつる、願はくは佛哀愍して爲めに法を説かん。

過・現・未來・度すべき者、決定してこの法器を了知す。

如來善く諸の有情に達す、唯だ願はくは演説して疑惑を除きたまへ。

云何んが修行す諸の佛子、刹を淨め、塵垢を離れんことを獲得せん。

(二) 尸羅 戒律のこゝ。

云何んが大願を成就す、如來我がために廣く宣説したまへ。

云何んが慳慳に染まざる、云何んが(シラ)尸羅を壊せざる、

云何んが辱を陵ぎて能く度し、毀罵誹謗みな堪忍せん。

云何んが勇猛勤めて精進し、修行して倦むことなし俱胝劫、

無量苦惱の諸の有情、悉く大安樂を獲得せしめん。

云何んが專注して常に等引して、三摩地清淨心に住し、

能く諸境に染らざること、猶ほ蓮華の水に著かざることとなる。

云何んが能く甚深の法を説きて、出世の智慧に通達せん。

云何んが魔羅の軍を降伏して、究竟じて無上覺を證せん。

國譯大聖文殊師利菩薩佛利功德莊嚴王經卷上 終

# 國譯大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴 王經卷中

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食品三千戶賜紫贈司空諡  
大鑒正號大廣智大興善寺三藏沙門不空 詔を奉じて譯す

(一) 法座 說法する座のこと。  
 (二) 正行 眞正なる行業のこと。  
 (三) 聲聞 佛より苦集滅道の四諦の原理を聞いて悟を開くもの。  
 (四) 緣覺 十二因縁の原理を觀じて悟を開くもの。

そのとき、如來、慈氏菩薩摩訶薩に告げて言さく、汝、佛のために、(一)法座を嚴辨せよ。我れ當に昇り已りて、往昔(わつじやく)意樂所修の諸行善巧に諸佛刹土功德莊嚴を出生し、(二)正行に趣向するの法門を説くべし。時に、慈氏菩薩、即ちこの念を作さく、今世尊、何の義を以ての故に、我をして座を嚴らしむるや不(いな)や。阿難陀(アナンダ)大目犍連(ダイモクケンレン)等をして、云何んが、彼の諸の(三)聲聞(シヨウモン)、(四)緣覺(エンガク)を棄てしめ、將に唯だ清淨の諸菩薩のために説くにあらずとやせん。或はかの聲聞緣覺は、この法門に於て、器にあらざるが故に、菩薩のための故に、我をして座を敷かしむ。そのとき、慈氏菩薩摩訶薩、即ち神通現行の境界を作し、この通に由るが故に、師子座を化す。高きこと、四萬踰繕那(ユゼンナ)、無量の寶を以て、周匝(しゆさつ)鈿飾し、天の妙衣を以て、その上に敷きたまふ。その衣柔軟にして、

之に觸る者は、安樂を獲得し、その座より、種種の光明を出し、この三千大千世界を照したまふ。是のとき、如來、本座より起ちて、此の座に昇りたまふ。三千大千世界、六種震動して常に異なることあり。

そのとき、世尊、具壽舍利子に告げたまはく、菩薩、四法を成就して、能く所願をして、みな満足することを得せしむ。云何んが四となす、一には菩提に趣く意樂を發し、二には諸の有情に於て、悲愍の心を起し、三には精進を發起し、四には(一)善知識(ゼンチシキ)に近づくなり。菩薩この四法を成就するに由るが故に、大願を圓滿す、復次に、舍利子、菩薩、一法を成就し、不退の大願淨利成就す。云何んが一法、是れ菩薩應當(まさ)に學すべし。不動如來、菩薩たりし時、もと修行せられ、(二)弘誓願(ゴウセツガン)を發して言さく、我れ所任の生處に當りて、若し出家せずんば、則ち爲めに十力の諸佛に欺誑せられん。世尊是のごとし。舍利子、是の諸の菩薩は、應に隨順して學すべし。若し佛出世し若しは出世せざるも、一切の生處、みな悉く決定して、家を捨て非家に趣かん。何を以ての故に、諸の菩薩最勝利益の者は、謂はゆる出家なり。舍利子、菩薩摩訶薩、出家を樂ふ者は、則ち能く、十種の功德を攝取せん。云何んが十となす。一には諸欲に

(一) 善知識 學徳のすぐれたる人といふ。

(二) 弘誓願 廣く衆生を苦より救済せんとの大願のこと。

(一)阿蘭若 別處  
に説けり。  
(二)惡趣 前出。

着せず、二には(一)阿蘭若を樂ひ、三には佛の所行を引じ、四には妻子貪愛の財に着せず、五には(二)惡趣行法を離れ、六には善趣行法を習ひ、七には能く善根を獲得して成就し、八には善根を積集して過失せざらしめ、九には恒に諸天のために歎美せられ、十には常に非人のために擁護せらるゝことなり。舍利子、出家を樂ふ者は、則ち能く是の如くの十種の功德を攝取す。是の故に、舍利子、菩薩摩訶薩、正覺を求めんと欲する者は、有情を解脱せんと欲する者なり。是の故に、常に出家を樂ふこと、是の如し。舍利子、是れを一法、不退の大願を獲得成就して、意樂に隨ひて清淨佛刹を得と名づく。復次に、舍利子、菩薩、二法を成就して、不退の大願をその意樂に隨ひて佛刹土を淨むべし。云何んが、二となす。謂はゆる、菩薩は聲聞を樂求せず。聲聞乘を樂求せず。聲聞所説の法を愛樂せず。聲聞乘者に親近することを樂はず。聲聞の律儀戒を學せず。聲聞乘に共する相應の法を宣説することを樂はず。亦た他を勸めて聲聞乘を行せず。緣覺乘に於ても亦復かくの如し。唯だ有情を勸發して、最上阿耨多羅三藐三菩提を成就せんがためなり。是れを名づけて二となす。舍利子、若し他を勸めて佛乘に趣入せしむることあらば、此の菩薩は、則ち能く十種の功德を攝取すべし。

(一)轉輪聖王 轉輪王又は單に輪王等と稱す三十二相具之し即位の時感得せし輪寶を以て四天下を一統す是れに金銀銅鐵の四輪王あり。  
(二)阿羅漢果 不生真人無學等と譯す小乘佛敎を修行する人の到達する最後の佛果の位のこと。  
(三)緣覺地 十二因縁を厭じて到達する佛地のこと。

(四)不退の大願 未來も永劫して退轉せざる佛の大願のこと。

云何んが十となす。一には聲聞緣覺のなき佛刹を攝取し、二には純一清淨大菩薩衆を得、三には諸佛世尊に護念せられ、四には常に諸佛のために稱名讚歎して、爲めに法を説き、五には一切事に於て廣大の心を生じ、六には若し天上に生せば、當に帝釋或は梵天王と作るべく、七には若し人中に生せば、(一)轉輪聖王となるべく、八には常に諸佛世尊を見て遠離せず、九には諸天人のために、愛樂せられ、十には眷屬を壞せず、及び無量の福聚を獲得す。何を以ての故に、舍利子、若し能く三千大千世界の諸の有情類をして、一切皆(二)阿羅漢果或は(三)緣覺地を得せしむることあらんに、若し復た能く一有情を佛菩提に置くことあらんに、此の功德甚だ彼より多し。何を以ての故に。舍利子、若し聲聞緣覺、世に出現せば、則ち佛種をして斷たざらしむること能はず。若し佛如來、世に出でざれば、亦た聲聞及び緣覺なし。舍利子、佛世尊、世に出現するを以て、是の故に、能く佛種をして斷たざらしめ、則ち聲聞緣覺ありて施設す。舍利子、これに由りて、他を勸めて菩提心に住しめば、是の如き十種の功德を獲得して、(四)不退の大願、意樂に隨ひて佛刹を清淨ならしむることを得べし。復次に、舍利子、菩薩、三法を成就せば、不退の大願佛刹功德莊嚴を攝取す。云何んが三となす。

一には阿蘭若に住するものを尊重し、二には怖望する所なくして法施を行じ、三には戒律儀に安住す。舍利子、菩薩、(二) 淨戒律義に安住せば、即ち能く十種の無畏を獲得すべし。云何んが十となす。一には聚落に入る無畏なり。二には衆中に法を説く無畏なり。三には食飲無畏なり。四には聚落を出づる無畏なり。五には寺に入る無畏なり。六には僧衆に入る無畏なり。七には安坐無畏なり。八には和尚阿闍梨に詣る無畏なり。九には大衆を教誡して、慈心に住する無畏なり。十には衣服・飲食・臥具・醫藥・資縁の具を受用する無畏なり。

舍利子、謂はゆる淨戒律義に安住せば、是の如く十種の無畏を獲得せん。

また舍利子、菩薩、説法して心に怖望せざれば、復能く十種の功徳を攝取すべし。

云何んが十となす。一には多欲をなさず。二には他人の識知を求めず。三には名稱を求めず。四には施主の家に於て心繋着せず。五には貴族の門徒を占怖せず。六には兪に於ても細に於ても、知足を生じ。七には諸天來詣れども驕慢を生せず。八には佛の作意を觀することを退せず。九には所説の言教を他のために信受せしめ。十には念佛の心を起すなり。舍利子、菩薩、法を施して心に怖望せざれば、是の如き十種の功徳

を獲得せん。

また舍利子、菩薩、阿蘭若アララヤに住するものを尊敬せば、復た能く十種の功徳を成就すべし。云何んが十となす。一には無益の談話を遠離し。二には寂靜を樂ひ。三には心定境を緣じ。四には諸務を營ます。五には諸佛を愛敬し。六には禪定喜樂を捨てず。七には梵行を修するの時障礙あることなく。八には少しく功用を加へて三摩地を證し。九には所受の教法、(二) 名句文身未だ曾て忘失せず。十には所聞の法義みな悉く了知す。

舍利子、菩薩、阿蘭若に住するものを尊重せば、是の如く十種の功徳を獲得すべし。若し菩薩、三法を成就せば、不退の大願所樂に隨ひて、佛刹土を淨むることを得。

復次に、舍利子、菩薩は四法を成就せば、不退の大願所樂に隨ひて、佛刹土を淨むることを獲べし。云何んが四となす。一には、實語して説の如く修行し、二には常に自ら謙下して、我慢を剪除し、三には慳嫉を遠離し、四には他の榮盛を見て、心に歡喜を生ず。是の如きを名づけて、四法を成就すとなす。又た、舍利子、菩薩、實語に四種の功徳あり。云何んが四となす。一には口中より常に青蓮華の香を出し、二には語業清

(一) 名句文身名  
身(マツタケ等の  
如き)簡單の詞又  
は動形容詞(句身)  
の意を聯結して一  
名の意味を表示す  
るもの。文身、言語  
を組織する原體の  
單音

淨にして言辭無礙なり。三には人天の中以て準繩と爲り、四には諸佛の圓滿の音聲を攝取す。舍利子、菩薩の實語に是の如く、四種の功徳を獲得すべし。

又た、舍利子、菩薩の謙下に四種の功徳あり。云何んが四となす。一には惡趣を遠離して馳驅・牛・馬・狗等の諸の傍生身を受けず。二には輕毀を被らず。三には惡友怨敵も凌突すること能はず。四には常に人天のために恭敬禮拜せらる。舍利子、是れを菩薩の謙下して是の如く四種の功徳を獲得すとす。

又た、舍利子、菩薩、慳嫉を遠離せば四種の功徳あり。云何んが四となす。一には捨心を忘れず。二には飢饉の時に大施主となる。三には常に戸を閉ぢず。四には律義者を見、施に於て、受に於て、嫉妬を生ぜず。舍利子、是れを菩薩、慳嫉を遠離して、是の如き四種の功徳を獲得すとす。

又た、舍利子、菩薩、他の榮盛を見て、心歡喜を生ずるに四種の功徳あり。云何んが四となす。一には常に是心而起してかの有情のためこの甲冑を被り、彼をして快樂せしむ。彼等既に自の福及び己の力を以て財寶を獲得して安樂を受け、我に倍々歡喜を生ぜしむ。二には、有らゆる財物、王難、水火、劫賊、惡友も能く侵奪することな

二捨心一切の  
しつを捨て、更に  
執着せざること。

し。三には、所生の處に隨ひて、財寶・男女・及び其の眷屬・みな悉く具足し、帝王歡喜す。何に況んや、餘人をや。四には、財寶廣大にして、受用窮りなし。舍利子、是れを菩薩、他の榮盛を見て心に歡喜を生じ、是の如き四種の功徳を獲得すとす。

復次に、舍利子、菩薩、五法を成就して、不退の大願所樂に隨ひ佛刹土を淨むることを得べし。云何んが五となす。一には、菩薩佛刹土を淨めんがため、莊嚴を成就し、而して應に法を求むべし。彼に従つて法を聞き、應當に諮問すべし。菩薩、云何んが、是くの如き功徳莊嚴を成就する。既に聞くこと得已て、説の如く修行して、即ち應に眞如實相シンニョジツクを證することを求むべし。

又た舍利子、二には、菩薩、願を發して淨佛國土に生せんと欲はば、應に清淨に淨律儀を持すべし。律儀淨きに由るが故に、その所願に隨て、決定して生ずることを得。既に千淨佛刹土に生ずることを得已て、即ち應に彼の土を觀察して、その相狀を取り、種種莊嚴、聲聞菩薩大衆受用の資具、既に相を得已つて、深く恭敬を生じ、合掌して、佛の所に詣り法を問ふべし。

又た舍利子、三には、菩薩、かの廣大佛刹功徳莊嚴を取る、かの佛世尊、その増上意

樂を知て、すなはち爲めに説きたまふ、佛説に由るが故に、即ち能く廣大佛刹功德莊嚴を成就す。かれ法を聞き已て説の如く修行せり。

又た、舍利子、四には、菩薩、事に於て、智に於て、清淨ならしめ、非法を遠離す。云何んが事、云何んが智、能縁所縁ノウエンシヨエンに於て、聲聞緣覺智を遠離するが故に之を名づけて、智となす。謂く所聞の法、みな當に修行すべきを、之を名づけて事となす。

又た、舍利子、五には、菩薩、佛の(一)自性を知り、刹土の自性を知る。云何んが、佛の自性、云何んが(二)刹土の自性、佛及び刹土は、唯だその名を有し、その名を知るごと清淨なり。是の如く知るが故に、執着シツジャクを生せず。是のごとく、舍利子、是れを菩薩、五法を成就して、不退の大願、意樂に隨つて、佛刹を清淨ならしむることを獲べし。復次に、舍利子、菩薩、六法を成就して、速に阿耨多羅三藐三菩提を得、一切の世間を超越して、(三)淨佛刹を取る。云何んが六となす、一には、この菩薩大施主となりて捨施を行じ、有らゆる愛樂戀着の珍玩物等愧耻を生じて、悉く能く捨施して、踊躍歡喜し、是の思惟を作さく、我れ大施を行じて、(四)大乘を圓滿す。我れ當に無上菩提を満足すべし。又是の念を作さく、應に斯の少分を以て、能く無上正覺を獲得すべ

(一)自性 物其自身の性質のこと。  
(二)刹土 國土のこと。

(三)淨佛刹 清淨なる佛刹土のこと。

(四)大乘 小乘に對す。高遠なる佛刹のこと。

からすと。

(一)舍利子 舍利弗といひ佛弟子なり。

(二)實相觀 宇宙人生の眞實の相を眞實に觀念すること。

(三)三界 欲界色界無色界のこと。

是くの如く思惟し已て、有らゆる榮盛盡く皆捨施し、乃至身命も、應に捨施すべし。

況んや餘の財産・妻子・男女而かも施さざらんや。何を以ての故に(一)舍利子、薩婆サハバン若とは、謂ゆる何の句義ぞや、舍利子、菩薩摩訶薩、菩薩の行を行する時、自ら所有する一切をみな捨つ、是の義を以ての故に、菩提を獲得して一切智と名づく。又た舍利子、二には、在家の菩薩、出家の菩薩、若し淨戒律儀に安住せば、設ひ、活命をなすも、終に淨戒學處所持の律儀を毀犯せず。功德を要期し、一切の有情に廻向して、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、大歡喜を生ず。我れは是れ持戒者なり。淨戒律儀に於て、深く愛樂を生じ、晝夜専ら梵行を修して安樂なり。即ち佛法現前して、理と相應して

(二)實相觀を得。實相觀ジツソウカンに住するが故に、甚深の忍を得。深忍を證するが故に、即ち正見を得。正見に由るが故に、則ち正修行す。正修行に住するに由るが故に、(三)三界を厭惡す。三界を厭ふに由るが故に、便ち怖畏を生ず。怖畏に由るが故に、即ち出離を求む。出離の見を懷くに由るが故に、是の念を作して言さく、我れ既にかくの如くの苦惱あり。一切有情も亦た應に是の如くなるべし。我れ應に彼の有情のために、この重

(二) 究竟安樂 最大の快樂のこと。

(三) 蘇迷盧山 常に妙高山(Summit)と稱す。印度の古説によれば大海の中に在りて高さ八萬四千由旬四洲の中心たりと。

(三) 解脫 苦惱を脱れ悟を開くこと。(四) 涅槃 梵語(Nirvana)寂靜、圓寂と譯す。轉迷開悟せしこと。

擔を荷ひ、彼をして(二)究竟安樂を獲得せしむべし。是くの如く觀察を作すのとき即ち大悲を得。既に大悲に住し、大精進を發すること、猶ほ頭衣の燃を救ふがごとし。精進を捨てざれば、即ち能く薩婆若智を獲得す。

又た、舍利子、三には、菩薩、應に忍辱甲冑(ニシツカクツヤ)を被るべし。憍慢を離れて大忍力を得。若し罵辱及び捶打に遇ふの時、忍辱成就せば瞋恨を生ぜず。是の思惟を作さく、假令ひ棒、(三)蘇迷盧山のごとく、人有りて執持して捶打せられて、俱胝劫を盡くし、常に惡罵せらるゝことあれども、我れ應に瞋恨の心を起さじ。何を以ての故に、かの諸の有情は未だ佛に隨て學せず。我れ佛菩薩に學せんと欲す。是の故に若し彼の有らゆる打罵は、便ち能く爾所の大悲を増長せん。我れ當にかの有情のために、弘誓の甲冑を被て、有情を能く攝取し、(三)解脫を得、生死を離れて(四)涅槃に入らしむべし。是の故に、我れ今應に瞋恨せず。

若し是くの如く忍辱の甲冑を被らば、即ち能く十種の成就を獲得す。云何んが十となす。一には族姓成就、二には財産成就、三には眷屬成就、四には色相成就、五には捨施成就、六には善友成就、七には正法を聞くことを得るの成就、八には説の如く修行

成就、九には臨命終の時諸佛を見、承事することを得るの成就、十には既に佛を見已つて淨信心を生ずるの成就なり。舍利子、これを菩薩十種の成就となす。又た舍利子、四には、菩薩大精進を發して、堅固要期し、善法を成就して、是の如き精進の甲冑を被て是の思惟を作す。一一の有情のため、未來際を盡して、生死の中に於て、次第に諸の精進の行を修行して疲勞せず、善く要期するを以て、一切有情のため、爾所の劫に於て、生死に流轉して是の精進を發して有情を捨てず。舍利子、若し菩薩あり、十方各々、(四)殑伽沙數世界のごとく、中に滿つる七寶を以て、念々の中に於て、如來に奉上市たてまつり、是の如く相續して未來際を盡さん。若し菩薩有て内に増上意樂を懷ふて、大悲心に住し、是の如き心を以て、精進の甲冑を被らば、此の功德は、復た彼より多し。舍利子、菩薩、此の精進を具さば、十種の功德を得、云何んが十となす。一には凡愚の行を離れ、二には佛行を攝取し、三には生死の中に於て過患の想を作し、四には此れに由つて大悲を攝取し、五には往昔の大願を退せず、六には諸の疾病少く、七には三世の諸の如來に遠越せざるが故に、八には婬・怒・癡を薄くし、九にはその所聞に隨ひ、名句文に於て皆悉く通達し、十には修行成就す。

又た舍利子、五には、菩薩、諸佛を憶念す。世尊この心に由て專注を得、如來を觀じて常恒に定を得、靜念成就して是の思惟を作す。我れ應に如來の行を行すべし。若し心散動失念せば、則ち殊勝の處謂はゆる佛智を得る能はず。是の故に應に心の攝受するところの一切の物を捨離し、亦た一切の利養・恭敬・聚落・城邑・飲食・資生・及び諸の親友を捨つべし。諸の有情を利益せんと欲せんが爲めの故に、有情を捨てず、阿蘭若アラシヤを樂て寂靜處に住し、獨行して侶なきこと、犀の一角のごとし。阿蘭若寂靜處に住し已て、大慈心を起し、初め一方に遍じ、二三四乃至十方、普ねく有情に遍じて慈心に住すべし、住し已んば則ち名づけて禪那に住する者となすことを得。舍利子、若し菩薩有て、一切樂具を以て、禿伽沙劫に於て、一切の禿伽沙の諸佛及び苾芻僧、并に諸の眷屬を供養し、若し出家の菩薩有て、寂靜を求め、阿蘭若に往き、行くこと七歩ならば、是の如くの福德甚だ彼より多し。何を以ての故に、能く速に大菩提を得るを以ての故に。舍利子、寂靜を樂ひ、(一)禪那ゼンナに住せば則ち能く十種の功徳を獲得す。云何んが十となす。一には念を得、二には慧を得、三には正修行を得、四には堅志勇猛なり、五には迅疾の辯を得、六には陀羅尼を得、七には生に於て、死に

(一) 禪那 禪定のことに專注統一すること

於て善巧を得、八には戒蘊等の處に於て動搖せず、九には諸天に奉事し、十には他の榮盛に於て貪美せず。舍利子、寂靜を樂ひて禪那に住せば、是の如くの十種の具徳を獲得す。

又、舍利子、六には、菩薩、善く應に慧の流出する所を了知すべし、而して是の念を作す。慧は何より生ず。謂はゆる淨戒律儀處より生ず。この慧は能く一切の白法をして、增長せしむ。是の故に、菩薩、應に一切世間の智慧を學し、(一)工巧コウカウ、(二)呪術ジュジュツ、醫方イホウの作し難く、成じ難きことを悉く皆遍學すべし。是の如く學し已りて、復たこの念を作す。今この慧は、欲を離る寂滅を證入すること能はず。亦復た神通、及び正覺に趣向すること能はず。沙門に向ふに非ず。婆羅門に向ふに非らず。涅槃に向ふに非ず。是の故に、我れ今應に更に遍ねく、法藥工巧を求め、是の如くの慧を以て、我をしてかの究竟寂滅を得せしむべし。彼の菩薩、諸法を求むるにもと少法を見ず。能く法を起す。見ざるを以ての故に寂滅に住す。寂滅に住するが故に、則ち熱惱なし。熱惱なきが故に、生死を了知す。有情に利益を作さんがために、諸の有情をして、衆苦を滅除せしむ。舍利子、是れを菩薩、六法を成就すとす。不退の大願、意樂に隨て、

(一) 工巧 工藝伎術のこと  
(二) 呪術 呪の不思議なる術のこと



佛刹土を淨むることを得。

復次に、舍利子、菩薩、七法を成就して、不退の大願、所樂に隨て佛刹土を淨むことを得。云何んが七となす。一には自己のあらゆる一切みな捨つ、捨つる所不可得なるが故に。二には戒に於て缺けず、戒を思惟せざるが故に。三には忍辱柔和、有情不可得なるが故に。四には精進を發起す、身口意に於て不可得なるが故に。五には靜慮を成就す、靜慮に住せざるが故に。六には智慧圓滿す、分別なきが故に。七には諸佛を隨念す、相を遠離するが故に。舍利子、菩薩、是の如く七法を成就して不退の大願、一切淨佛刹土、種種莊嚴を獲得す。

復次に、舍利子、菩薩、八法を成就して不退の大願、所樂に隨て佛刹土を淨むことを得。云何んが八となす。一には心嫉妬せず。二には莊嚴具を施し。三にはその心廣大なり。四には法師を尊敬し。五には邪命を行せず。六には平等に惠施し。七には自ら矜高せず。八には他を輕慢せず。舍利子、是れを菩薩、八法を成就して、不退の大願、意樂に隨て佛刹土を淨むることを得となす。

復次に、舍利子、菩薩、九法を成就して不退の大願、所樂に隨て佛刹土を淨ならしむる

(二)法師 佛のこ

(一)身律儀 身體上の法律儀則のこと。  
(二)語律儀 言語上の法律儀則のこと。  
(三)意律儀 精神上の法律儀則のこと。

ことを得。云何んが九となす。一には(一)身律儀を具し。二には(二)語律儀を具し。三には(三)意律儀を具し。四には貪欲をして衰謝せしめ、五には瞋恚をして衰謝せしめ。六には愚癡をして衰謝せしめ。七には欺誑を行せず。八には堅固の善友となり、九には善友を輕慢せず。舍利子、菩薩、是の如く九法を成就して、不退の大願、意樂に隨て佛刹土を淨むることを得。

(四)窣堵婆 塔のことなり。

復次に、舍利子、菩薩、十法を成就して、不退の大願意樂に隨て佛刹土を淨むことを得。云何んが十となす。一には、菩薩、妙花を執持して、如來の所に詣り、或は(四)窣堵婆供養を興すの時、是の願を作して言はく、是の如き妙花、色香は殊勝にして見る者欣悦す。我れ成佛せし時、我が佛刹の中をして種種の妙花遍ねく其の地に布き、及び衆寶樹をして、周匝莊嚴せしむ。乃至、燒香・末香・塗香・衣服・飲食・寶蓋・幢幡・金銀・瑠璃・眞珠・車磔・珊瑚等の寶をもつて奉獻する時、亦た應に是の如く廻向すべし。佛刹功德莊嚴菩薩應當に淨律儀に住すべし。若し戒に住せば、心の所願に隨て皆成就することを得。

復次に、舍利子、二には、菩薩、(五)自受樂を觀察するの時、この願を作して言はく、

(五)自受樂 自ら受ける法の快樂のこと。

他を兼ねて同じく是の如くの樂を受けんと。是の故に、菩薩、正覺を成ずるの時、その佛刹の中の有らゆる有情、悉く皆一向安樂を具足せり。

復次に、舍利子、三には、菩薩、他に不喜悅の言辭を發さず。常に善巧の語言を出して、是の如き願を作す。菩提を得るとき、我が佛刹の中の有情をして不悅の聲を聞かしむること勿れ。常に悅意の聲を聞くことを得せしめんと。

復次に、舍利子、四には、菩薩、常に有情を勸めて、(一)十善道を修せしめ、あらゆる善根有情と共に(二)薩婆若智に廻向して菩提を得る時、我が佛刹の中悉く十善業道を成就せしむ。

復次に、舍利子、五には、菩薩、至る所の方に隨て眼の見る所の者は、有情・男女・童男・童女・一切みな勸めて無上菩提を修せしめ、終に二乗の果を讃揚せず。是の故に菩薩菩提を得る時、彼の佛刹の中生ずる所の有情一切、みな悉く無上菩提の心を發し、聲聞緣覺の意を遠離す。是の如く清淨刹土を獲得して、諸の菩薩衆其の中に充滿す。

復次に、舍利子、六には、菩薩、他の利養に於て終に遮斷せず。他の利を得るを見て常に歡喜を生ず。是の故に、菩薩、菩提を得るとき、彼の佛刹の中有らゆる有情、

(一)十善業道  
は十善道ヲ稱す又  
殺生不偷盜等の十  
善の行は佛道を  
證する道程なるこ  
とをいふ  
(二)薩婆若智  
佛  
のこころ

資具を受用して、恒に斷絶なく是の如くの大法光明を獲得す。

復次に、舍利子、七には、菩薩、若し苾芻苾芻尼の犯過ある者を見て終に發揚せず、但だ自ら正法の中に安住す。是の故に、菩薩、菩提を得るとき、彼の佛刹の中一切過失の聲あることなし。何を以ての故に、かの大衆みな清淨なることを得、過失の法なきを以ての故に。

復次に、舍利子、八には、菩薩、法を樂ひて法を求めて熱惱を生ぜず。凡そ所聞の法に、正住して修行し、菩提を得るとき、彼の佛刹の中の有情、法を樂ひてみな熱惱なく、所聞の法のごとく隨順して修行す。

復次に、舍利子、九には、菩薩、商佉・鼓角・絃管、種種音樂を以て、如來の室堵婆に奉獻するの時、この善根廻向を以て、佛刹莊嚴を成就す。この故に、菩薩、菩提を得るとき、かの佛刹の中、百千の音樂鼓せざるに自ら鳴る。

復次に、舍利子、十には、菩薩若し失念の有情を見れば、是の願を作して言はく、正念を得せしめん。是の故に、菩薩、菩提を得るとき、かの佛刹の中一切の有情、(一)禪悅食を得べし。舍利子、是の如き佛刹は功德を具足し、假使ひ如來辯才を以て、或は

(一)禪悅食  
禪定  
を修しその樂み  
を以て身心を養ふ  
こと

一切に於て、或は一劫を過て説くとも盡くすこと能はず。舍利子、然るに我れ今、諸の菩薩の樂欲する所に隨て、是の如く略説して増上意樂の者をして、聞き已つて趣向せしめ、當に佛利功德を圓滿することを獲べし。

復次に、舍利子、菩薩三法を成就して速かに、無上正等菩提を得て、所求の佛利、みな成就することを得。云何んが三法。一には不放逸に住し、二には所聞の法の如く、正修行を起し、三には殊勝の大願を發す。舍利子、若し菩薩、この三法を成就せば、速かに無上正等菩提を證し、その所樂に隨て、佛利土を淨め、みな圓滿することを得。そのとき、具壽舍利子、佛に白して言さく、世尊希有なり。如來善くこの法を説く。世尊不放逸に住するに由るが故に、(二)一切菩提分法を獲得す。正修行に住すが故に、大菩提を得。大願殊勝を以ての故に、佛利を成就す。

佛、舍利子に告げたまはく、是の如し、是の如し、汝が所説の如し。不放逸に由るが故に、菩提分法を得。正修行に住するに由るが故に、大菩提を得。殊勝の大願を發すに由るが故に、佛利を淨め圓滿莊嚴なることを得。舍利子、我が往昔のごとし。勝願に依るが故に、是の如く刹を成す。舍利子、我れ不放逸に住するに由るが故に、その本

(二)一切菩提分法  
別處に説けり。

願を滿じ、正修行に由るが故に大菩提を得。舍利子、若し但言説して、修行せずんば、尙ほ聲聞の地に至ること能はず。何に況んや、無上菩提を得んをや。是の故に舍利子、菩薩、應に期を要して眞實如説に修行すべく、諸の學處に於て應に是の如く學すべし。

そのとき、會中に、四萬の菩薩あり、座より起ち合掌して佛に向て異口同聲に白して言さく、世尊、佛の所説のごとし。菩薩、學處我れ當に隨學すべし。不放逸に住して修行を成就す。その大願を滿じ、佛利を嚴淨す。是の如くの行、我れ當に之を行すべし。若し諸の菩薩、その所願に隨はば、我れ當に満足すべし。

そのとき、世尊熙怡微笑したまふ。時に舍利子、佛に白して言さく、世尊何の因縁を以てこの微笑を現じたまふ。佛、舍利子に告げたまはく、汝この諸の善男子の師子吼をなすを見るや不いなや。舍利子言はく、唯だ然り、已に見る。佛の言はく、舍利子、この諸の善男子は、百千劫を過ぎて、各々異刹に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得、同じく願莊嚴と號せり。亦當來師子佛等のごとし、その國清淨にして、無量壽如來の刹土と不増不減なり。唯だ壽量のみ除く。舍利子の言さく、彼の諸の如來の壽量幾何ぞ。

佛の言さく、彼の一一の佛、みな壽十劫なり。

そのとき、師子勇猛雷音菩薩、即ち座より起ち、偏へに右の肩を袒ぎ、右の膝を地に着け、合掌して佛に向て白して言さく、世尊、是の文殊師利童真菩薩は、諸佛如來の常に稱讚する所なり。是の文殊師利、久しく當に無上菩提を得、得る所の佛利の如く、當に復云何。佛、師子勇猛雷音菩薩摩訶薩に告げて言さく、善男子、汝當に自ら文殊師利童真菩薩に問ふべし。師子勇猛雷音菩薩、文殊師利に問ふて言さく、汝、何れの時に、當に阿耨多羅三藐三菩提を得しや。答へて言さく、善男子、汝何ぞ我に云何んぞ無上菩提に住すやと問はずして、乃ち我が菩提を成ずる事を問ふや。何を以ての故に、我れ菩提に於て、猶ほ住せず、云何んが我をして菩提を證せしめんや。菩提の法は、住せず證せず。我れ云何んが證住する所あらんや。師子勇猛の言さく、文殊師利、汝豈に一切有情を利して菩提を證せざるや、答へて言さく、不と。善男子、何を以ての故に、有情不可得なるが故に。若し有情得可くんば、我れ當に彼の有情の爲めに菩提を證すべし。菩提に住する有情の壽命、及び補特伽羅皆所有なし。是の故に我れ今菩提に住せず亦退轉せず。師子勇猛の言さく、文殊師利、汝豈に佛法に住せざる

(一) 無漏 煩惱を離れて清淨なること  
(二) 如如 正智に由て證得する眞如のこと

や不<sup>いな</sup>や。善男子、一切の諸法は佛法に住せり。凡そあらゆる法は(一)無漏、無際、無相、無形なり。この故に佛は(二)如如に住せり。佛の住する所の一切の諸法も亦復かくの如し。師子勇猛復た言はく、善男子、今汝言ふ所、我れ佛法に住せずと。我れ今當に是の如くの義を問ふべし。當に忍許して我が爲めに説くべしと。答へて言はく、善男子、意に於て云何ん。色がため菩提を求むや。色の本性のため、色如如のため、色自性のため、色の空性のため、色の遠離のため、色の法性のため、菩提を求むや。善男子、意に於て云何ん。若し色是れ菩提ならば、色豈に菩提を證せんや。色の本性、色の如如、色の自性、色の空性、色の遠離、色の法性、菩提を證せんや。答へて言はく、いなと。文殊師利、色は菩提を求めず、菩提色なし。本性色無く、如如色無く、自性色無く、空性色無く、遠離色無く、法性色無し。而して菩提を證す。乃至廣説す、色の法性も亦菩提を證せずと。

文殊師利の言はく、善男子、意に於て云何んが受想行識菩提を求めんや。善男子、受想行識菩提を證せんや。乃至識の法性、菩提を證せんや。答へて言はく、いなと。文殊師利、受想行識菩提を求めず、菩提を證せず。乃至識の法性菩提を求めず、菩提

(二) 我我所。我自身以外に我が所有するものを我所とす。  
(三) 初發心菩薩。初めて菩提を求むる心を發したる菩薩のこと。

を證せず。文殊師利の言はく、善男子、意に於て云何んが五蘊を離れて、(二) 我我所の施設ありや。答へて曰はく、いなと。文殊師利の言はく、善男子、云何んが二法菩提を證せんや。師子勇猛の言はく、文殊師利、(三) 初發心菩薩は、是くの如き語の文殊師利に對するを聞きみな驚怖を生ず、文殊師利の此の語を以て、便ち此の諸の菩薩を定量せんとなし、而して是の言をなさく、我れ菩提を求めず。我れ菩提を證せず。文殊師利の言はく、善男子、一切諸法は驚怖あることなし。實際の中に於ても、亦驚怖なし。佛、驚怖なき者のために、法を演説したまふ。若し驚怖の者には、彼れ則ち賦を生せん。若し賦を生せば、彼れ則ち欲を離る。若し欲を離るれば、彼れ則ち解脱せむ。若し解脱せば、則ち菩提なからむ。若し菩提なくんば、是れ則ち着せざらん。彼れ若し着なくんば、是れ則ち去なからん。若し去することなくんば、是れ則ち來なからん。若し來あることなくんば、則ち願求なからん。若し願求なくんば、則ち所求なからん。若し所求なくんば、則ち退轉せざらん。若し退轉せずんば何によりて退くや、(四) 我執より退くや。有情の壽命及び補特伽羅より、若しは斷、若しは常、取相分別して退を生ずるや。彼れ若し退轉し、退轉なくば云何んが退かん。空性・無相・無願・

(四) 我執。我體ありと認めて堅く執着すること。

實際、及び諸の佛法より退するや。何れの佛法より退轉するや。謂く佛法を離れず。佛法を究竟せず。所觀なく、出入する所なし。所行なく、亦た表示なし。唯だ其の名のみあり。空にして生無く、滅無く、去無く、來無く、清淨雜染を遠離して、塵無く、塵を離れて不平等なり。作意を遠離して、盡なく、執着なし。無等無非等なり。是れを佛法となす。善男子、あらゆる佛法この法は無法なり。何を以ての故に、其の處不可得なるが故に。若し、是の如く佛法生ず、新發意菩薩、(五) 此の説を聲き已て、心に驚怖を生じ、速かに菩提を證す。若し驚怖せざれば、菩提を證せず。師子勇猛の言はく、文殊師利、云何んが是の如く密意を以て説く、答へて言はく、善男子、若しは驚怖、若しは分別せば、彼等咸皆菩提を證せん。是の如く發心し、若しは發心せざるも、正覺所求の者の爲めに、皆菩提を證せん。復次に、發心せざれば、かれ菩提を得ず、亦た思惟せず。彼の菩提心は實に所得なく、亦分別せず。若し分別せずんば、正覺を證せず。何の因縁を以て、正覺を證せざる。彼れ菩提を得ず。亦た菩提を證せず。何を以ての故に、善男子、虚空界豈に菩提を證せんや、答へて言はく、いなと。文殊師利の言はく、善男子、如來豈に一切の法虚空に同なりと説かざらんや。答へて言

(一)法眼淨 分明  
に宇宙の眞諦を徹  
見すること

(二)無生法忍 又  
は無生忍とも稱す  
は滅變化を遠離す  
生滅變化を遠離す  
無生法と稱し此  
の理に住して心身  
の動轉せざるを無  
生法忍といふ

はく、是の如し。是の如し。文殊師利の言はく、虚空のごとく、菩提も亦た然り。菩提の如く、虚空も亦然り。虚空と菩提と無二無別なり。若し菩薩此の平等を知らば、則ち所知なく、亦た不知なし。此の法を説くとき、一萬四千の苾芻、諸の有漏を盡くして、心解脱することを得。十二那庾多の苾芻、遠塵離垢して、諸法の中に於て、法眼淨を得。九萬六千の有情、昔より未だ曾て無上菩提の心を發さずして、今みな已に發し、五萬の菩薩、無生法忍を得たり。そのとき、師子勇猛雷音菩薩、文殊師利に白して言はく、汝無上菩提を發し來ること幾時とやせん。文殊師利の言はく、止めよ、善男子。無生法の中に於て、分別を起すこと莫れ。善男子、若し是の如き言をなすあり。我れ菩提心を發し、我れ菩提の行を爲さん。彼等は是れ大邪見の者なり。善男子、我れかの心菩提のために發すを見ざるが故に。我れ心は見るべからざるを以ての故に。この故に、菩提のために心を發せず。師子勇猛の言はく、文殊師利、是れ何の句義ぞ。文殊師利の言はく、善男子、若し所見なくんば、是れを平等と名づくこと、向の所説の如し。師子勇猛の言はく、文殊師利、云何んが名づけて平等となさん。善男子、平等とは、種種の相なし。此の平等に由て、一切法一味なりと説く。一味とは

一性を説くなり。一性と説かば寂靜の性なり、則ち雜染なく、亦清淨なし。是の如くの説法は不斷・不常・不生・不滅なり、無我にして攝受なく、不取不捨なり。是の如く説法したまふ。説くこと已て所思なく、亦た分別する所なし、善男子、この平等法中に於て、修行智を起すを名づけて平等となす。復次に、善男子、菩薩かくの如き法性に入りて異を見ず、一を見ざるを、名づけて平等となす。その平等とは、不平等を離る。不平等の中に於て及び平等本來清淨なり。

そのとき、師子勇猛雷音菩薩、佛に白して言さく、世尊、今文殊師利、肯て自ら我れ無上菩提に於て、發心の遠近を説かず。大衆皆聞かんことを樂欲す。佛の言はく、善男子、文殊師利は是れ其深の忍者なり。乃至甚深の忍も亦不可得なり。菩提不可得なり。心も亦た不可得なり。心不可得なるを以ての故に。是の故に、發心の遠近を説かず。善男子、汝應に善く聽くべし。我れ今應に説かん。文殊師利童眞菩薩は久しく已に無上菩提の心を發せり。善男子、過去久遠に、七十萬阿僧企耶百千號伽沙劫を過ぎて彼の時に、佛あり。(一)雷音。(二)如來。(三)應供。(四)正等覺。(五)明行足。(六)善逝。(七)世間解。(八)無上士。(九)調御丈夫。(十)天人師。(十一)佛世尊と號せり。世に出現して、東方に在り、ここを去

(一)如來等 佛  
の十種の名。  
(二)如來 眞如に  
乘じて來りて悟を  
開く故に名く。  
(三)應供 人天の  
供養に應すべき故  
に名く。  
(四)正等覺 正し  
く悟ること。  
(五)明行足 三明  
の行具足する故に  
(六)善逝 八正道  
を修して涅槃に入  
るが故に。  
(七)世間解 世間  
の萬事をよく解す  
る故に。  
(八)無上士 諸法  
の中にて涅槃無上  
なる故に。  
(九)調御丈夫 丈  
夫を善導して涅槃  
に入らしむるが故  
に。  
(十)天人師 人天  
の導師なる故に。  
(十一)佛世尊 世に  
高崇せらるる故に。

る、七十二那庾多佛刹を過ぎて、世界あり、無生と名づく。彼の雷音如來は中に於て法を説きたまふ。諸の聲聞衆八十四俱胝那庾多あり。諸の菩薩衆二倍前に過ぎたまふ。善男子、彼の時に王あり。名づけて虚空七寶具足王といふ。四天下正法理化して法の輪王となる。善男子、彼の虚空王は雷音如來の會中に於て、八萬四千歳・種種の樂具・衣服・飲食・宮殿・臺觀を以て、僮僕給仕したまふ。一一殊妙に雷音如來及び諸の菩薩、聲聞、大衆を恭敬供養承事す。その王・親族・中宮・綵女・王子・大臣・唯だ供養を務めて餘は所作なし。多歳を経と雖も、初めて疲倦なし。八萬四千歳を過ぎて後其の王この時獨居して、侶なくこの思惟を作す。我れ已に無量の善根を積集せり。我れ今是の如き善根を廻向して、何かなる願を求めんと欲すべき。(一)帝釋カイシヤクを求むとやせん、梵王とやせん、(二)轉輪聖王とやせん。聲聞緣覺を求むとせん。善男子、彼の虚空王、この念を作し已て、空中の諸天に告げて言はく、大王止めよ、止めて是の如き下劣の心を起すこと勿れ。何を以ての故に、王の集むる所の福聚は甚だ多し。大王應に無上菩提の心を發すべし。善男子、時に虚空王この語を聞き已て、歡喜して念言すらく、我今こゝに於て決定不退なり。何を以ての故に、天、我が心を知つて、來て我

(一) 帝釋 帝釋天のこゝ、前出。  
(二) 轉輪聖王 前出。

(一) 人尊 佛のこゝ。

れに告ぐ、善男子、そのとき、虚空王、即ち八十俱胝那庾多百千の有情と、雷音如來の所に往詣し、雙足を頂禮して、右を遶ること七匝にして、一面に退座したまふ。又、善男子、彼の虚空王、雷音如來に向ひ、合掌して伽他ガダを説て曰はく、我れ最勝の法を問ひたてまつる、唯だ願はくは(一)人尊説きたまへ。云何んが最勝を得、丈夫人中の尊。世尊の前に對して、我以て廣く供養せん。心所依なきを以て、未だ曾て廻向を發さず。獨處して是の念を生ず、一緣此の心を繋ぎ。已に廣大の福をなす、云何んが廻向す。(二)釋梵、及び轉輪王を求むとせんや、聲聞并に緣覺を求むとやせん。心中にこの念を作す、諸天我れに告げて言はく。若し下劣の心を發さば、その福當に損壞すべし。大王勝願を發して諸の有情の利を作したまふ。世間を度せんが爲めの故に、應に菩提心を發すべし。

(一) 釋梵 帝釋天と梵天のこゝ。

(一) 遍覺 佛の

我れ(一)遍覺ヘンガクに問ひたてまつる、諸法自在ならば。

云何んが是の心を發し、等正覺を成じ。

何を以て此の處を獲る、我がために顯示したまへ。

應に菩提心を發さば、等しく牟尼に同なるべし。

空よりこの語を聞きたまふ、故に如來に白したてまつる。

大王汝當に知るべし、我れ今次第に説かん。

諸法は因縁に屬し、樂欲を根本となす。

彼れの希願するところの如し、果を獲ることも亦是の如し。

我れ昔過去に於て、亦曾て此の心を發し。

諸の有情を利益す、是の如き勝願を發せり。

彼の勝願に由るが故に、殊勝の果を獲たり。

我れ大菩提を證し、勝希願シヨウキゲンを満足せり。

大王應に勇猛して、當に是の如き心を發して、

この妙行を行すべし。汝必ず正覺を成す。

(二) 師子吼 佛の  
説法にいふ。

佛より是の語を聞きて、其の王大に歡喜し。

而して(二)師子吼を作す、世間みな振動して、

乃至本初際、及び生死の邊を盡して、

諸の有情を利益し、我れ無邊の行を行せり。

大衆の前に對して、我れ菩提心を發し。

誓つて諸の(三)群生を度し、皆衆苦を離れしむべし。

願はくは今より已後、若し我れ染汚、

瞋恚・嫉妬心・并に我慢貪愛あらば、

是れ十方及び現在の諸佛を欺誑せん。此より已後、

乃至菩提を證すまで、誓つて梵行を行じ。

我れ貪欲の罪を捨て、佛に隨つて修學すべし。

淨戒柔和忍、忽遽の心を以てせず、

速かに正覺を成ずることを求む。我れ未來際を盡し、

一一の有情に於て、佛刹土を淨め、

(三) 群集せる衆生



無量不思議、彼の名號を稱揚して、

普ねく十方國に聞ゆ、我れ今自ら(一)授記すべし。

成佛應に疑ふべからずと。導師の前に對して、

我れ(二)意業を淨め、及び(三)身業を淨め、

乃至(四)語業を淨め、悉くみな清淨ならしむ。

應に不善を起すべからず、我が眞實の行を以て、

佛を得て世間を利す。斯の誠實の言に由て、

地當に六種に動すべし。我れ若し實語せずんば、

(五)四大互に遷易せん。言誠實なるを以ての故に、

當に諸の音樂有て、空中に自ら奏すべし。

我れ實にして矯なきを以て、亦た諸の(六)結使なし。

斯の誠實を以ての故に、願はくは天の妙花を雨ふらさん。

不妄語を説くに由て、眞實驚覺するが故に、十方無量、俱胝刹に於て振動す。

刹那に虚空に於て、俱胝の音樂奏し、

(一) 授記 又は記  
前にもいふ將來必  
ず佛となるべきこ  
とを心中に期せし  
むること  
(二) 意業 精神の  
作用  
(三) 身業 肉體の  
作用  
(四) 語業 言語の  
作用

(五) 四大 地水火  
風のこゝろ、萬有諸  
法は此の四大より  
造らる。

(六) 結使 心身を  
繫縛する煩惱のこ  
と

(一) 曼陀花 蓮花  
華天妙華又白華と  
譯す所謂白蓮華の  
こと

(二) 十地 煩惱を  
斷じて悟を開くに  
至る十種の階級の  
こと

(三) 阿僧祇 無數  
と譯す  
(四) 般涅槃 入滅  
と譯す悟を開くこ  
と

妙(一)曼陀花を雨ふらし、高さこと七迷盧山なり。

二十俱胝の人、彼の王に隨つて學し、

みな微妙喜を出す、我等當に成佛すべし。

二千俱胝の如く、一切の人も亦爾り。

王の正覺を求むを學す。

善男子、彼のとき、虚空王は異觀を作す莫れ。今文殊師利童眞菩薩は是れなり。童眞

菩薩は彼の時に當て、虚空王となり、七十萬阿僧企耶百千(アソクキヤ)百千(オウガキヤ)阿僧祇を過ぎて、最初に

菩提の心を發し、又六十號伽沙劫を過ぎて、無生法忍を得、是れより已後、(二)十地を

滿じ、亦た一切佛法を滿足し、亦た曾て一念に於て是の如き心を起さず、我れ無上正

等菩提を證すと。復次に、善男子、かの時、二十俱胝の人同じくかの王と、雷音如來

の所に於て、菩提心を發し、みな已に無上菩提を證して、不退法輪を轉じ、(三)阿僧祇

の有情の爲めに、佛事を作したまふ。佛事を作し已て、佛の涅槃を以て(四)般涅槃した

まふ。彼等はみな是れ文殊師利の勸發する所、施・戒・忍・進・定・及び慧に於て、悉くみ

な次第に承事し、彼等諸佛の有らゆる教法みな悉く護持す。餘の一佛あり、此の下方



(一) 分別智 生滅  
變遷する事相を分  
別する智なり。

く、いなど。文殊師利の言さく、善男子、若し法の不増不減なる、是れを圓滿と名づく。何なる因縁を以てか、法の圓滿なるを知る。是の如き智を轉するときは、則ち(二)分別智を生ず。若し轉せざれば則ち分別せず。亦た分別する所もなく、亦た不増不減なり。若し不増不減なるときは、則ち平等と名づく。この故に、善男子、若し色の平等を見れば、則ち是れ色圓滿す。若し受想行識の平等を見れば、則ち是れ受想行識圓滿す。

そのとき、師子勇猛雷音菩薩、文殊師利に白して言さく、汝、久已に甚深の忍を得て、不起の心を以て是の如き解を作し、我れ菩提を證すと。今文殊師利、豈に有情を覺悟して勸發せんと欲せざらんや。答へて言はく、善男子、我れ曾て有情を覺悟し、及び勸發せず。何を以ての故に、有情は無所有なるが故に。有情遠離するが故に。有情は無所得なるが故に。若し菩提得べくば、是れ則ち有情を覺悟して、勸發するあらん。善男子、我れ及び菩提有情俱に不可得なり。この故に、我れ有情を覺悟して、平等を勸發せしめ、無上菩提を求めて、亦退轉せざらしむ。何を以ての故に、分別する所なし。性平等なるが故に。行、無來無去なりと了知するを、名づけて平等となす。亦た(三)空

(三) 空性 眞如の  
性なり。

(二) 無相 眞如絶  
對のこと。

性の句と名づく。性の句とは、則ち所求なし。善男子、若し是の如くならば、云何んが久うして忍を獲得すと言はん。既に所得なし。我れ豈に心の菩提を證するあらんや。善男子、汝、心と智との得を見るや。答へて言はく、いなど。文殊師利の言さく、それ心は、色に非ず、名に非ず、乃至菩提、名を以て施設せば、是れ菩提及び心も亦空ならず、名も亦空ならず。師子勇猛の言はく、善男子、是の如き密意を作して説くこと莫れ。文殊師利の言さく、心所生なし、我れ云何んが菩提を得んや。心既に不生なり。云何んが現證を爲さんや。師子勇猛の言はく、云何んが現證と名づく。文殊師利の言はく、善男子、一切法を隨覺して、思惟平等なるを名づけて、現證となす。是の隨覺をなして、少しも想を起すことなく、亦た想を滅せざるを名づけて、現證となす。是の如き眞如は眞如に非ず。分別を起さざるを名づけて現證となす。若し正見に住せば、法に於て平等なり。所得無きが故に。無所得を以て、一と作さず、異と作さず、一を思はず、異を思はざるを、名づけて現證となす。若し身に於て、一相を證し、一切の法を知らば。所謂(四)無相なり。若し一切の法無相なりと知らば、身心に於て、染着あらざるを、現證得と名づく。云何んが得と名づく。文殊師利の言はく、善男子、無所行

(二)阿頼耶無没  
心識のこころ

の句、是れを名づけて得となす。無所行の者は、三界の中に於て、三界を行せず。言説を以て説く能はざる所なり。何を以ての故に正法は、(三)阿頼耶なく、亦所行なきが故に、言説すること能はず。

復次に、善男子、聲の言説なく、亦た法の得べきなし。所得無きを以て、是の故に得と名づく。

そのとき、師子勇猛雷音菩薩、佛に白して言さく。世尊、善いかな。願はくは、文殊師利童真菩薩所得の佛刹を説きたまへ。佛の言さく、善男子、汝當に自ら文殊師利童真菩薩に問ふべし。時に師子勇猛雷音菩薩摩訶薩、文殊師利に白して言さく、云何んが是れ仁者の佛刹莊嚴ぞ。答へて言はく。善男子、若し菩提を樂はば、汝當に問ふべし。師子勇猛の言はく、豈汝に菩提を樂はざらんや。文殊師利の言さく、いなと。善男子、若し樂求あるときは、則ち厭離あらん。若し厭離あらば、則ち貪愛あらん。若し貪愛あらば、則ち出離なからん、善男子、我れ是れがための故に、忻樂せず、亦厭離なし。復次に、善男子、汝言はく、云何んが佛刹莊嚴を成就すと。我れ自ら讃する能はず。何を以ての故に、如來一切智の前に對して、自ら佛刹功德莊嚴を説き、即ち菩薩のた

め自ら己の徳を讃す。

(一)無礙の天眼  
自在に修して自由  
自在にみるこころ  
(二)六波羅蜜  
羅蜜は梵語劫彼岸  
忍乃至慧の六度を  
行じて佛果を證す  
るこころ

佛、文殊師利に告げたまはく。汝豈に自ら願ふ佛刹功德莊嚴を説くべし。何を以ての故に、諸の菩薩をして汝に従つて聞き已つて決定してこの願を成滿せしむるが故に。文殊師利の言はく、我れ敢て如來の敎命に違はず、佛の威力を承けて、我れ今之を説かん。そのとき、文殊師利童真菩薩、座より起つて、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に着け、佛に向つて禮を作し、而して佛に白して言さく、世尊、我れ今當に説くべし。若し菩提を求むる善男子、善女人あらば、當に諦かに聽くべし。若し聞くことを得已んば、其れをして眞實の行由を満足せしむ。文殊師利、右の膝を地に着くるの時、刹那の間に、十方大地殑伽沙數の諸佛世界六種震動す。文殊師利、佛に白して言さく、我が願若し無量俱胝那庾多百千劫に於て菩提を稅聚せずんば、我れ終に無上正覺を證せず。世尊、我れ(一)無礙の天眼を以て、十方乃至無量無邊世界の有らゆる諸佛世尊を見ぬ。若し是れ我れ無上菩提の心を勸發するにあらず。菩提の行を修し、施・戒・忍・進・禪・慧を勸學し、彼をして(二)六波羅蜜を成就せしむ。我れ既に勸め已つて、敎授し、敎誡して、悉く無上正覺を満足せしむ。世尊、彼の時、我れ無礙の天眼を以て、十方を觀察し、佛

事を作し已つて、然る後、我れ無上菩提を證せん。

そのとき、衆中に或は菩薩あり。是の念を作して言はく、云何んが文殊師利童真菩薩、是の如く等の諸佛世尊を見るや。是のとき、如來、諸の菩薩のこの思惟シユイをなすを知り、師子勇猛雷音菩薩に告げて言はく、善男子、譬へば一丈夫あるが如し。この三千大千世界を以て、碎イダシきて微塵ミヂンの如くす、意に於て云何ん。彼の微塵、若しは算師、算師の弟子、算へてその數、是れ百、是れ千、是れ俱胝那由多百千なりと知るやいかん、いなど。世尊、佛の言さく。善男子、かくの如き文殊師利童真菩薩は、無礙ムガイの天眼テンガンを以て、十方を觀察し、一一の世界に、是の如き無量無數の諸佛世尊を見たてまつる。そのとき、文殊師利、又た佛に白して言さく、世尊、我れに是の如くの願あり。殞伽沙數の廣大の世界を以て、一佛刹と成し、その佛刹の中牆壁高大にして、有頂に至り、無量百千の衆寶莊嚴せり。復た無量の妙寶を以て、間錯鈿飾す。若し爾らずんば、我れ終に無上菩提を證せず。復次に、世尊、我れに復た願あり。我が刹中の菩提の樹をして、その量正等萬大千界ならしめ、彼の樹の光明、一切諸佛刹土を遍照す。復次に、世尊、我れに復た願あり、菩提樹に坐し已つて、その中夜に於て、等正覺を成

(二) 化身衆生濟度のため佛身に示現したる佛身のこと。

(三) 化生 前出。

(四) 三乗の法聲緣覺菩薩の學すべき法門のこと。

じ、乃至般涅槃ハツネンの夜まで、その中間に於て、座を起たず。但だしツレ化身ケンを以て、十方無量無數俱胝那由多諸佛刹土に遍じ、諸の有情のために法を演説したまふ。

復次に、世尊、我れに復た願あり。我が刹中をして、聲聞緣覺の名あることなからしむ。唯だ清淨の大菩薩衆のみ有て、一切の過、及び諸の惑等を離れて、皆是れ清淨梵行の者、この佛刹に滿す。その佛刹の中女人の名なし。一切の菩薩唯だ是れケン化生して、悉く袈裟ケサを被キて、結跏趺坐す。是の如き菩薩その國に充滿す。唯だ如來の變化する所を除き、十方に往詣り、諸の有情のために、その意樂に隨てケン三乗の法を説きたまふ。そのとき、師子勇猛雷音菩薩、佛に白して言さく、世尊、文殊師利當來成佛ジャウラツしたまふ名字何等ぞ、佛の言さく、善男子、この文殊師利、成佛の時を名づけて普見となす。善男子、何なる因縁を以て、彼の如來を稱して、號して普見となす。善男子、普見如來、普ねく十方無量阿僧祇俱胝那由多百千世界の中をして、普ねく見せしむるが故に、名づけて普見となす。かの諸の有情、かの佛を見れば、決定して當に無上菩提を得べし。普見如來、未だ成佛せずと雖も、若し我が現在及び滅度の後、その名を聞くことあらば、亦みな決定して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし。唯だ已に聲聞尼夜

(一)法喜 佛はを  
開きて喜みする  
をいふ。

(二)五神通 天眼  
通 天耳通 他心  
通 宿命通 如意  
通のこゝ。

摩位、及び下劣勝解に入るの者のみ除く。  
復次に、文殊師利、佛に白して言さく、世尊、我れに復た願あり。無量壽如來刹中の如く、(一)法喜を以て食となす。而して我が刹中の菩薩、初めて食想を生起すの時、すなはち、百味の飲食鉢に盈満して、右の手の中に在り、尋てこの念を作さく、若し未だ十方諸佛に供養し、及び貧窮苦惱の有情并に餓鬼趣の、其の千歳に於て、乃至涕唾して食ふことを得ざる者に施さず。若し惠施して其れをして飽足せしめずんば、我れ終に刹那の頃に於て食はじ。(二)五神通を獲る大成徳あり、空に乗じて無礙なること風の著かざる如し。即ち十方無量無數の諸佛刹の中に往て、食を諸佛世尊、并に聲聞衆に供獻し、及び貧賤苦惱の有情、并に餓鬼趣に施し、其れをして充滿して飢渴を離れしめ、即ち爲めに法を説きたまふ。既に説法し已て、刹那の頃に於て、本土に還至りたまふ。

復次に、世尊、我れに復た願あり。菩提を得已て、我が刹中に於て、若し諸の菩薩初めて生ずるの時、須ふる所の衣服、その意念に隨て即ち手中より、清淨沙門の宜しき衣服を出さん。是の衣出だし已て、すなはち是の念を作さく、若し此の寶衣を以て、

(一)八難 八種の  
障難のこと  
佛を見ざるもの  
に於て  
獄難 一  
鬼難 二  
生難 三  
洲難 四  
天難 五  
佛前難 六  
七世難 七  
八世難 八

先づ當に十方諸佛に供獻せずんば、我れ應にすなはち自ら受用せず。緣にこの念を發し、即時に無數世界に往詣り、此の寶衣を以て、諸佛に奉獻して、本處に還復へり、然して自ら被撰す。

復次に、世尊、我が刹中に於て、諸の菩薩衆の有らゆる受用の具、先づ皆諸佛世尊并に聲聞衆に奉獻し、然して自ら受用す。又た我が刹中、(二)八難及び不善の聲を遠離す。願はくは、我が刹中に於て、衆苦を遠離して、淨戒律儀を毀犯すること有ることなし、色聲香味觸に於て、悦意せざることなし。

そのとき、師子勇猛菩薩、佛に白して言さく、世尊、彼の世界の名號何等ぞ。普見如來成佛出現して、復た何處にか在る。佛の言さく、善男子、彼の佛の世界を如願圓滿積聚離塵清淨と名づく。その佛刹土は、この南方に在り、婆訶世界も亦その中に在り。復次に、文殊師利童眞菩薩、佛に白して言さく、我れに復た願あり。我が刹中に於て、無量百千衆寶無量摩尼を積集し、互相に影現す。有らゆる大寶は十方刹土の得難きところ、亦未だ曾て見ず。彼の積集するところの摩尼寶等のあらゆる名號は、百千俱胝歳に於て説くとも盡くすこと能はず。世尊、かの世界の中の菩薩、かの刹を樂見し、

(一)都史多天  
ト  
ソツ天のこま。  
(二)經行一定の  
地をめぐり歩行す  
るこま。

而して金を爲らんとせば、即ち金を現んじ、銀を樂見せんとせば、即ち銀を現す。然も金を見るに於て、未だ曾て損減せず。吠瑠璃・頗胝迦・赤珠・瑪瑙・牟薩羅寶・無量諸寶を樂見し、各々樂見する所の種種の相に隨ひ、并に、及びかの波水香・多蘂羅香・多摩羅跋香・龍堅香・梅檀香・各々所欲に隨つて、悉く皆見ることを得。かの世界寶相の變異するに非ず。かの佛刹の中、日・月・星・宿・摩尼・火・光の照見する所を假らず、みな菩提樹より、自然に光を出して照明を作す。かの諸の菩薩、意に欲樂する所なり。この光明を以て、彼の俱胝那庾多百千世界を照して、晝夜あることなし。花の開合を以て、その晝夜を辨んじ、諸の菩薩の所樂の時節に隨て、即ち皆之に應じ、亦た寒暑及び老病死なし。若し諸の菩薩、その所樂に隨て、菩提を證せんと欲せば、即ち餘利に往て、(一)都史多天に於て、壽盡き降生して正覺を成すべし。彼の佛刹に於て、空中に常に俱胝那庾多百千種の樂を奏す。相を現せずと雖も、而もその聲を聞き、かの樂中に於て、貪染相應の聲あることなし。唯だ諸波羅蜜の聲・佛の聲・法の聲・僧の聲・諸菩薩藏法教の聲のみ出で、悉くみな聞くことを得。彼の中の菩薩、佛を渴仰し、諸の處する所に隨て(二)經行坐立し、應に念すべし。即ち普見如來應正等覺坐

菩提樹を見んと。若し諸の菩薩、法に於て疑あらば、但だ彼の佛のみを見、解説を待たずして、疑網皆斷えて、法義を解了すべし。

そのとき、會中の無量俱胝那庾多百千の諸の菩薩衆、異口同音に是の言を説かく。今この世尊の名義相稱は、謂はゆる名づけて、普見如來と號す。若し其の名號を聞くことを得るあらば、快いかな。殊勝の利を獲得せん。何に況んや、彼の佛刹の中に生ずることを得んをや。若し是の如くの授記、所説の法要を聞くことを得、及び文殊師利童真菩薩の名號を聞きて耳に經るあらば、是れ則ち名づけて諸佛を面見し、是の語を説き已はんぬとなす。

そのとき、世尊、諸の菩薩に告げて言さく、是の如し。是の如し。汝が所説の如し。善男子、若し俱胝那庾多百千如來の名號を受持することあらんに、若し復た文殊師利童真菩薩の名を稱することあらん者は、福彼より多し。何に況んや普見佛の名を稱せんや。何を以ての故に、彼の俱胝那庾多百千如來、有情を利益すとも、文殊師利、一切の中に於て、作す所の利益に及ばず。

そのとき、俱胝那庾多百千の天龍・藥叉・健達嚩・阿蘇羅・藥路茶・緊那羅・摩呼羅伽・人

（二）那謨 歸命を  
譯す。

非人等、同聲に唱へて言はく、（三）那謨文殊師利童真菩薩、那謨普見如來應正等覺と。衆多の天龍この語を説き已て、八十俱胝那庾多百千の有情、無上正等大菩提心を發せり。無量の有情善根を成熟し、無上菩提に於て不退轉を得たり。文殊師利、復た佛に白して言さく、世尊我れに復た願あり。我が所見の如く、十方無量無數俱胝那庾多百千の諸佛世尊、彼の諸佛の有らゆる佛刹功德莊嚴行相の類、是の如く一切みな我が一佛刹の中に置かしめ、唯だ聲聞の爲めに莊嚴する所の刹と、及び（四）五濁の世を現化することを除く。若し我れ自ら佛刹功德莊嚴を讚し、爾所の刹伽沙劫を過ぎて説くとも盡くることが能はず。世尊、我が所願の如く、唯だ佛世尊應に正等覺すべし。餘は知ること能はず。佛の言さく、是の如し。是の如し。文殊師利如來は三世の中を知見し障礙あることなし。

（三）五濁の世 劫  
濁 見濁 煩惱濁  
衆生濁 命濁のこ  
と。

そのとき、衆中或は菩薩あり、是の如き念を作さく、文殊師利所説の佛刹功德莊嚴と、無量壽如來の刹土と等しとやせん、いかん。是のとき、世尊、かの菩薩の心に念する所を知り、即ち師子勇猛雷音菩薩に告げて言さく。善男子、譬へば丈夫一毛を析て以て百分となし、一分の毛を以て、大海の中より、一滴水を取るが如し。善男子、かの一

毛の水多きや。大海の水多きや。師子勇猛佛に白して言さく、世尊、一毛の水少く、大海の水多し。佛の言さく、善男子、かの丈夫擧ぐる所の一毛端の水は、無量壽佛刹功德莊嚴の如し。餘の大海の水は、普見如來佛刹功德莊嚴の如し。應に是の如く見るべし。

そのとき、師子勇猛、佛に白して言さく、世尊、過去・現在・及び未來に、頗る是の如き佛刹功德莊嚴ありや、いなと。佛答へて言さく、有りと。善男子、東方、こゝを去る、八十俱胝百千刹伽沙世界を過ぎて、かしこに佛刹あり。願住高踊と名づく。この中に佛あり、普光常多功德海王如來と號す。今現にかしこに住せり。佛の壽無量無邊なり。復た無量の大菩薩衆あつて、圍繞して説法したまふ。善男子、彼の佛刹功德莊嚴と普見如來佛刹と不増不減なり。四菩薩あり、不退の甲冑を被て是の如き行に住せり。善男子、かの諸の菩薩、亦當にこの普見如來の佛刹莊嚴を得べし。師子勇猛の言さく、唯だ願はくは、かの菩薩の名號、及び其の住處を説き、并に普光常多功德海王如來の佛刹を説きて、我が爲めに彼の佛菩薩を示現し、諸の菩薩をして彼の佛刹を取らしめよ。佛の言さく、善男子、汝等諦に聽け。我れ今ま當に説くべし。善男子、第



一の菩薩を光明幢と名づく。東方無憂吉祥如來佛刹に在り。第二の菩薩を名づけて智上とす。南方智王如來佛刹に在り。

第三の菩薩を名づけて、寂根ジャクコンとなす。西方慧根如來佛刹に在り。

第四の菩薩を名づけて願慧クワンエとなす。北方那羅延如來佛刹に在り。

そのとき、世尊、神境通を以て、普光常多功德海王如來の佛刹を現んじて、此の大會をして、彼の如來及び菩薩衆、并にその佛刹功德莊嚴を見せしむ。昔より未だ見ざる所、亦未だ曾て聞かず。不可思議の衆相成就せり。彼此の世界、互に相見ることを得ること、猶は掌中にニ阿摩勒菓アマロカを觀するがごとし。彼の佛世尊、普光常多功德海王如來の身量八萬四千踰繕那なり。金色光明、端嚴照曜なること、蘇迷慮山王の如し。

(二) 阿摩勒菓 果物の名。

(三) 師子座 佛の座をいふ。

(四) 菩薩の行 大衆を以て能く化度するの行業のこと。

四萬二千踰繕那の身量の菩薩摩訶薩と前後圍繞し、無量功德莊嚴菩提樹下に於て、(三)師子座に坐したまふ。俱胝那庾多の世界に往き、諸の有情のために法を演説したまふ。そのとき、世尊、諸の菩薩に告げて言さく、善男子、汝等かの如來佛刹功德莊嚴菩薩衆を見るや、いなや。時に、諸の大衆、異口同音に白して言さく、世尊、唯然り、已に見る。我等當にこの(四)菩薩の行を學すべし。文殊師利童真菩薩の修行するところの如

く、我等亦當に是の如く莊嚴佛刹を成就すべし。そのとき、世尊、熙怡サイイ微笑して、その面門より種種の光を放ちたまへり。謂ゆる青・黃・赤・白・紅・紫・等の光、無量無邊の世界を照曜し、照らし已て、還來りて、佛を遶ること三匝して佛頂に入りぬ。

そのとき、慈氏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、何の因縁を以て、この微笑を現じたまふや。佛、慈氏に告げたまはく、かの佛世界功德莊嚴を現するに由る。時に此の大衆中八萬四千の菩薩、かの佛刹莊嚴の事を見ること、文殊師利童真佛刹の如し。かの衆中に於て、唯だ十六正士のみあり。而して、能く増上意樂を成就し、この願を作して言さく。文殊師利國土莊嚴の如し。願はくは我等をして、亦た當に是の如くせしむべし。十六正士を除きて、餘は、能く是の如き大願を發して、速疾に無上菩提を證せんことを樂ひ、求むる所の佛國は、無量壽莊嚴功德のごとくなることなし。慈氏、汝今意樂成就せざる菩薩を見て、能く大利益を作し、増上意樂に由るが故に、この勝願を發す。この故にかの佛刹を得ること、文殊師利の如し。その諸の菩薩、少しく信心有て、志願下劣なり。羸劣エイレツの業に由つて、六十俱胝那庾多百千劫を過ぎ、然して始めて(二)五波羅蜜を満することを得たり。そのとき、光明幢と智上と、寂根と、願慧等の四

(二) 五波羅蜜 六波羅蜜の中般若波羅蜜を除きし餘なり。

大菩薩、四方より來て、此に現んじ、無量吠瑠璃光明樓閣中に坐したまふ。俱胝那庾多百千の天衆有て圍繞し、諸刹を震動し、種種の神通を以て、俱胝那庾多百千の花を散んじ、及び音樂を奏す。このとき、慈氏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、何の因縁を以て、この世界に於て、大地震動し、四方、復た四樓閣ありて現するや。佛、慈氏に言さく、この四菩薩は、佛の警覺キョウカクに由て、來つて佛世尊を親覲す。所言未だ訖らざるに、利那の間に、この四菩薩、樓閣の下より、佛所に往詣り、頭面禮足して、佛を繞ること三匝にして、一面に退坐す。彼の菩薩の光四方より來て、普ねく大衆を照らせり。

そのとき、世尊、諸の菩薩に告げて言さく、善男子、この四正士は不思議の旨趣に住せり。汝等彼の正士に於て、應に殊勝恭敬の心を發して、當に法要を問ふべし。善男子、汝等當に彼の正士の願を聽くべし。彼の正士の願とは有らゆる(一)菩薩乘なり。善男子、善女人、若しかの四菩薩を見ることを得るあらば、無上菩提に於て、不退轉を得。二十俱胝劫に生死に流轉することを超えて、五波羅蜜を具足圓滿す。若し女人有て、その名を聞かば、速に女人の身を捨離することを得ん。このとき、世尊、かの刹

(一) 菩薩乘 六波羅蜜の修行して自身成佛し更に大悲教化の修行する法のこゝ。

を現じ已て、還つて神力を攝す。而して彼の世界忽然として現せず。

そのとき、文殊師利、佛に白して言さく、世尊、一切の法は幻の如し。譬へば幻師の幻事を化作するが如し。幻にして復た隱なり。世尊、是の如く一切の法生じ已て復た滅す。亦た生滅なし。これ即ち平等なり。世尊、若し平等を學せば、疾かに無上正等菩提を證せん。

そのとき、智上菩薩、文殊師利童眞菩薩に白して言さく、云何んが無上菩提を證せん。文殊師利の言さく、善男子、法は所得なく、亦た所壞なし。無に於て所著なく、有に於て所得なし。智上菩薩の言さく、文殊師利は有の爲めの故に、菩提を獲るや、無の爲めなりや。答へて言はく、善男子、法は本より生無く、已有無く、今有無く、當有無く、究竟所得無し。智上菩薩の言さく、文殊師利、何を以て、一相にして法を説くや。文殊師利の言さく、善男子、云何んが所説の一相の法なりや。智上菩薩答へて曰はく、文殊師利、蘊ウン及び處界ジョカイを見ず、また見るなきに非ず、亦た見るあるに非ず。法に於て分別なく、亦分別するところなし。又た法に於て積集せられず、亦法に於て散失せられず。是れを即ち名づけて一相の法門となす。

師子勇猛雷音菩薩の曰さく。若し法性に於て法性に違はず、種種の分別を作さず。是れ凡夫の法、是れ聲聞の法、是れ緣覺の法、是れ如來の法、一相に入る。謂く遠離相なり。是れ即ち名づけて一相の法門となす。

喜見菩薩の曰さく、若し眞如シニョを修行し、眞如に於て、思惟する所なく、亦た分別せず。これは是れ甚深なり。是れ即ち名づけて一相の法門となす。

無盡辯菩薩の曰さく、諸法はみな盡き、究竟して盡きなば、乃ち無盡と曰ふ。一切の法盡くべからずと説かば、是れ即ち名づけて一相の法門となす。

善思惟菩薩の曰さく、若し思惟に於て、不思議に入る。かれ所思なく、亦た不可得なり。是れを即ち名づけて一相の法門となす。

離塵菩薩リジンの曰さく、若し究竟染せず。一切の相に於て、染所染なく、亦た愛せず、恚らず、癡ならず、一と作らず、異とならず、亦作に非ず、亦不作に非ず、取らず、捨せず。是れ即ち名づけて一相の法門となす。

娑藥羅菩薩の曰さく、若し甚深の法に入り、測り難きこと大海のごとし。正法に於て亦た分別せず。是の如く住して、是の如く説きて、自に於て所思なく、他に於て所

説なし。是れ即ち名づけて一相の法門となす。

月上童眞菩薩の曰さく、若し一切の有情を思惟し、平等にして月のごとし。而して亦た我れ及び有情を思はず。是の如く説かば、是れ即ち名づけて一相の法門となす。

摧一切憂關菩薩の曰さく、若し憂惑に遇ふて、而も憂ふ所なし。憂箭に於て亦た疲厭せず。云何んが有情憂根を起さん。謂はゆる我に於て、若し我を有して平等に住せば、是れ即ち名づけて一相の法門となす。

無所緣菩薩の曰さく、若し欲界を緣せず、色、無色界を緣せず、聲聞緣覺の法を緣せず。佛法を緣せず。是の如く説かば、是れ即ち名づけて一相の法門となす。

普見菩薩の曰さく、若し法を説かば、應に平等を説くべし。その平等とは、謂はゆる空性なり。空性に於て思惟せず。平等は、平等の法に於て、亦た所得なし。是の如く説かば、是れ即ち名づけて一相の法門となす。

三輪清淨菩薩の曰さく、夫れ所説の法は三輪を違せず。云何んが三となす。我に於て所得なく、聞に於て分別せず、法に於て所取なし。是の如きを名づけて三輪清淨となす。是の如く説かば、是れ即ち名づけて一相の法門となす。

(二) 瑜伽相應を  
開す三密の觀行を  
いふ。

成就行菩薩の曰さく、若し一切法不著なりと知り、是の如く知り、是の如く説きて、亦た一字を説かず。謂はゆる言説を離るゝが故に、若し是の如く一切法を説かば、是れ即ち名けて一相の法門となす。  
深行菩薩の曰さく、若し(三) 瑜伽を樂ひ、一切の法則を知らば、諸法に於て、所見なし。彼れ、若しは説き若しは説くなくば、法に於て、無二なり。是れ即ち名けて一相の法門となす。  
是の如く無量大威徳諸菩薩等、各各自の辯才を以て一相の法を説きたまへり。此の一相の法門を説くの時、七十俱胝菩薩無生法忍を得、八萬那庾多百千の有情、無上正等菩提の心を發し、七千の苾芻、諸の有漏を盡くして心に解脱を得、九十六那庾多の人天、法眼淨を得たりと。

そのとき、師子勇猛雷音菩薩、摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、彼の普見如來、幾何の大菩薩衆有て、眷屬となり、壽量幾何ぞ、却後幾時ぞ。文殊師利等正覺を成じたまふ。佛の言さく、善男子、是の如くの義當に文殊師利童眞菩薩に問ふべし。そのとき、師子勇猛雷音菩薩摩訶薩、文殊師利童眞菩薩に問ふて言さく、汝却後幾時か、

(二) 漏盡阿羅漢  
一切の煩惱を斷盡  
して阿羅漢の位に  
上りしもの。

當に菩提を得べきや。文殊師利の言さく、善男子、若し虚空界にして色相とならば、我れ乃ち無上菩提を證せん。若し幻師の所幻の丈夫、菩提を證せば、我れ乃ち當に無上菩提を證すべし。若し(三) 漏盡阿羅漢、菩提を證せば、我れ乃ち無上菩提を證すべし。若しは夢中の丈夫、若しは光影、若しは響應、かくの如く變化して、菩提を證せば、我れ乃ち當に無上菩提を證すべし。若し日光を以て夜月光となり、晝とならば、我れ乃ち當に無上菩提を證すべし。

善男子、汝當に菩提を求むる者に問ふべし。師子勇猛の言さく、文殊師利豈に菩提を求めざらんや。答へて言さく、善男子、いなと。何を以ての故に。文殊師利は即ち是れ菩提なり。菩提即ち文殊師利なり。何を以ての故に、但だし名字のみ有り、名字亦た空なり。文殊師利、乃至菩提の名亦た遠離す。無所有空なり。空は即ち菩提なり。そのとき、佛、師子勇猛雷音菩薩に告げて言さく、汝、無量壽如來聲聞菩薩諸衆會を見聞するや。唯だ然り。世尊我れ已に見聞せり。善男子意に於て云何ん。答へて言はく、是れ算數思議の能く及ぶ所にあらず。佛の言さく、善男子、摩伽陀國の量一婆訶胡麻のごとし。一粒を取て、無量壽佛國聲聞菩薩衆會に喩ふ。餘は況んや文殊師利童眞菩

薩菩提を得るの時をや。菩薩衆會應に是の如く知るべし。善男子、三千大千世界を以て、未<sup>ま</sup>して微塵となして、一塵一切の如し。若し普見如來の壽量に比せば、劫數百分千分百千俱胝分、乃至、算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。善男子、算數を以て壽量を計校して、應に普見如來の壽命無量無邊なるを知るべし。善男子、譬へば三千大千世界を析て微塵となし、或は一丈夫有て、一微塵乃至衆多の塵數を取つて、三千大千世界を過ぎて、乃ち一塵を下し、彼の丈夫かくの如く東行して微塵を下し盡くすが如し。是の如く十方一の丈夫、前に准じて、彼の微塵數を下し盡くす。善男子意に於て云何ん。かの三千大千世界、是れ百、是れ千、是れ俱胝那庾多百千、その量を知るやいなや。答へて言はく、いななど。世尊、善男子、是の如く十丈夫、各々三千大千世界を過ぎて又た微塵を下す。彼の一切の世界、已に下し、未だ下さざるも盡く末して塵となす。善男子意に於て云何ん。豈に能く是れ百、是れ千、是れ俱胝那庾多百千數を算計せんや、いなや。答へて言はく、いななど。世尊、佛の言さく、善男子、乃至十方の十丈夫。復た三千大千世界を過ぎて、下す所の微塵、及び未だ下さざる處の微塵又た末して塵となす。善男子、意に於て云何ん。豈に能くかの微塵の是れ百、是れ千、

是れ千、是れ俱胝那庾多百千、乃至仰藥羅、泯末羅、阿閼婆等を算計せんや。世尊、若し人この算數を聞かば、心則ち迷亂して、その數量を知るべからず。佛の言さく、善男子、如來は悉くかの微塵、是れ百、是れ千、是れ俱胝那庾多百千、乃至仰藥羅、泯末羅、阿閼婆等を知りたまふ。善男子、かくの如く如來、悉く知り、復た彼の量を過ぎたまふ。

そのとき、慈氏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、若し菩薩有て、是の如く色の無盡なるを了する智を求めば、寧ろ無量劫の中に於て、<sup>(一)</sup>泥黎<sup>ナイリ</sup>の苦を受けん。而して是の菩薩かくの如く色大智の中に於て、終に棄捨てず。佛の言さく、慈氏、是の如し。是の如し、汝が所説の如し。豈に佛の無盡の大智に於て希望を起さざることあらんや。唯だ下劣勝解、及び懈怠者のみを除けり。この如來大智を説くるとき、一萬の有情菩提心を發せり。

佛、師子勇猛<sup>ユウメイ</sup>に告げて言さく、善男子、かくの如く十方世界微塵、かの丈夫、微塵數を下して、是の如く等の微塵數劫を過ぐ。善男子、文殊師利童眞菩薩、かの多劫に於て、示現して菩薩の行を行じたまふ。何を以ての故に、善男子、文殊師利は不可思議

なり。願も亦た不可思議なり。趣向も亦た、不可思議なり。菩提を證し已て、壽命も亦不可思議なり。菩薩の衆會も亦た不可思議なり。

そのとき、師子勇猛雷音菩薩摩訶薩、佛に白して言さく、世尊、希有なり、文殊師利の發趣甚大なり。所修の行大なり。謂ゆる文殊師利童眞、乃ちその微塵數劫に於て、疲倦を生ぜず。文殊師利の言さく、善男子、意に於て云何ん。虚空、是の如く晝夜・半月・月・時・歳・劫・百劫・千劫・俱胝那庾多百千劫を念することありやいなや。答へて言はく、いな。文殊師利、何を以ての故に。虚空界は分別なきが故に。文殊師利の言さく、善男子、若し虚空等の如く、一切の法を悟らば、悟るに隨て、是の如く亦た分別せず、分別する所なし。かの晝・夜・半月・月・時・歳等に於て、先の所説の如く、少想を法に於て起す者あることなし。善男子、虚空界のごとく、大火熾然として、無量殑伽沙劫を過ぎて、虚空界曾て生起せず、亦た燒壞せず。何を以ての故に、虚空界自性なきが故に。是の如く善男子、若し菩薩一切法、性無く、亦た熱惱疲倦無しと知らば、虚空の燒けず、疲倦及び熱惱を生ぜざるが如く、動搖せず、亦た生せず、朽ちず、死せず、遷らず、起らず、去無く、來無し。是の如く、是の如し。善男子、文殊師利の

名號亦た爾り。燒壞せず、亦た疲倦せず、亦た熱惱なく、亦た動搖せず、生せず、朽ちず、死せず、遷らず、起らず、去なく、來なし。何を以ての故に、名字究竟遠離するが故に。この法を説くの時、四大天王、釋提桓因・大梵天王・及び餘の大威徳・諸天子等・異口同音に是の如き言を唱へき。若し諸の有情この法門を聞かば、大善利を獲べし。何に況んや、受持讀誦をや。當に知るべし、少善根を以て而かも能く成就せざること。世尊、我等この法門に於て、受持讀誦廣宣流布せり。正法を護持せんがため故に。

そのとき、師子勇猛雷音菩薩、佛に白して言さく、世尊、善男子、善女人、この法門に於て、受持讀誦して、他のために、是の如き法要を宣説し、佛刹莊嚴成就して、是の如き心を發せり。文殊師利所得の功德のごときは、幾許とやせん。佛の言さく、善男子、如來は障礙の眼を以て世界を見らる。若し菩薩有つて七寶を以て彼の世界に満て、一一の佛に奉獻供養し、乃至盡未來際俱胝劫の中に捨施して、この菩薩をして淨戒律儀に安住せしめ、一切の有情に平等の心を得せしむ。若し菩薩有て、この佛刹功德莊嚴法門を受持讀誦し、復た能く發心して文殊師利所學の行に隨ひ、七步功德の聚

に於て、前の福聚に比すれば、百分・千分・二〇迦羅分・百千俱胝分・乃至算數も及ぶこと能はざる所なり。

そのとき、文殊師利菩薩、菩薩平等照曜如幻相三摩地に入り、入り已て、文殊師利三摩地に由るが故に、乃至衆會の菩薩等近く十方無量無邊の諸佛世界を見、一一の佛前に、みな文殊師利有て、自ら佛刹功德莊嚴を説く。衆會見已て、文殊師利勝願三摩地智に於て奇特を生ずること、文殊師利童真菩薩法王の子のごとく、百千俱胝那庾多の願に於て我等咸く見き。

そのとき、慈氏菩薩、佛に白して言さく、世尊、當に何んが此の法門を名くべき。云何んが受持せん。佛慈氏に告げたまはく、今この法門を名けて諸佛遊戯となす。汝當に受持すべし。亦は不思議願と名く。汝當に受持すべし、亦た佛刹功德莊嚴と名く。汝當に受持すべし。亦た發菩提心令歡喜と名く。汝當に奉持すべし、

そのとき、十萬無量の菩薩衆集會者、佛及び法に於て大供養を作し、衆の天花を雨ふらし、頭面禮足、佛を繞ること三匝にして各々本土に還へりて、この讚を作して言はく、奇なるかな。世尊、奇なるかな、世尊。我等をしてこの不思議の法を聞かしめよ。

及び文殊師利童真菩薩、大に師子吼してこの法を説き已て、唵伽沙數の菩薩、無上菩提に於て不退轉を得、無量の有情善根を成就せり。佛この經を説き已て、文殊師利童真菩薩摩訶薩、師子勇猛菩薩摩訶薩あらゆる諸の大聲聞・梵釋・護世・天龍・藥叉・健達嚩・阿蘇羅・藥路茶・緊那羅・摩呼羅伽・人・非人等皆大に歡喜して信受奉行せり。

國譯大聖文殊師利菩薩佛刹功德莊嚴王經卷下 終

# 國譯大集大虛空藏菩薩所問經卷第一

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食品三千戶賜紫贈司空謚  
大鑑正號大廣智大興善寺三藏沙門不空 詔を奉じて譯す

かくの如く、我れ聞く、一と時薄伽梵、如來の境界寶莊嚴道場に在ましき。この道  
場は、みなこれ如來の加持する所、廣大の福德資量を積集し、大行等流の成就する  
ころなり。これ諸菩薩所住の宮殿にして、無邊甚深の法を演説する處なり。亦、これ  
如來(一)遊戯神通無礙智(二)の境なり。能く廣大善巧の念慧を生じ、無所有に入る、智所行  
の處なり。盡未來世に、無量殊勝の功德を稱讚す。世尊、一切の諸法を現證し、平等  
自在にして、善く無上清淨法輪を轉んじ、善能く諸の弟子衆を調伏し、善く一切有情の  
意樂に達し、善く一切諸根の彼岸を知り、善く一切煩惱の結習を斷じ、諸の佛事に於  
て任運に施作して休息あることなし。大慈苾芻衆六百萬人と俱なりき。この諸の苾芻は、  
みな是れ如來法王の子なり。心善く解脱し、慧善く解脱す。已に一切煩惱の結縛を斷  
じて、善く一切甚深の佛法を説く。復た能く(三)無相法に通達し、端嚴殊特にして、威

(一) 遊戯神通無礙  
智 佛菩薩の衆生  
を濟度すべく有す  
る不思議自在なる  
實智のこと。

(二) 無相法 涅槃  
真理のこと。



(一) 諸佛刹土の謂なり。諸佛の刹土なり。  
(二) 刹那。最短期間をいふ。  
(三) 無礙解。四種あり。之を四無礙解又は四無礙辯等とも稱す。佛菩薩の説法の自在自由の智慧のこと。  
(四) 一切智々。佛のこと。

(五) 寶樓閣。樓閣なり。

(六) 空居。空居天のこと。

儀を具足し、大福田増長の處となり、善く如來の教令する所に住したまふ。復た菩薩摩訶薩衆あり、(一) 諸佛刹土より來りて集會す。その數無量にして思議すべからず、譬喩すべからず。言説すべからず。この諸の菩薩、(二) 刹那の頃に於て、無邊の諸佛世界に遊戯して、一切如來に供養奉事し、説法を勸請し、法を聞て厭はず、常恒に一切有情を成熟し、善巧方便、能く第一清淨彼岸に到り、(三) 無礙解に住し、種種の分別戲論を超越し、位みな(四) 一切智々に隣近す。その名を電天菩薩、戰勝菩薩、遍照菩薩、勇健菩薩、摧疑菩薩、奮迅菩薩、觀察眼菩薩、常舒手菩薩といふ。是の如く等の上首菩薩摩訶薩と俱なりき。

そのとき、世尊、諸の菩薩摩訶薩のために、大集會甚深の法を説きたまふ。時に一切大衆、虚空に處在して、(五) 寶樓閣に住せり。而して此の樓閣の莊嚴殊勝なること、猶ほ大莊嚴世界の中一寶莊嚴佛土のごとく、諸の菩薩衆の住する所の樓閣と異なることなし。この諸の大衆各相見て、みなその中に坐したまふ。時にこの三千大千世界、一切の色像・蘇迷慮山・輪圍山・大輪圍山・瞻部洲等・聚落・城邑・江河・泉流・陂池・大海・叢林・草木・一切地居・あらゆる宮殿・悉くみな隱蔽して、復た現せず。欲・色・空居乃

(一) 有頂。有頂天のこと。即ち色究竟天にして色界の第四位に在り。  
(二) 師子座。如來の坐する座。  
(三) 踰繕那。數量の無限を示す語なり。

(四) 舍利子。釋尊の弟子舍利弗なり。

至(一) 有頂の諸天・宮殿・及び諸の有情・形色の類・亦た悉く現せざること、猶ほ劫燒火災の後、大地焚熱して、唯だ虚空のみあつて、中に一色として眼の爲めに、見らるゝことなきが如く、此れも亦、是の如き三千大千世界の中一色の相、諸の有情の眼の爲めに、觀見せらるゝことなし。唯だ此の寶莊嚴道場の聲聞・菩薩・諸天龍・藥叉・乾闥婆等一切衆會のあらゆる色像了然に顯現するを除く。又この道場に、(二) 師子座あり。自然涌出して、その量高廣なること、萬(三) 踰繕那なり。この師子座より淨光明を出して、普ねく三千大千世界を照して、日月釋梵護世のあらゆる諸光を映蔽して、みな復た現せず。佛その上に坐したまふとき、諸の大衆、この奇特勝妙の相を見已つて、踊躍歡喜し、未曾有と歎じ、互に相ひ謂つて言はく、是の如く殊勝莊嚴樓閣善巧差別は、假使ひ、我等一劫の壽に住して説くとも能く盡くすこと莫からんと。そのとき(四) 舍利子、佛の威神を承け、寶樓閣より虚空に起住して、衣服を整理し、偏へに右の肩を袒ぎ、踰跪合掌して、佛に白して言さく、世尊、是れ何の因縁を以て、先づ此の瑞を現んじ、この三千大千世界のあらゆる色像を悉くみな隱蔽すること、大虚空の如し。唯だかくの如く所居の衆寶莊嚴樓閣のみ有て、自然に顯現すと。佛舍利

(一) 如來等 佛の十名、前出。  
 (二) 劫 時の長さないふ。  
 (三) 法印 佛の説きたまへる正しき法のこと、印の決定して確實なるに比して法印と稱す。

子に告げたまはく、汝今この寶樓閣を見るやいなや。答へて言はく、已に見る。佛の言はく、舍利子、汝能くこの寶樓閣の功德を讚歎し盡すや、いなや。舍利子の言はく、我が壽量を盡すとも、眞實功德を稱讚すること能はず。是の如し。舍利子、世界あり、大莊嚴と名く。彼の中あらゆる妙寶樓閣一切衆會、みな虚空に住せり。今この樓閣は、彼れの現する所の如し。舍利子、佛に白して言さく、世尊、かの大莊嚴世界は、今何れの許に在りや。佛の言さく、舍利子。東方この八佛世界微塵數の佛土を過ぎて、世界あり、大莊嚴と名け、佛を一寶莊嚴(一)如來・應供・正遍智・明行足・善逝・世間解・無上士・調御・丈夫・天人師・佛世尊と號し、今現に在まして說法したまふ。舍利子、何の因縁を以て、大莊嚴と名く。かの世界の中、あらゆる莊嚴殊勝の事は、若しは我れ世に住して、(二)劫の壽を以て説くとも盡くすこと能はず。この故に、之を名けて大莊嚴となす。復た何の縁を以て、名けて一寶莊嚴となす。かの佛常に説かく、唯だ大菩提心のみを以て、その寶となすと。この故に、名けて一寶莊嚴となす。かの佛說法して、諸の菩薩と、師子座及び寶樓閣に昇り、虚空に踊在して、高さこと八十俱胝多羅樹、諸の菩薩の爲めに、虚空清淨の(三)法印を説きたまふ。善男子、云何んが名けて虚空清

(一) 緣慮 心慮のこと。

(二) 雜染 無明妄執に染るること。  
 (三) 本不生 生滅變化なき永恒の眞理のこと。

淨法印となす。謂ゆる一切の法は性無性を離るゝが故に。云何んが性無性を離るゝや。謂ゆる一切の法は表示する所なきが故に。云何んが表示なきや。謂ゆる一切の法は光顯なきが故に。云何んが光顯なきや。謂はゆる一切の法は(一)緣慮を遠離するが故に。云何んが緣慮なきや。謂ゆる一切の法は寂靜の相なるが故に。云何んが寂靜の相なるや。謂ゆる一切の法は二相なきが故に。云何んが二相なきや。謂はゆる一切の法は別異を遠離するが故に。云何んが別異なきや。謂ゆる一切の法は一道の相に入るが故に。云何んが一道の相に入るや。謂はゆる一切の法は自性相清淨なるが故に。云何んが自性相清淨なりや。謂ゆる一切の法は三世に超過するが故に。云何んが三世を超過するや。謂はゆる一切の法は依處なきが故に。云何んが依處なきや。謂はゆる一切の法は影像なきが故に。云何んが影像なきや。謂ゆる一切の法は境界を超過するが故に。云何んが諸の境界を過ぐや。謂はゆる一切の法は内外清淨なるが故に。云何んが内外清淨なりや。謂ゆる一切の法性は雜染なきが故に。云何んが(二)雜染なきや。謂ゆる一切の法性は寂靜なるが故に。云何んが性寂靜なりや。謂はゆる一切の法は心意識を遠離するが故に。云何んが心意識を離るゝや。謂はゆる一切の法出離の相(三)本不生なるが故に。云何んが出離相本

(一) 涅槃 梵語にして滅多の譯あり煩悩の減盡して迷界の彼岸に度りたるの意。

不生なりや。謂はゆる一切の法は無我攝受するが故に。云何んが無我攝受するや。謂ゆる一切の法は主宰なきが故に。云何んが主宰なきや謂ゆる一切の法性無我なるが故に、云何んが性無我なるや。謂はゆる一切の法は本來清淨なるが故に。云何んが本來清淨なるや。謂はゆる一切の法は本涅槃なきが故に。云何んが(一)涅槃なきや。謂はゆる一切の法性如幻なるが故に。云何んが性如幻なるや。謂ゆる一切の法は實事なきが故に。云何んが實事なきや。謂はゆる一切の法は造作の相なきが故に。云何んが造作の相なきや。謂はゆる一切の法は身心の相を遠離するが故に。云何んが身心の相を遠離するや。謂はゆる一切の法は離相無相なるが故に。云何んが相無相なるや。謂ゆる一切法の自相は動せざるが故に。云何んが自相動せざるや。謂はゆる一切の法は依止する所なきが故に。云何んが依止する所なきや。謂はゆる一切の法は所縁なきが故に。云何んが所縁なきや。謂ゆる一切の法は(二)阿頼耶を遠離するが故に。舍利子、かの一寶莊嚴如來は、諸の菩薩のために是の如くの三十二虚空清淨の法印を説きたまふ。時に無量の菩薩、諸の法の性を知りて、虚空と等しく法自在清淨智忍を得たり。舍利子、かの大莊嚴世界のあらゆる菩薩は、布施莊嚴を以て無量劫に於て隨順して捨つるが故に。淨戒莊嚴を以て身心清淨

(二) 阿頼耶 梵語にして無没の譯あり心に一切萬有を藏するが故に心を阿頼耶識といふ。

(一) 等持等至 心を一定の處に專注して靜亂せざることをいふ。

にして諸の垢なきが故に。忍辱莊嚴を以て、諸の有情に於て害心なきが故に。精進莊嚴を以て、一切の法資糧を積集するが故に。靜慮莊嚴を以て、一切解脱等持等至に遊戯するが故に。智慧莊嚴を以て一切煩惱の習を遠離するが故に。大悲莊嚴を以て、一切の有情を拔濟するが故に。大悲莊嚴を以て、一切の有情を捨てざるが故に。大喜莊嚴を以て、一切の有情に於て常に喜悅するが故に。大捨莊嚴を以て、一切の有情に於て、憎愛なきが故に。復次に、舍利子、かの一寶莊嚴如來世界の中に、菩薩摩訶薩あり、大虚空藏と名く。大福德、及び大威力を以て、自ら莊嚴して、無礙智を獲、相好を以て、身を莊嚴し、辯才を以て、語を莊嚴し、勝定を以て、心を莊嚴し、多聞總持を以て、念を莊嚴し、(三)平等捨を以て、實を莊嚴し、慧を以て、諸趣意樂を莊嚴し、勝進加行を以て、増上の意樂を莊嚴して、一切法の疑惑なきに到るが故に、神足を以て莊嚴し、自在に諸の神通に遊戯するが故に、福德を以て莊嚴す。寶手功徳を獲、常に施捨するが故に、智を以て莊嚴す。有情の種の意樂を分別するが故に、覺を以て莊嚴す。諸の有情をして勝法を悟らしむるが故に、眼を以て莊嚴す。能く(四)五眼に於て清淨を得るが故に、耳を以て莊嚴す。諸法の義を聲くこと、響應の如くなるが故に、無礙解を以て莊嚴す。

(三) 平等捨 捨は怨親平等。

(四) 五眼 一内慧眼 二天眼 三法眼 四佛眼 五佛眼。

(一)法・義・詞・辯  
法無礙は物として  
知らざるなく義無  
礙は理に通し無  
詞無礙は言語に通  
し樂説無礙は人  
に應し説を説くる  
自在なり辯舌の  
圓満なり

(二)法・義・詞・辯・無盡に説くが故に、力を以て莊嚴す。佛の十力を得て、魔怨を壞するが故に、無畏を以て莊嚴す。諸の外論を摧き、所屈なきが故に、功德を以て莊嚴す。佛無邊の諸の功德を獲るが故に、法を以て莊嚴す。衆毛孔より法を演ぶること、響の如きが故に、明を以て莊嚴す。能く一切の佛法藏を見るが故に、光を以て莊嚴す。一切の諸の佛刹を照耀するが故に、記心を以て莊嚴す。錯謬なきが故に、教誡を以て莊嚴す。如説に行せしむるが故に、神境を以て莊嚴す。一切種類の相を變現するが故に、一切佛の讚歎を以て莊嚴す。繫屬なきに住して自在を得るが故に、一切の善法を以て莊嚴す。一切佛法の境に入るが故に、舍利子、かの虚空藏菩薩摩訶薩、かくの如き無量の功德を成就し、諸の菩薩と、意を發して、この娑訶世界に詣り、我を瞻仰し、恭敬禮拜し、奉事供養せんと欲す。亦この大集會微妙法門を分別せんがために、この十方諸來の菩薩をして、大喜悅清淨の信樂を生せしめ、又た菩薩をして攝受して大に道法を攝受せしむるが故に。

そのとき、大虚空藏菩薩摩訶薩、十二俱胝菩薩フナヒゴサツと前後圍繞して、一心に一寶莊嚴如來を瞻仰して白して言さく、世尊我れ今娑訶世界に詣りて、釋迦牟尼佛を禮拜供養せん

と欲す。願はくは聽許せられよ。彼の佛告げて言さく、今は正にこの時なり。汝が意に隨つて往け。即時に一寶莊嚴如來の足を頂禮し、已て住對面念して、佛の遊戯無行神通を承け、かの國より没して、忽然として現せず。一念の頃に、衆の菩薩と、この娑訶世界寶莊嚴道場に至り、虚空に住して、かの世界の衆妙花香を散らして、雨の如くにして下る。謂ゆる抹香・塗香・幢旛・紺蓋・月花・大月花・妙殊勝花・日月光花・日燈花・日精花・愛花・大愛花・照曜花・娑闍羅花・勝妙娑闍羅華・遍無垢花・清淨無垢花・金光照曜花・虚空照曜花・大白香照觸花・百葉千葉花・除憂花・作喜花・天所讚花・龍花・安樂生喜花・禪枝花・令身快樂花・令心歡喜花・香遍三千世界花・息除衆病華・妙威德莊嚴花・流出無邊福德花・照觸十方菩薩華、かくの如く等の種種の妙華を雨ふらして、積りて高うして膝に至り、三千大千世界に周遍せり。時に諸の大衆、この花を見已て、白して言さく、世尊かくの如く種種の勝妙の諸華、衆妙の伎樂は、昔よりまだ見ざる所、昔より未だ聞かざる所なり。何れの所より來るや。願はくは開示せられん。佛の言さく、是れかの大虚空藏菩薩摩訶薩は、大莊嚴世界より、この會に來り、虚空に住し、先は是の如く勝妙の諸花を雨ふらして、我及びこの經法を供養したてまつる。

(二) 大集經 大方  
等大乘經のこと。

(一) 伽他 偈のこ  
と。  
(三) 上法功徳妙智  
尊 佛を尊敬して  
いふ。

そのとき、大虚空藏菩薩摩訶薩は、俱來の菩薩と空より下つて、頭面禮足して、佛を  
遶ること三匝にして、一面に住して立ち、佛に白して言さく、世尊、かの一寶莊嚴如  
來は世尊に少病・小惱・起居・輕利・安樂行を問訊せしやいなや。  
こゝに十二俱胝の菩薩あり、昔曾て世尊の化導を受くるを以て、我と俱に來てこの娑  
訶世界に詣り、(一) 大衆經を聽聞せんと欲するがための故に。かの世尊、諸の菩薩をし  
て一切法に於て自在を得せしめんと欲するがための故に、大法を成就するが故に、唯  
だ願はくは、世尊、哀愍攝受して、爲めに是の如き甚深の法要を説きたまへ。そのと  
き、大虚空藏菩薩、即ち空中に於て、大寶蓋と變じ、衆寶莊嚴して如來の頂を覆ひ、  
光明照耀して、遍ねく十方に徹し、如來師子座に昇り給ふ。その座高廣きこと萬踰繕  
那なり。是に於て、大虚空藏菩薩、合掌して佛を讚し、(二) 伽他を説いて曰はく。  
(三) 上法功徳妙智尊、清淨無垢にして限量なし、  
空の平等なるが如く寂として動くことなく、甚深を敬禮して與等なし  
能く身相微妙の色を示し、法身を離れずして是の身を現んじ、  
悲有情に隨ひ身も亦然り、普ねく百福莊嚴の相を現んじたまふ。

(一) 無間 絶えざ  
ること。

(二) 諸法 天地萬  
物の謂なり。  
(三) 虛妄分別 虛  
しく妄りに分別す  
る誤りたる判断。  
(四) 凡夫の智慧なり。  
(五) 業果 善業を  
なして善果を得、  
惡業をなして惡果  
を得ること。

已に音聲を離れて聞見なく、諸の言詞を斷じて説示なし。  
語性空響の如しと知ると雖も、大悲心を以て演説したまふ。  
諸の有情に於て心は平等なり、心は幻の如く自性なしと知り、  
悉く心行思慮なしと知り、平等究竟心を心となしたまふ。  
種種を示現して世間を度し、善逝の身形は所得なし、  
妙所依功徳の體を以て、其の所樂に隨て爲めに身を現じたまふ。  
法は所得なく、佛も亦然り、法に着せず分別を離れ、  
法能く有情を度すと知るが故に、宜に隨て爲めに説き常に(一) 無間ならん。  
大衆普ねく共に佛身を觀んじ、所現の色相みな差別せり、  
世尊已に身心の相を離れ、現するに隨て皆衆をして歡喜せしむ。  
因縁和合して(二) 諸法生ず、(三) 虛妄分別眞實に非ず。  
諸法悉く是の如くと知るを以て、成正覺を得涅槃を證したまふ。  
既に分別を斷じて、中邊を離れ、その空寂にして自性なしと知り。  
諸法の性清淨なりと知ると雖も、善く(四) 業果を説きて差違なからん。

法は有情、壽、及び人なく、寂然として空の如く名字を離れ。

彼の有情實に有にあらすと了し、悉く甘露の門に證入せしめたまふ。

已に百億を修して難思を行じ、精進して無上道を求め、

此の因縁に由て已に成辨し、無行處に到りて涅槃を覺りたまふ。

(一) 妙覺 涅槃の

平等地に住して分別なし、故に佛は常に不定の心なし。

(二) 蘊處界みな幻の如しと知り、(三) 三界は猶ほし水中の月の如し。

有情は夢の如く性は眞に非ず、爲めにかくの如く眞法に非すと説きたまふ。

世話を説きて無上覺を成じ、得無得の相を説くべからず。

菩提得なく輪も亦然り、轉無轉の相は所轉なし。

彼岸に自ら度し、他を度せしめ、諸の(四) 繫惑を自ら解し他を解せしめ、

自ら安んじ他を安んじて大乘に置き、自他俱に涅槃の樂を證したまふ。

有情は生なく亦た滅なく、有情本來常に清淨なり。

有情の自性は如幻の相、有情既に悟て菩提を證す。

(一) 蘊處界 五蘊  
十二處と十八界  
皆身心を集合せる  
元素なり。  
(二) 三界 欲界と  
色界と無色界の世  
界をいふ。

(四) 繫惑 煩惱を  
いふ。

(一) 妙覺 涅槃の

平等地に

蘊處界

三界

有情

世話

菩提

彼岸

有情

自他

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

自ら

(一) 如々眞德尊  
佛身をいふ。

(二) 平等尊 佛の

(三) 六種變動 不  
思議の靈瑞なり。  
(四) 阿耨多羅三藐  
三菩提 無上正等  
正覺をいふ覺心な  
り。

色は虚空の如く生あることなく、一切の世間も亦是の如し、

是の法は色なく色相を離れ、是の義を知るに由て色寂靜なり。

喩を以て如來の德を稱したてまつり、有情讚を聞き皆な深著す。

佛德は空のごとく量るべからず、是の如き無二眞讚佛、

敬禮して能く諸の有情を覺らしむ、觀なく心なくして無得に至る。

唯だ諸佛のみ有て、能く佛を讚す、我れ(一) 如々眞德尊を禮したてまつる。

諸の有情は我人なしと了し、諸佛の法界は同じく一相なり、

已に諸法は欲相を離ると知る。故に我れ(二) 平等尊を供養したてまつる。

そのとき、大虚空藏菩薩摩訶薩、この伽他を説き已て、即時に、寶莊嚴道場、妙寶樓

閣、(三) 六種震動して、空中より聲を出して、是の言を作さく、釋迦牟尼世尊、無數俱胝那

庾多百千劫の中に於てあらゆる積集する(四) 阿耨多羅三藐三菩提の法を、この大虚空藏

菩薩は、妙伽他を以て、悉く能く稱揚したまふ。善男子、若し夢中に於て、尙ほ未だ曾て

聞かず。何に況んや見ることを得んや。若し善男子、善女人有りて、この伽他を聞きて、

能く信解を生じ、解し已りて修行せば、當に知るべし、この人漸次に久しからずして、

(二) 師子吼。佛の  
説法する事。

能く(二)師子吼すること、虚空藏菩薩の如しと。

(一) 正士 菩薩の  
こと。  
(三) 法光明 一切  
諸法を分明に了達  
すること。

(四) 授記 前出。

(五) 纏蓋 纏ひ蓋  
ふ義にて惑障又は  
煩惱と同じ。

そのとき、大虚空藏菩薩摩訶薩、佛に白して言さく。世尊、我れ大集經典を聞かんと欲するための故に來て此の娑訶世界に至り、世尊を瞻仰し、禮拜供養して、この法を聽聞す。今この衆中諸來の(一)正士、各々法に於て疑心あり。唯だ願はくは世尊諸法に於て、(二)法光明を得、決定慧を生せしめん。善いかな、世尊。我れ今決定の義を問はんと欲す。唯だ願はくは如來少しく方便を賜へ。何を以ての故に、世尊、この無礙智とは、善く一切有情の諸根前後に熟するを知るが故に。世尊、光明を得とは、諸の闇暝を離るゝが故に。世尊、義を知るとは、時を越えずして(三)授記するが故に。世尊、宜を知るとは、諸の有情に於て宜に隨て法を説くが故に。世尊、遊戯とは、諸の神通に於て自在を得るが故に。世尊、淨觀察とは、有情の心行を了して、掌中のごとくなるが故に。世尊、高大とは、能く頂を見ることなきが故に。世尊、勇健とは、三千界の中、能く陵屈することなきが故に。世尊、自然とは、師なくして一切の法を證悟するが故に。世尊、導師とは、諸道の中に於て、正路を示すが故に。世尊、大醫王とは、甘露の藥を以て、能く永く有情の惑障、(四)纏蓋の病を除斷するが故に。世尊、大力を

(一) 三明 又は智  
明 智證明といふ。  
明の能く萬法を證  
明するに名く。又  
宿命明 二 天眼  
明 三 漏盡明  
(二) 三摩鉢底 禪  
定の一種。  
(三) 解脫知見 五  
分法身の中の第  
五、涅槃の妙理を  
證得せしことを自  
覺する智慧なり。

(四) 彼岸 涅槃の  
こと。

持すとは、是處・非處・乃至(一)三明を得るが故に。世尊、大無畏とは、一切の世間・沙門・婆羅門・諸天・魔・梵の中に於て、大師子吼して所畏なきが故に。世尊、成就不共法とは、三世無礙智・身口意清淨・(二)三摩鉢底・(三)解脫知見等不共の法を獲得するが故に。世尊、大慈に住すとは、無礙慧を以て、諸の有情に於て、平等に觀察すること虚空の如きが故に。世尊、大悲に住すとは、平等慧を以て、諸の有情に於て、善行・惡行、若しは苦・若しは樂・所動なきが故に。世尊、大喜に住すとは、禪定を行じて解脫し、(四)彼岸に到るが故に。世尊、大捨に住すとは、心憎愛なきこと、虚空の如きが故に。世尊、平等に住すとは、一切如來平等の智に入るが故に。世尊、希望なしとは、智慧満足して名利を遠ざくるが故に。世尊、一切智とは、五眼清淨にして一切の法を見て悉く究竟するが故に。我れ知る、世尊、かくの如く無量無邊の功德を成就したまふ。我等今、法を愛樂するが故に。この法の中に於て、少しく諮問せんと欲す。諸の有情、平等の法に於て、方便して一切智智を出生せしむ。

そのとき、佛、虚空藏菩薩摩訶薩に告げて言はく、善いかな、善いかな、正士。汝、梵伽河沙佛所に於て、已に授記を得たり。我れ今汝に聽かん。所問あるに隨て當に爲

めに分別して歡喜を得せしむべし。是に於て、衆中に菩薩摩訶薩あり、功德王光明と名づく。虚空藏菩薩に問ふて言はく、汝、何の爲めの故に、如來に問ふ。時に、大虚空藏菩薩、即ち伽他を以て之に答へて曰はく。

普心諸の有情に等し、妙心等しく彼岸に住す、

悟心無心にして妙理に入る。是の故に我れ世尊に問ひたてまつる。

光を得て暗なき清淨者、疑なくして能くかの疑惑を斷じ、

決定して解脱を得せしめんがために、是の故に我れ世尊に問ひたてまつる。

我無我悉く清淨なりと知り、常に有情を利して無我に住す、

有情、我見の縛を解脱せり。此等の爲めの故に世尊に問ひたてまつる。

威儀善く淨戒に住し、意樂清淨なること虚空と等し、

堅固不動なること迷慮の若し、是の故に我れ(一)功德者に問ひたてまつる。

精進無邊勇にして退なく、能く我慢の衆魔怨を摧く、

自ら淨うして彼の煩惱の纏を淨む、故に我れ(二)端嚴者に請問したてまつる。

施・戒・忍・精進・禪定・解脱を樂聞して諸の通を發し、

(一)功德者 佛の

(二)端嚴者 佛の

清淨無垢にして勝慧明あり、口に我れ清淨義に問ひたてまつる。

空無相無願に住して、生死或は涅槃を示現し、

生なく、住なく、去來なし、口に我れ清淨智に問ひたてまつる。

甚深の知見は涯際なし、聲聞、緣覺、及び餘の衆。

能く難問することなく測るべからず、我れ爲めに是の如く世尊に問ひたてまつる。

正法を樂つて能く通達し、法と非法と俱に取ることなし、

常に善法に於て心亂れず、是の口に我れ如來に法を問ひたてまつる。

佛種と諸賢士を斷せず、能く正法及び(三)僧伽を護り、

名二世に聞えて諸佛稱す、故に我れ功德海に問ひたてまつる。

そのとき、大虚空藏菩薩、伽他を以て、功德王光明菩薩に答へ已て、佛に白して言は

く、世尊、云何んが菩薩、(一)布施波羅蜜多を修行すること、猶ほし虚空のごとくなる。

云何んが淨戒・忍辱・精進・禪定・(二)般若波羅蜜多を修行すること、猶ほし虚空のご

とくなる。云何んが、福德、智慧の二種莊嚴を修行すること、猶ほし虚空のごとく

なる。云何んが、佛の隨念を捨離せず、法の隨念・僧の隨念・捨の隨念・戒の隨念・

(一)僧伽(Sangha) 和合衆又衆和會と譯す、出家人の衆多和合して佛道を修行する團體のこと。

(二)布施波羅蜜 六波羅蜜の一にして、涅槃なる彼岸に至るなり、波羅蜜は彼岸と譯す。般若 智慧と譯す。



(一) 理趣 道理の  
理趣  
(二) 緣起善巧智  
十二因縁の理を善  
巧妙に觀する智  
のこと。

(三) 四魔 魔(Ma-  
ra)とは煩惱の、  
一煩惱魔、  
二陰魔、三死  
魔、四自在天魔。

天の隨念を捨離せざる。云何んが菩薩、諸行を修行して、涅槃に等し。云何んが菩薩、善く一切有情の行相を知らん。云何んが能く佛法の寶藏を持し、如來等覺、彼の法性の相如實に知らん。云何んが菩薩、善く有情の本來清淨を知り、而して之を成熟せん。云何んが菩薩、理のごとく相應して、佛法を修習し、究竟に至らん。云何んが菩薩、神通を壞せずして、一切の法に於て自在なることを得ん。云何んが菩薩、甚深の佛法の(一)理趣に住することを得、一切の聲聞及び辟支佛の測ること能はざる所なる。云何んが菩薩、(二)緣起善巧智に入りて、一切の邊見を遠離せん。云何んが菩薩、如來の印を以て、眞如に印し、善巧智を間斷せざる。云何んが菩薩、法界甚深の理趣に入りて、一切法を見、互相に周遍して平等一性なる。云何んが菩薩、意樂堅固なること、猶は金剛のごとく、この大乘に於て傾動あることなからん。云何んが菩薩、自の境界に於て清淨なること、佛境界のごとくなる。云何んが菩薩、陀羅尼を得て、法行を忘るゝなからん。云何んが菩薩、怨敵を摧伏し、(三)四魔を超越せん。云何んが菩薩、於て自在を得ん。云何んが菩薩、怨敵を摧伏し、(三)四魔を超越せん。云何んが菩薩、無量の福德資糧を積集し、諸の有情の爲めに依止する所と作らん。云何んが菩薩、無

(一) 海印三摩地  
大海の衆流を入る  
如く佛の衆生を  
修し得たる無量の  
神力ある禪定のこ  
さなふ。

(二) 八法  
利譽、稱譽、喜、  
利譽、稱譽、喜、  
八六四二稱譽、  
苦稱譽、八六四二  
樂讚譽、七五三一

佛の世に出で、諸々の有情のために佛事を作さん。云何んが菩薩、(一)海印三摩地を獲得し、一切有情の心行に染せざる。云何んが菩薩、無染着を得、心虚空の風のごとく、障礙あることなからん。云何んが菩薩、善く軌儀を知り、修行して暗を離れて光明を獲得し、他縁に隨はずして、自然智を得、速に大乘一切智々に到らん。そのとき、佛、大虚空藏菩薩摩訶薩に告げて言さく、善いかな、善いかな、正士。復た言さく、善いかな、善いかな、正士、汝今善能く如來に是の如き深義を問ひたてまつり、能く有情の爲めに、是の如き問を發さしむ。汝能く一切の佛法を明了し、已て曾て過去無量の諸佛を供養奉事し、諸佛の所に於て、諸の善根を種え、精進の甲を被、法を求めて厭ふことなく、智慧の器材を以て、諸魔の境を出で、常に一切の有情を利益することを楽しみ、世間の毀譽(二)八法を超越して、心行平等なること、猶は虚空の如く、久しく已に一切智智を積集せること、汝が功德邊際量る巨らざる如し。已に恒沙の過去佛の所に於て、曾て斯の義を問ふ。この故に、正士諦らかに聽け、諦らかに聽き、善く之を思念せよ、吾れ當に汝が爲めに分別解説すべし。菩薩摩訶薩の獲る所の功德、大乘一切智智に到る。虚空藏菩薩の言さく、唯だ然り。世尊願はくは聞かんと樂欲す。

佛、大虚空藏菩薩に告げて言はく、善男子、菩薩四法を成就して、布施波羅蜜多<sup>ハッラミツ</sup>を修行すること、猶ほ虚空のごとし。云何んが四となす。謂はゆる我れ清淨なるを以ての故に、有情清淨なり。有情清淨なるを以ての故に、施即ち清淨なり。施清淨なるを以ての故に、廻向清淨なり。廻向清淨なるを以ての故に、菩提清淨なり。善男子、是れを菩薩四法を成就して、布施波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空の如しとなす。復次に、若し菩薩、八法を成就して、能く淨く布施波羅蜜多を修行す。云何んが八となす。謂はゆる、我清淨に施し、我所清淨に施し、因清淨に施し、見清淨に施し、相清淨に施し、異相清淨に施し、不望果報清淨に施し、心平等なること虚空の如く清淨に施す。是れを菩薩、八法を成就して、能く淨く布施波羅蜜多を修行すとなす。善男子、譬へば虚空の邊際あることなきが如く、菩薩、限りなく施を行することも亦復かくの如し。譬へば虚空の寛廣無礙なるが如く、菩薩廻向の施を行することも亦復た是の如し。

譬へば虚空の色なきがごとく、菩薩色を離れて施を行することも亦た是の如し。譬へば虚空の受者あることなきが如く、菩薩受を離れて施を行することも亦復た是の如し。譬へば虚空の染着する所なきがごとく、菩薩染着を遠離して、施を行することも亦復た

是の如し。譬へば虚空の爲作する所なきがごとく、菩薩有爲を遠離して、施を行することも、亦復た是のごとし。譬へば虚空の識想あることなきが如く、菩薩識想を離れて施を行することも亦復た是の如し。譬へば虚空の諸佛刹に遍ねきがごとく、菩薩大慈を以て施を行じて遍ねく恒沙の諸佛國土の一切有情を緣することも亦復た是の如し。譬へば虚空の窮盡あることなきがごとく、菩薩三寶種を斷せずして廻向して施を行することも亦復た是の如し。譬へば虚空の暗眠あることなきがごとく、菩薩施を行じて、煩惱の暗を離るゝことも亦復た是の如し。譬へば虚空の相顯現することなきがごとく、菩薩施を行じて、心體清淨なることも亦復た是の如し。譬へば虚空の一切を包容するがごとく、菩薩施を行じて、普ねく有情を攝することも亦復た是の如し。又た變化人の變化者に施して、心に分別なく、その報を希はざるがごとく、菩薩施を行することも、亦復た是の如し。みな幻化のごとく、能所を遠離して、果報を希はず。善男子、菩薩施を行じて、勝れたる智慧を以て、諸の煩惱を捨て、方便智を以て、有情を捨てざること、是れを菩薩布施波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空の如しとなす。そのとき、燈手菩薩摩訶薩、會中に在り、即ち座より起ちて佛に白して言はく、世尊、

(一)無盡忍 諸法の  
の本源は生滅變化  
のなき永恒なるも  
に體験すること。  
(二)尼夜摩位(ニヤマ)  
す。決定して退轉  
せざる位をいふ。  
(三)不退印 不退  
決定の力に由り、  
忍辱の力を得て、  
善法を能く得て退  
散せざることをいふ。

菩薩摩訶薩は、何等の相を以て、是の如き布施波羅蜜多を修行するや。佛の言さく、善男子、菩薩摩訶薩は應に無相を以て、是の如き布施波羅蜜多を修行すべし。何を以ての故に、一切の法は身相なきを以て、身相清淨なるが故に。有情相あることなし。有情相清淨なるが故に、法相なし、法相清淨なるが故に。智相なし。智相清淨なるが故に。慧相なし、慧相清淨なるが故に。心相なし、心相清淨なるが故に。世間相なし、世間相清淨なるが故に。色相なし、色相清淨なるが故に。見相なし、見相清淨なるが故に。是の如く、乃至、暗なく、明なく、一切の相を離れて無相究竟邊際、(一)無盡忍を獲、如來決定の記前を得、菩薩(二)尼夜摩位に住し、(三)不退印を以て之を印し、佛灌頂を得、一切平等の佛法を成就し、善く一切有情の行相を知る。菩薩かくの如き行を以て、布施波羅蜜多を修行す。この法を説くとき、萬六千の菩薩、諸法の中に於て、諸法の性を見ることが、猶ほ虚空の、無生法忍を獲るが如し。そのとき、世尊、伽他を説て曰はく。

心常に清淨にして恒に施を行じ、菩提を求めんがために報を望まず、施し已て歡喜して追悔なし、是れを妙施して解脱を得となす。

智者は法みな如幻と知り、身命及び財を顧みず。

餘の資具に於てみな貪らず、佛菩提に志して心決定し。

悉くみな等しく施して憎愛なく、退没を生ぜずして恒に進修し、

諸法虚空の如しと觀するに由て、是の故に喜もなく、亦た厭もなし。

法の性相本清淨なりと知り、菩提と施と亦復た然り、

所施に於て貪を生ぜざるに由て、故に常に能く捨して戲論なし。

平等普施して思慮を離れ、上中下に於て分別なし、

意樂清淨にして常に無垢、あらゆる慧施希冀を離る。

身は如幻みな無常なりと知り、財も亦た堅からざること夢電のごとし、

即ち世間を悲惑することを生ずる故に、能く常に施して世に染せず。

無我にして施を行じて煩惱淨く、即ち能く佛教を建立す。

魔羅のために便を得られず。此の如くの施心校量し難し。

十力説く所のこの施心、應に清淨(一)尸羅の行に住すべし。

この善修に由て(二)靜慮を獲、智慧便ち能く速に圓滿せん。

(一)尸羅 清涼を  
譯す。戒のこと。  
(二)靜慮 禪定の  
こと。



(一) 戲論 無意義の言論のこと。

が故に。是れを菩薩の八法を成就すれば、能く淨く淨戒波羅蜜多を修行すとなす。善男子、譬へば虚空の清淨なるが如し、菩薩の戒を持して清淨なることも亦た爾なり。譬へば虚空の垢穢ケツあることなきが如し。菩薩の戒を持して垢なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の寂靜にして亂れざるが如し。菩薩の戒を持して寂靜なることも亦た爾なり。譬へば虚空の邊際あることなきが如し。菩薩の戒を持して無邊なることも亦た爾なり。譬へば虚空の繫屬あることなきが如し。菩薩の戒を持して繫なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の執着あることなきが如し。菩薩の戒を持して著を離るゝことも亦た爾なり。譬へば虚空の積集すべきことなきが如し。菩薩の戒を持して積なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の性を離れざるが如し。菩薩の戒を持して離れざることも亦た爾なり。譬へば虚空のその性常住なるが如し。菩薩の戒を持して、常住なることも亦た爾なり。譬へば虚空の無盡なるが如し。菩薩の戒を持して無盡なることも亦た爾なり。譬へば虚空の形相あることなきが如し。菩薩の戒を持して相を離るゝことも亦た爾なり。譬へば虚空の來往あることなきが如し。菩薩の戒を持して動なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の戲論ケイロンあることなきが如し。菩薩の戒を持して戲を離るゝこと

(一) 諸漏 諸多の煩惱のこと。  
(二) 爲作 生滅變化すること。

も亦た爾なり。譬へば虚空の(一)諸漏を遠離するが如し。菩薩の戒を持して漏なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の(二)爲作する所なきが如し。菩薩の戒を持して爲なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の變易あることなきが如し。菩薩の戒を持して變せざることも亦た爾なり。譬へば虚空の分別あることなきが如し。菩薩の戒を持して取なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の一切處に遍すが如し。菩薩の戒を持して周遍することも亦た爾なり。譬へば虚空の破壊あることなきが如し。菩薩の戒を持して犯なきことも亦た爾なり。譬へば虚空の高下あることなきが如し。菩薩の戒を持して平等なることも亦た爾なり。譬へば虚空の性の(三)染を離るが如し。菩薩の戒を持して染なきことも亦た爾なり。善男子、是れを菩薩、淨戒波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。そのとき、世尊、伽陀カダを説て曰はく、  
戒を護れば靜寂にして心に垢無し、能く熱惱を除て所得なし、  
身語意業に瑕疵なく、一切の律儀みな具足す。  
智者は戒を以て憍逸ならず、内心恒に寂にして亂なし、  
智者は常に菩薩心に依り、而も心意に於て染着せず。

(三) 染 煩惱のこと。

(一) 諸業 身口意に發動する諸作用のこと。  
(二) 名色 色(色)受(想)行(識)名の五蘊のこと。

(三) 止観 止は止観の心をいふ、観は智慧のこと。  
(四) 諸縛 諸多の煩悩。  
(五) 杜多 (Dutita) 頭陀の行をなす人のこと。  
(六) 蘭若 別處に説けり。

(七) 諸見 見はすべて物事を審慮する四見、是に二見見等あり、故に諸見といふ。

(八) 忍辱波羅蜜 六波羅蜜の一、善いゆる善いゆる苦行を忍辱して、涅槃に到る大行なり。

(九) 感結 煩惱の

(一) 諸業を遠離して思慮なし、是の如く諸の分別を生ぜず、既に青黄及び赤白を離れ、亦た名色の中に住せず。取なく、捨なく、染心なし、譬へば虚空の障礙なきが如し。此の戒は智者の稱讚する所なり、讚する所の諸句の義を見ず。是の戒は能く心をして寂靜ならしめ、亦た能く諸の煩惱を寂靜にす。悉く止観の邊際を得、了然として顯現して解脱を得、諸縛を解脱するの聖者、悉くみな尸羅に安住す、是の故に戒を勝解脱となす。亦た菩提根本の句となす。諸に杜多あり、蘭若に居す、小欲足ることを喜びて貪求を絶ち、憤鬧を遠離して禪に住し、心輕安を獲て煩惱を離る。是の如き戒これを根本となし、寂靜解脱句を思惟す。是の故に尸羅を莊嚴となし、一切處を安樂道となす。亦た散動を遠離せしめ、諸の煩惱及び諸見を斷じ、慈心遍布して虚空の如く、能く邊執を辭めて清淨ならしむ。

決定して菩提を捨てざるが故に、菩提に於て分別することなし、智者若し是の如き徳を具さば、皆な戒に由て彼岸に到らん。

善男子、若し菩薩、四法を成就して、忍辱波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとし。云何んが四となす。謂ゆる他の罵にも報いずして、語虚空の如しと知る。他の打にも報いずして、身虚空の如しと知る。他の瞋にも報いずして、心虚空の如しと知る。掉戲にも報いずして、意虚空の如しと知る。是れを菩薩四法を成就して、忍辱波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。復次に、菩薩、八法を成就して、能く淨く忍辱波羅蜜多を修行す。云何んが八となす。謂はゆる諸の有情心に於て障礙なきこと、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行して、清淨を得るが故に。諸の利養に於て、貪著を生ぜざること、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行して、清淨を得るが故に。諸の有情に於て、利益平等なること、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行し、清淨を得るが故に。身心壞なきこと、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行して、清淨を得るが故に。諸の感結を離ること、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行して、清淨を得るが故に。所觀の境を離ること、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行して、清淨を得るが故に。諸法

(一) 性空忍辱 三  
 界の苦果は皆因縁  
 より生じたるもの  
 にして、其の本性  
 は元來空無なるも  
 のなりと觀するこ  
 と。  
 (二) 無相忍辱 三  
 界因果の法は本來  
 空なりと觀するこ  
 と。  
 (三) 無有忍辱 三  
 界の苦因は皆空な  
 るものなりと觀す  
 ること。  
 (四) 無行忍辱 諸  
 法は變化作用なし  
 と觀すること。  
 (五) 無生忍辱 諸  
 法の本性は生滅變  
 遷なしと觀すること。  
 (六) 無起忍辱 眞  
 理は起滅なしと觀  
 すること。  
 (七) 無有情忍辱  
 一切諸法の本性は  
 有情非情等の差別  
 なしと觀すること。  
 (八) 如如忍辱 萬  
 有の眞源は絕對に  
 して、差別を超越  
 せることを觀する  
 こと。

の性、不生不滅なることを觀すること、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行して、清淨を得るが故に。色無色に於て、慈を以て遍ねく緣すること、猶ほ虚空のごとし。忍辱を修行して、清淨を得るが故に。是れを菩薩の八法を成就して、能く淨く、忍辱波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。善男子、復た八法あり、能く諦らかに觀察して、忍辱波羅蜜多を修行す。云何んが八となす。謂ゆる(一)性空忍辱、諸見を壞せざるが故に。(二)無相忍辱、相を遣せざるが故に。(三)無願忍辱、菩提を捨てざるが故に。(四)無行忍辱、有爲を盡さざるが故に。(五)無生忍辱、無爲に住せざるが故に。(六)無起忍辱、生滅に住せざるが故に。(七)無有情忍辱、體性を壞せざるが故に。(八)如如忍辱、三世を壞せざるが故に。是の如し、善男子、是れを八種となす。諦らかに法忍を察して、能く忍辱波羅蜜多を修行す。又た善男子、忍辱波羅蜜多を得るのとき、若し我れを毀罵することあらば、我れ當に忍受せん。我忍辱と名く。忍辱波羅蜜多に非ず。若し罵る者、及び罵る法を見れば、我れ當に忍受すべし。我忍辱と名く。忍辱波羅蜜多に非ず、無諍行に住す。是れ音聲忍辱なり。忍辱波羅蜜多に非ず。是の加行を作し、彼我俱に空して思惟忍受し、彼我無常を思惟忍受する。此れを施設忍辱と名く。忍辱波羅蜜多

(一) 婆羅林 佛の入滅せし處をいふ

(二) 盡智 一切の煩惱を斷破し盡して後起る智のこと。  
 (三) 無生 無生智のことに即ち一切の煩惱を斷盡して後起る智のこと。  
 (四) 自覺 他に斷ずべき餘の感なきことなり。

に非ず。善男子、都て能行所行のあることを見ざることを、譬へば(一)大婆羅林に、若し復た人あり、手に利斧を持ちて、彼の林の中に入りて、その枝葉を斫るに、彼の樹終に一念の心なくして、彼れは能斫となり、此れは所斫となりて憎愛を生ぜざるが如し。善男子、菩薩摩訶薩の忍辱波羅蜜多を行する時も、亦復た是の如し。憎愛あることなし。能分別なく、所分別なし。是れを菩薩の忍辱波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。そのとき、世尊、伽他を説て曰はく。

(一) 盡智 無生なれば清淨忍なり、境に於て染せずして意成就す。  
 内外寂靜にして所依なし、心淨ければ忍辱虚空に等し。  
 是の身は影の如く草木の如し、心形は幻の如く、眞實なし、  
 是の法性空にして所見なし、身心變異すること彼れに等し。  
 設ひ毀譽あることあるも喜怒なく、分別する所なく高下無し、  
 忍を知れば地の如く、門闢の如し、依て忍辱を教へて有情を度す。  
 一切の法性は空にして、人なく、我なく壽命なしと知ると雖も、  
 因縁及び造作に違せず、此の忍を最も眞實の行となす。

彼の悪言を聞くとも瞋恚せず、語言の性は虚空の如しと知る、身心の空なることを修習することも亦た然なり、當に有情を淨めて此の忍を修せしむべし。

(一) 精進波羅蜜  
六波羅蜜多の一善法を勇邁力行して涅槃の彼岸に到達すること。  
(二) 善根 身口意の活動の善良にして能く悟を開く根源となること。

善男子、云何んが菩薩の(一)精進波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空の若くなる。若し菩薩、四法を成就すれば、精進波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空の若し。云何んが四となす。謂はゆる、(二)善根を勤修す、一切の法未だ成就せざることを知るが故に。諸佛の所に於て大供養を作す、如來の身平等なることを了知するが故に。常に樂んで無量の有情を成就す、諸の有情は無所得なることを知るが故に。諸佛の所に於て、正法を受持す、諸法厭離する所を見ざるが故に。是れを菩薩四法を成就すれば、精進波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。復次に、善男子、若し菩薩八法を成就すれば、能く淨く精進波羅蜜多を修行す。云何んが八となす。身を莊嚴するに由て、精進を勤行す。身は影像の如くにして無所得なることを知るが故に。語を莊嚴するに由て、精進を勤行す。語は露性の如くにして無所得なることを知るが故に。心を莊嚴するに由て精進を勤行し、定を致すことを得。心は無所得なることを知るが故に。諸

(一) 一切菩提分法  
別處に説けり。

波羅蜜分を具するが爲めに、精進を勤行し、展轉し修習す。無所得なることを思惟するが故に。(一)一切の菩提分法を成就するに由て、精進を勤行す。菩提の性相は、無所得なることを思惟するが故に。佛土を淨めんが爲めに、精進を勤行す。諸佛の國は虚空に等うして無所得なることを知るが故に、一切の所聞、悉くみな能く持することを成就せんが爲めに、精進を勤行す。所聞の法は、猶ほ響應の如くにして、究竟して無所得なることを知るが故に。一切の佛法を成就せんが爲めの故に。精進を勤行す。諸の法界は平等一相なりと知りて、無所得なることを思惟するが故に、是れを菩薩の八法を成就して、能く淨く精進波羅蜜多を修行すとなす。善男子、菩薩、復た二種の精進あり、謂はゆる加行精進と、限齊精進なり。加行精進を以て、身口意に策て、一切の善法を成就することを修習して、所住あることなし。無所得なることを思惟するが故に。限齊精進を以て、應に不出不入に住すべし。法界に隨順して、去來する法なくして、則ち虚空の如し。無所得なるが故に。虚空の無色なるが如くにして、諸の有情に於て、所作を成就す。菩薩の精進も亦復た是の如し。諸佛の法に依て、一切有情の事を成就するが故に。虚空の一切の色を含容するが如し。菩薩の精進すれば一切の有情を含容



(二) 我見我れありと堅く執着する煩悩のこと。

して、一切の見を離るゝことも亦復た是の如し。虚空の一切の草木生長するに、無根無住なるが如し。菩薩精進すれば、一切の佛法を生長して、(三) 我見に住せざること亦復た是の如し。虚空の一切處に遍じて、動搖する所なきが如し、菩薩精進すれば、一切の善法に遍じて、所動の相なきことも亦復た是の如し。虚空の等しく種々の色を現するが如く、菩薩の精進等しく有情の爲めに、示現して平等を修習し、皆な無所得なりと思惟することも亦復た是の如し。善男子、是れを菩薩の精進波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。そのとき、世尊、伽他を説て曰く。

勇猛の所生の精進力、身及び命財を怖むことなし、能く威徳大菩提を行じ、諸の有情に於て恒に利益す。

往昔修する所の功徳利、厭倦を生せずして常に修習す、

諸の有情を解脱せんことを愛樂す。諸の如來に於て常に供養す。

願はくは無量の諸佛刹に遊んで、一切の諸の魔羅を摧伏せんことを。

常に樂て一切人に給施し、常に樂て淨戒を護持し、

常に樂て大慈、念に相應し、常に樂て諸の善根を勤集し、

無量禪定の心を思惟して、大智慧を以て常に觀察す、

無量の慈心瞋恚を捨て、功徳利益正に修行す、

身に於て、命に於て慳む所なし、善能く諸の煩惱を解脱す。

常に(一) 無我空解脱を修して、相を離れ無相にして大威徳あり。

永く諸見を離れて菩提を修し、幻陽焰の如く自性を觀す。

樂て空法を説て思慮なく、世の淨行に依て諸經を讀む、

法無法に於て二俱に亡す、音聲及び文字を捨てず、

世に於て常に諸の經典を説き、佛の功徳を讚じて亦た無邊なり。

有情の心行既に量り難し、智者は應に大精進を生ずべし。

無量の有情の性を悟りて、生及び不生に滯らず、

能く無邊の精進心を以て、常に諸淨法の生ずることを習度す。

善男子、云何んが菩薩、(二) 禪定波羅蜜多を修行すること、猶ほし虚空のごとくなる。

若し菩薩、四法を成就すれば、禪定波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとし。云

何んが四となす。謂はゆる心を内に安じて、内心所見なく、心を外に制して、外心所得

(一) 無我空解脱を修するに於て、(二) 禪定波羅蜜多を修行すること、猶ほし虚空のごとくなる。

(三) 我見我れありと堅く執着する煩悩のこと。

なし。自心の平等なるに由るが故に、一切の有情の心も亦た平等なることを知る。彼の心、平等なるに及んで、思惟して皆な幻化の如くなることを證知す。是れを菩薩の四法を成就すれば、禪定波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。復次に、善男子、若し菩薩、八法を成就すれば、能く淨く禪定波羅蜜多を修行す。云何んが八となす。謂はゆる(一)蘊に依らずして、禪定を修し、(二)處に依らずして、禪定を修し、(三)界に依らずして、禪定を修し、現世に依らずして、禪定を修し、他世に依らずして、禪定を修し、欲界に依らずして、禪定を修し、色界に依らずして、禪定を修し、無色界に依らずして、禪定を修す。是れを菩薩の八法を成就すれば、能く淨く禪定波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとしとなす。復次に、善男子、專注心を以て、禪定清淨なり。云何んが專注。法の名字に於て、除せず、加せず、變異なく、差別なく、損なく、益なく、取なく、捨なく、暗なく、明なく、分別なく、分別せざるに非ず。想なく、作意なく、一無く、二無く、亦た一二なきことなく、動なく、思なく、戲論なく、積聚なく、亦た積聚なきことなし。一切の相を思惟せず、心に所住なきを、名けて專注となす。專注の心、流散せざれば、色眼色に於て、識遠離するが故に、自相清

(一)蘊 五蘊のこと、別處に釋せり。  
(二)處 十二處のこと、同上。  
(三)界 十八界のこと、同上。

淨なり。觀行して專注の心流散せざれば、聲耳聲に於て、識遠離するが故に、自相清淨なり。專注の心流散せざれば、香鼻に於て、香識遠離するが故に、自相清淨なり。

專注の心流散せざれば、味舌に於て、味識遠離するが故に、自相清淨なり。專注の心流散せざれば、觸身に於て、觸識遠離するが故に、自相清淨なり。專注の心、流散せざれば、法意に於て、法識遠離するが故に、自相清淨なり。善男子、譬へば虚空の如く、(一)劫燒の時に於て、爲めに燒かれず、(二)水災の時に於て、爲めに濕されず。是の如く菩薩、禪定を修習して、一切諸の煩惱火の爲めに焚燒せられず、一切の解脱(三)等持(四)等至諸禪定水に漂溺せられず。常に間難して有情を散動せしむることなく、禪定に安住して、禪定に愛味を生せず。定を出で、も亦た然り、復た障礙なし。諸聖人に、常に寂靜を現じ、聖人の勤めて之を成就する所に非ず。常に定心をして平等に住せしむ。不平等の者には、法を説きて化導し、平等及び不平等を見ず。等不等に於ても亦た相違せず。心に礙あることなきこと、猶ほ虚空のごとし。是の故に、名て禪定を修する者となす。亦は勝慧修禪定者と名け、亦は不住識修禪定者と名く。此の定に由るが故に、彼の菩薩、是の如く(五)無住禪定を獲得すること猶ほ虚空の如し。そのとき、

(一)劫燒 壞劫の時  
(二)水災 壞劫の時  
(三)等持 等至  
(四)等至 梵語譯して禪定といふ。

(五)無住禪定 無住は、味のこと、諸法は何れも因縁相合して起れるものにして、本來物其れ自體なしと觀する禪定のこと。

世尊、伽他を説て曰く。

(二) 處界十二處  
と十八界なり。

善く善根を護り靜慮を修し、常に定して有情に着せず、  
 平等に等引して世間を度し、内に於て外に於て常に安住し、  
 蘊及び(三)處界に依らず、境界を遠離して寂靜に住す。  
 智者は其の心常に禪に在り、等不等に於て皆な平等なり。  
 法界に達して高下なく、心と意と皆な寂靜なりと見る、  
 世間をして成就せしめんがための故に、諸禪及び變易ベンニヤクを示現す。  
 彼れ變易及び禪定なく、自在の心趣も亦復た然り。  
 現境無色禪定の中、欲界を示現することも亦た是の如し。  
 皆な有情を成就せしめんがための故に、彼れ復た有情に着せず。  
 境界は空の如く、幻化・陽炎・水月・夢・及び雲の如し、  
 已に禪定及び世間を知らば、則ち世心を轉じて智慧を成す。  
 心を覆蔽すること能はざるが故に、則ち自在心を生ずることを得、  
 禪定及び神通を了達して、遊歴して俱胝刹に遍じ、

(一) 奢摩他 禪定  
 止等と譯す。散  
 亂の心を止息して  
 寂靜ならしむるこ  
 と。  
 (二) 般若波羅蜜多  
 六波羅蜜の一、譯  
 般若は智慧と譯  
 す。菩薩は智慧を  
 以て煩惱を斷除し  
 且つ諸法に通達し  
 て彼岸に到る。  
 (三) 常見 一切諸  
 法は常住不滅なり  
 と執する見のこ  
 と。  
 (四) 斷見 一切諸  
 法は斷絶なりと執  
 する見のこと。  
 (五) 無生法忍 別  
 處に説けり。  
 (六) 四無礙解 四  
 無礙智とか又は四  
 無礙辯とかいふ。菩  
 薩の諸法を了解し  
 之を説くこと無し  
 礙自在なること。  
 (七) 樂說無礙 義  
 無礙、三辭無礙、  
 四樂說無礙。

普ねく能く諸佛を供養し、無知惑障悉く斷除し、  
 諸根調伏して意寂然たり。(一)奢摩他を度して分別無し、  
 世間及び意俱に清淨、常恒に智力寂亦た然り。  
 無所得を以て平等に住す、故に平等と名け遍無相なり、  
 若し平等に於て所住なし、是の故に、名て定を得る者となす。  
 善男子、云何んが、菩薩(三)般若波羅蜜多を修行すること猶ほ虚空の若くなる。若し  
 菩薩、四法を成就して、般若波羅蜜多を修行すること、猶ほ虚空のごとし。云何んが  
 四となす。謂ゆる虚空清淨に由るが故に、一切有情清淨に入る。智清淨に由るが故に、  
 一切識清淨に入る。法界清淨に由るが故に、我人有情壽者清淨に入る。義清淨に由る  
 が故に、一切文字清淨に入る。是れを菩薩、四法を成就して、般若波羅蜜多を修行す  
 ること、猶ほ虚空のごとしとなす。  
 復次に、善男子、若し菩薩、八法を成就して、能く淨く般若波羅蜜多を修行す。云何  
 んが八となす。謂ゆる勤めて一切の善法を集めて、(三)常見に着せず。勤めて一切不善法  
 を斷じて、(四)斷見に着せず。緣起の法を知て、(五)無生法忍に違せず。(六)四無礙解を現じ

(一) 四駝駝南 駝南は梵語、無問自説と譯す。四法印の頌を四駝駝南といふ。

て、四辯に着せず。善く能く(一)四駝駝南を決擇して、無常苦無我寂靜を見ず。善説して、業果も亦た動せず。無業界に於て、無戲論智に住し、常に一切法句差別の相を顯説し、善く一切淨法光明を得、諸の有情に於て、清淨及び雜染の法を説く。是れを菩薩、八法を成就して、能く淨く般若波羅蜜多を修行すとなす。善男子、當に知るべし。般若は、是れ清淨の句、能く惡覺を摧くが故に。是れ無變異の句、自相清淨なるが故に。是れ無分別の句、限齊すべきことなきが故に。是れ如實の句、性眞實なるが故に。是れ諦句、動搖なきが故に。是れ識實の句、虛誑なきが故に。是れ聰慧の句、諸縛を解くが故に。是れ滿足の句、聖者の功德なるが故に。是れ通達の句、善く能く觀察するが故に。是れ第一義の句、言説する所なきが故に。是れ平等の句、差別なきが故に。是れ堅牢の句、壞すべからざるが故に。是れ不動の句、所依なきが故に。是れ金剛の句、能く穿鑿するが故に。是れ濟度の句、所作已辨の故に。是れ清淨の句、性染なきが故に。是れ無暗の句、明にして所得なきが故に。是れ無二の句、建立あることなきが故に。是れ盡句、究竟盡滅するが故に。是れ無盡の句、無爲常住なるが故に。是れ無爲の句、生滅の所攝に非るが故に。是れ空の句、最も清淨なるが故に。是れ虚空の

(二) 達摩 法と譯す、佛法のこと。

句、障礙なきが故に。是れ虚空道の句、行迹なきが故に。是れ無所得の句、自性無きが故に。是れ智の句、智識二なきが故に。是れ無摧の句、對治を離るが故に。是れ無身の句、轉易なきが故に。是れ苦遍知の句、遍計の苦を離る、が故に。是れ集斷の句、貪欲を害するが故に。是れ證滅の句、究竟無生なるが故に。是れ修道の句、無二道に入るが故に。是れ佛陀の句、能く正覺を生ずるが故に。是れ(三)達摩の句、究竟欲を離るが故に。善男子、是の如く等の類の句義差別、智慧光明は他に屬せず、所説の法に於て、隨て少分に入り、都て分別及び分別せらるゝなし。是れを般若波羅蜜多を修行して、猶ほ虚空のごとしと名く。そのとき、世尊、伽他を説て曰く。

(三) 煩惱の習 煩惱の殘餘のこと。

(三) 瀑流 善事を瀑流すること。即ち煩惱なり。  
(四) 纏蓋 身心を纏蓋するもの。即ち煩惱のこと。

明慧能く(三)煩惱の習を斷じ、作業及び因縁を示現して、  
我見及び有情に依らず、壽者並に人相に住せず。  
我、無我に於て二俱に離れ、般若を顯説して、眞源に到る。  
般若能く所有を摧き、般若能く(三)瀑流を度し、  
般若能く清淨の因となり、般若能く勝解脱に安んじ、  
淨慧能く諸の(四)纏蓋を離れ、蘊處界に於て悉く遍知す、

(二)五眼 別處に  
(三)五趣 餓鬼一  
獄二 餓鬼一  
畜生四 人  
天のこと。五三地

明慧照曜して三界空なり、能所の相に於て皆な解脱す。  
般若を修行して清淨ならしめ、一切世間所着なし。

通達して能く般若の行を行じ、常に淨慧を修して真空を照らし、

(二)五眼清淨にして五眼明らかなり。能く(三)五趣を除て五蘊を淨む。

彼岸に至りて常に安住し、法界に入ることも亦復た然り、

平等なること猶は大虚空のごとく、高廣にして善く佛智に順ず。

得無得に於て二俱に離れ、能く中道甘露門を示す。

聖人の所行に隨順して、善く能く無分別を分別し、

能く苦集の貪愛を斷するを知り、修道滅を示して無爲を顯はし、

實智慧光明を成就す、故に三世來去なしと了す。

諸の刹土に於て皆な平等なり、諸法寂靜等も亦た然り、

諸の有情我人なしと了さば、是れ則ち眞修智慧の者なり。

善男子、云何んが、菩薩福德を修行すること、猶は虚空のごとし。善男子、一切の法

性は、猶は虚空のごとし、菩提心を以て、種子となす。所修の福聚みな菩提心を捨離

せず。善根を積聚してみな薩婆若海に廻向す。是に由て、無量の福德を獲得すること、  
みな虚空の如し。善男子、菩薩應に是の如くの心を發すべし。虚空無量なるが故に。

福聚を感招することも、亦復た無量なり。何を以ての故に、意無量に由るが故に。福

も亦た無量なり。菩薩彼れに於て、應に是の觀を作すべし。善男子、復た十種の無量

莊嚴あり。菩薩應に是の如くの福聚を滿すべし。云何んが十となす。謂ゆる、無量身

莊嚴、相好圓滿するが故に。無量語莊嚴、隨て法輪を説き、皆な清淨なるが故に。無

量心莊嚴、一切有情心を通達するが故に。無量行身莊嚴、無量の諸の有情を成熟する

が故に。無量行相莊嚴、無量の佛刹を淨むるが故に。無量の福德禪定精進莊嚴、無量

の佛の威儀を成滿するが故に。無量の六善提場莊嚴、應に一切の相及び行を滿すべき

が故に、無量の無遮施會莊嚴、無量佛の(三)毫相マウツウを成滿するが故に。無量の恭敬無我莊

嚴、如來(三)無見頂相を成滿するが故に。無量の無間定心莊嚴、無量の無諂曲心を成滿し

て、淨意に順すが故に。善男子、是れを十種無量莊嚴と爲す。菩薩、若し能く、是の

如く、廣大心を發すること、猶は虚空の如し。獲る所の福德虚空のごとくなるが故に。

善男子、云何んが、菩薩、智慧を修行すること、猶は虚空のごとし。若し菩薩、遍ね

(二)毫相 佛の三  
十二相の中の一、  
白毫相のこと。  
(三)無見頂相 佛  
の三十二相の中  
の一。

(二)補特伽羅  
語、我見と譯す

く一切有情の有欲心、無欲心を縁じて、如實に知り、有瞋の心、無瞋の心、如實に知り、有癡の心、無癡の無、如實に知り、雜染ある心、雜染なき心、如實に知り、自ら既に欲を離れて、復た能く他の(二)補特伽羅のために、欲法を調伏することを説きて自ら既に瞋を離れ、復た能く他の補特伽羅の爲めに、瞋法を調伏することを説き、自ら既に癡を離れて、復た能く他の補特伽羅の爲めに、癡法を調伏することを説き、自ら雜染を離れて、復た能く他のために、一切の諸の煩惱を調伏する法を説く。貪・瞋・癡の煩惱を有する者を見て、下劣の心を爲し、貪・瞋・癡の煩惱を離るゝ者には、勝上の心を爲さず。何を以ての故に、以ふに彼の菩薩は、不二法界清淨法門に於て、證知するを以ての故に。是の如くの法界は、即ち貪・瞋・癡の煩惱を離るゝ者には、勝上の心を爲さず。是の故に、法界と一切の法と、互に相ひ渉入す。法界即ち法なり。法即ち法界にして遍せざる所なし。若し我界を知らば、即ち法界を知る。法界と我界と二あることなきが故に。所以は何んとならば、我清淨なるが故に、法界清淨なり。是の如く、一切法清淨なるが故に、光顯容受して、亦た容受の一切相無相を離るゝことなきが故に。安立するところなきこと、猶ほ虚空の如きを、無礙智と名く。無礙智に由て、一切の

(一)戒・(二)定・(三)慧  
(四)解脱・(五)解脫  
知見之を五分法  
身と稱す。斯ち斯  
る五種の功徳を以  
て佛身を形成する  
故に名く。

法障礙する所なしと了す。是れを菩薩、智慧を修行して、猶ほ虚空の如しとなす。善男子、云何んが菩薩、佛の印可したまふ所の佛隨念、謂はゆる無漏の戒を念するは、是れ(一)戒、佛の隨念。一切法平等にして散せざるは、是れ(二)定、佛の隨念。一切法の分別する所なきは、是れ(三)慧、佛の隨念。二心に住せず是れ(四)解脱、佛の隨念。一切智に着せず、是れ(五)解脫知見、佛の隨念。三世平等にして動せざるは、是れ力、佛の隨念。一切漏に住せざるは、是れ無所畏、佛の隨念。是の如く、當に佛身の有する所の一切功徳は、皆これ佛の隨念。法界平等にして分別する所なしと念すべし。復次に、佛の隨念、佛の有する所の色自性清淨を念せば、色自性清淨を見るに由ての故に、無念智隨て至り、乃至、受想行識、識自性清淨を見るが故に、無念智隨て至る。是の如く、十二處、十八界も亦復た是の如し。一切法自性智に由るが故に、最殊勝慧、一切作意、一切の見纏を遠離す。遠離することは是の如し。色の垢濁なきを知り、念の垢濁なし。是れ謂はゆる佛の印可したまふ佛隨念なり。復次に佛の隨念、謂はく、佛の行住坐臥一切威儀を念じて執着を生せず。佛の説法に於て、佛の寂哩に於て、執着を生せず。亦た念と非念とに執着せず。所以は何んとなれば、佛は念なく、作意なく、色に非ず、相に非ず、法に非

ず、非法に非ず、一切相縁慮して現行せざるに由ての故に。善男子、是れを佛の印可したまふ所の佛隨念と名く。

(二)阿頼耶 梵語  
なり無没と譯す、  
心識なり。

善男子、云何んが菩薩佛の印可したまふ所の法隨念、法を離欲と名く。法に於て染なきが故に。亦た法隨念なき法を、(二)阿頼耶アライヤなしと名く。法に於て隱没なきが故に。亦た法隨念なき法を、寂靜と名く。心意識の染着なきを以ての故に。亦た法隨念なき法を、無相と名く。法に於て、隨相識なきが故に。亦た法隨念なき法を、無爲と名く。法に於て施設住なきが故に。亦た法隨念なし。復次に、法隨念、若し念間斷なく、法想を起さざれば、即ち正位に入り、無生忍を證し、一切法本來不生なりと觀じ、法の證すべきなし。即ち是れ一切學・無學・緣覺・菩薩・正等菩提、所證の處。是の如く一切聖所證の解脫法なり。亦た自性なし。是れを菩薩、佛の印可したまふ所の法隨念となす。善男子、云何んが、菩薩、佛の印可したまふ所の僧伽隨念、僧を無爲と名く。彼れ造作を以て作すべからず。身語意業を現行することなし。但だし是れ施設して所行あり。是れ無爲僧は施設を離れて、住して諸の言論を超ゆ。善男子、是れを佛の印可したまふ所の僧伽隨念となす。善男子、云何んが菩薩、佛の印可したまふ所の捨隨念。謂はゆ

る、一切所依の資具を捨て、及び法を捨て、亦た所捨なし。此れを最勝にして一切法を捨すと名く。取なく、捨なく、亦た所求なく、緣慮あることなく、緣慮なきにあらす。彼れ心行もなく、なた施設もなく、亦た識に住せず、心を生せず、無住の心を以ての故に。名けて佛の印可したまふ所の捨隨念となす。復次に、菩薩、捨隨念とは、修行する所の廻向平等薩婆若サハニヤサ智を以て、菩提を見ず。隨念する所となす。何を以ての故に、薩婆若は彼の隨念と性無二なるを以ての故に。善男子、是の如く法智相應する、是れを菩薩印可したまふ所の捨隨念と名く。善男子、云何んが菩薩、佛の印可したまふ所の戒隨念。戒を無爲と名く。無漏無礙永く功用を息め、一切の禁戒を成就し、無識、無相、亦た心作三摩地に住せず、最勝の所依、亦た是れ淨慧根本を發生し、戲論、及び解脫の相を離れ、亦た二種分別の相なし、智者の讚する所、現色あることなく、能く煩惱を息めて亦た施設なし、安樂隨行にして、亦た對治一切の分別なし。菩薩、常に是の如き類戒に於て、垢濁あることなし。是れを菩薩、佛の印可したまふ所の戒隨念と名く。

善男子、云何んが、菩薩、佛の印可したまふ所の天隨念、應に二種の天を隨念すべし。

(二) 五淨居天、聖者あるが故に。一には、(三) 都史多天、(四) 一生補處の菩薩、彼の天に在るを以ての故に。復次に、此の一生補處の菩薩、彼の天宮に住して、十種の頂法あり。何をか十となす。謂はゆる一切波羅蜜の中に、般若波羅蜜多をその頂となす。一切神通の中に、不退神通をその頂となす。一切地の中には、唯だ(五) 灌頂地をその頂となす。一切菩提分法の中に、不退正見勝三摩地を其の頂となす。一切無礙解の中に、義辯無礙をその頂となす。一切智の中に、無着無礙智をその頂となす。一切根の中に、上中下根を知る無礙智をその頂となす。一切力無畏の中には、照耀隨入智をその頂となす。一切眼の中に、佛眼は一切の佛法を觀察し了すること、掌内の如くなるを以て、その頂となす。菩提場中に坐して、當に正覺を成すべし。一刹那に心相應する正慧をその頂となす。是れを十種頂法の相となす。應に隨つて之を念すべし。若し菩薩、是の念を得已んば、見て則ち(六) 隨眠纏に亂せず、作意戲論に亂せず、是の如き類に亂せず。念垢濁なし。應に是の如く彼の天を隨念すべし。善男子、是れを菩薩、佛の印可したまふ所の天隨念と名く。

(五) 灌頂地 佛の菩薩に對して灌頂する位のこと  
(六) 隨眠纏 煩惱のこと

一には(二) 五淨居天、聖者あるが故に。一には、(三) 都史多天、(四) 一生補處の菩薩、彼の天に在るを以ての故に。復次に、此の一生補處の菩薩、彼の天宮に住して、十種の頂法あり。何をか十となす。謂はゆる一切波羅蜜の中に、般若波羅蜜多をその頂となす。一切神通の中に、不退神通をその頂となす。一切地の中には、唯だ(五) 灌頂地をその頂となす。一切菩提分法の中に、不退正見勝三摩地を其の頂となす。一切無礙解の中に、義辯無礙をその頂となす。一切智の中に、無着無礙智をその頂となす。一切根の中に、上中下根を知る無礙智をその頂となす。一切力無畏の中には、照耀隨入智をその頂となす。一切眼の中に、佛眼は一切の佛法を觀察し了すること、掌内の如くなるを以て、その頂となす。菩提場中に坐して、當に正覺を成すべし。一刹那に心相應する正慧をその頂となす。是れを十種頂法の相となす。應に隨つて之を念すべし。若し菩薩、是の念を得已んば、見て則ち(六) 隨眠纏に亂せず、作意戲論に亂せず、是の如き類に亂せず。念垢濁なし。應に是の如く彼の天を隨念すべし。善男子、是れを菩薩、佛の印可したまふ所の天隨念と名く。

善男子、云何んが菩薩、行ずる所の諸、涅槃に等し。涅槃を寂靜と名く。悉く一切

(一) 正士 菩薩のこと  
(二) 加持 佛の大悲衆生に蒙るが如きといひ、衆生能く之を受け入るを持といふ  
(三) 如幻妙三摩地 一切諸法の性なる理を觀すること

の煩惱を除き、一切の受を滅し、一切の所縁を離れて蘊・處・界を出づれば、即ち彼の(一) 正士、涅槃平等を獲得し、本願力を以て、大悲に遊戲して、方便智慧を以て如來の(二) 加持を得るが故に。善く智慧意樂を修し、清淨にして(三) 如幻妙三摩地に住し、悉く有情の煩惱生死みな幻化の如しと知り、受生を示現して、此れに由て、能く諸の生死の縛を斷じて染汚する所なきを、名けて涅槃といふ。既に自在を得て、不生にして生、生せずと云ふことなく、亦た所生なく、常に涅槃に在りて、生死を斷せず、有情を成熟して休息あることなし。善男子、此れを菩薩、大悲方便雙智慧門と名く。若し菩薩此の門に住せば、涅槃平等を獲得して、菩薩の行を行す。善男子、云何んが菩薩、善く一切有情の行相を知る。善男子、菩薩、八萬四千の行あり。是れ、根本歸馱南の句有情の行相に於て、無量の差別、不可思議、不可言說なり。唯だ佛能く知りたまふ。諸の聲聞、緣覺の了する所に非ず。亦た菩薩の能く了する所に非ず。彼の菩薩、佛の加持及び自の智力を蒙り、隨て一切有情の行相を知る。謂はゆる、是の如くの自性相。是の如くの行相。是の如くの因相。是の如くの緣相。是の如くの作相。是の如くの和合相。或は種種の相・離相・欲相・瞋相・癡相・等分相・地獄相・傍生相・琰魔界相・天相・人相。



或は聲聞尼夜摩相・或は緣覺尼夜摩相・或は佛尼夜摩相・或は遠因相・中因相・近因相・是の如く有情一切の行相、如實に之を知りて、一切智の摧伏せられざるを除く。善男子、是れを菩薩、善く一切有情の行相を知るとす。

國譯大集大虛空藏菩薩所問經卷第二終

國譯大集大虛空藏菩薩所問經卷第二

開府儀同三司特進試鴻臚卿肅國公食邑三千戶賜贈司空諡大鑑正號大廣智大興善寺三藏沙門不空 詔を奉じて譯す。

(一) 行相 有情の身心の行動をいふ。

(二) 勝義諦 煩惱を離れた眞實の智慧のこと。

善男子、云何んが、菩薩、能く世尊、佛法の寶藏を持さん。善男子、諸佛の法藏は窮盡あることなし。一切有情の根性、(一) 行相、差別無量なるを以て、諸佛世尊、趣入せしめんがために、その差別する所の根性に隨て、法寶藏を説きたまふ。亦た爾所に無量無邊あり。是の故に、名けて佛法寶藏となす。復次に、如來菩提を證したまふ夜より、槃涅槃の夜まで、その中間に於て、已に説き、今ま説き、當に説きたまふ。あらゆる一切悉く如説、不異説、眞説と名く。云何んが名けて如説となす。彼の眞如の如く、平等に説きたまふ故に如説と名く。云何んが不異説、所説の法、(二) 勝義諦に依て平等無二なれば、不異説と名く。云何んが眞説。法の自性に稱ふを名て、眞説となす。復た次に、諸佛の法藏は、文字を以て説くべからず。假使ひ、三千大千世界に滿する、一切の有情、みな阿難陀の如く、多聞第一にして、百千俱胝劫の中に於て、一義を説くとも、究盡

すべからず。是の如く、諸佛無邊の法藏、菩薩悉く能く法の如く受持して、一切の文字みな廢忘せず。一切の義に於て、差異あることなし。諸の有情をして、みな歡喜を得せしめ、一切如來に供養奉事し、一切の魔怨を摧壞し、一切の外道を制伏し、煩惱を息滅して、正法を顯揚す。是の如く、善男子、是れを、佛世尊、佛法寶藏を持すと名く。復た次に、善男子、我が如きは彼の法の自性を等覺す。菩薩も是の如し。彼の法性の如く、應當に受持すべし。云何んが名けて、如來彼の法の自性を等覺すとす。謂はく法の自性、悉く皆な幻の如しと知る。不成就の相なるが故に。悉く皆な夢の如し。境界の相なきが故に、悉く陽炎の如し。畢竟相を生ずることなきが故に。悉く光影の如し、移動の相なきが故に、亦た影像の如し、自性相なきが故に、空の自性を知りて、究竟露の如くなるが故に、無相の自性を知りて、分別なきが故に。無願の自性を知りて、心住なきが故に。離欲の自性を知りて、一切の欲遠離するが故に。無爲の自性を知りて諸數の相を超ゆるが故に。善男子、是の如くの言説は、他のために了別するが故に。我れ已に現に、是の法の自性、彼の法の性相（シヨウワツ）を證して言説すべからず。若し菩薩、諸佛の法藏を受持せんと欲は、應に如來の諸法の自性を覺了するが如く、文字語言を以て、諸の

有情のために、是の如く説法すべし。是れを菩薩能く諸佛の正法寶藏を持すとす。善男子、云何んが、菩薩、善く有情本來清淨なることを知りて、之を成熟せん。善男子、有情界は本來清淨なり。彼の根本性に於て有情は不可得なり。若し菩薩、彼の有情を成熟せんと欲せば、應に是の如く根本清淨なることを知るべし。復た彼の無我見・無有情見・無命者見・無受者見を念すべし。復次に所説の有情名は、但だ顛倒の見に従て無明に纏はれて愛あり、虛妄分別、諸の煩惱より生じて實性あることなし。彼の菩薩應に虛妄顛倒一切の煩惱を斷除すべし。而して有情のために此の如き法を説きて、その性を壊せず有情無なりと了知せしめんための故に有情離るゝが故に。應に是の如く有情を成熟すべし。善男子、是れを菩薩、善く有情本來清淨なることを知りて、之を成熟すと名く。善男子、云何んが、菩薩、理の如く相應して佛法を修習せん。理の如くとは、縁生に入ると名く。何を以ての故に、彼彼の因縁の如く、彼彼の果報を感ず。謂はく、布施の因の如きは、大財富を獲。是の故に、菩薩布施を行じ已て盡く將に一切智智に廻向するを以て、檀波羅蜜多を満足成就す。尸羅は、是れ人天に生ずるの因なり。菩薩普ねく、汚戒の有情をして、淨戒に安住せしむ。戒を要して、薩婆若に廻向し已て、戒

波羅蜜を満足成就す。忍辱柔和なるは、身口意を莊嚴するの因となる。菩薩、常に自利利他を行じて惱害をなさずして忍辱に住し、薩婆若に廻向し已て、忍波羅蜜を満足成就す。精進は能く一切佛法を引攝するの因となる。菩薩、應に精進の心を發勤すべし。一切のあらゆる善根を積集して、盡く將に薩婆若に廻向し已て、精進波羅蜜を満足成就す。禪定は正知の因となる。菩薩、正知を求めんと欲せんが爲の故に、奢摩他資糧を修習し、盡く以て薩婆若に廻向し已て、禪波羅蜜を満足成就す。般若多聞は大慧の因となる。菩薩、聞相を取らず執せずして、薩婆若に廻向し已て、般若波羅蜜を満足成就す。是の如く能く一切善法に於て、是の如くの因は、是の如くの果を感ずと知る。是れを因縁如理の作意と名づく。復次に、如理作意とは、謂はく我及び一切法の如く、理の如く作意す。是の如く我は無我なりと知らば、一切の法悉く皆な無我なり。我は是れ空なりと知らば、一切の法悉く皆な是れ空なり。我は但だ名のみあらば、一切の法も亦唯だ名のみあり。菩薩も是の如く、如理作意すれば、一切の法に於て平等に相應す。即ち是れ一切の佛法を具足す。是れを菩薩、理の如く相應して佛法を修習すとなす。

二 身見 五見の  
一、吾體常住なり  
と執する邪見のこ

善男子、云何んが、菩薩、神通を退せずして一切の法に於て自在を得ん。善男子、若しは沙門或は婆羅門ありて、二 身見を害せず、神通を起さば、彼れ還て退失せん。若し時に菩薩已に身見を害し、及び能く六十二等の一切の諸見を遠離して、神通を起すを、名けて智を具し、慧を具し、覺を具し、施を具し、戒を具し、定を具すとなす。亦た即ち名けて、身心遠離して、智を具足し已て、内常に寂靜にして、外所行なしとなす。遍ねく知る所の心、所欲すべきの心、善決擇の心、清淨の慧を善くし、煩惱の濁なくして光明を得、翳なき智は、福の資糧を積集し、智の資糧を積集し、奢摩他の資糧を積集し、毗鉢舍那の資糧を積集し、資くるに檀那淨戒莊嚴を以てし、被るに忍辱精進の甲冑を以てし、禪定に依りて善く般若を修し、大慈に隨順して、大悲に安住し、方便を超出して是の如くの法を成じて、妙神通を起し、高昇すること無礙にして、乃至菩提道場に坐し、神通を以ての故に、一切の法に於て皆な自在を得、一切の色を現んじ、一切の聲を聞き、一切の心に入り、無量劫を憶念して、一切の遊戯神通を獲得し、諸漏を伏斷して、乃至意に隨て轉變して皆な自在を得、一切の法に於て復た功用なし。善男子、是れを菩薩神通を退せず、一切の法に於て自在を得となす。

(一) 緣生理趣の原理  
の事。

(二) 緣滅理趣の相  
二因緣の次第に相  
ひ滅するの理由の  
こと。

善男子、云何んが、菩薩甚深の佛法の理趣に入る。一切の聲聞緣覺測り難し。善男子、甚深とは名けて(一)緣生理趣となす。謂はゆる無明、行を緣じ、行、識を緣じ、識、名色を緣じ、名色、六處を緣じ、六處、觸を緣じ、觸、受を緣じ、受、愛を緣じ、愛、取を緣じ、取、有を緣じ、有、生を緣じ、生、老死・憂・悲・苦惱を緣ず。集りて因となり、緣となるに由て、大苦蘊を生じ、諸の有情をして流轉雜染せしむ。菩薩、彼れに於て、善能く此れを了知するときは、則ち名けて緣生理趣となす。云何んが名けて、(二)緣滅理趣となす。謂はく無明滅すれば、則ち行滅し、行滅すれば、則ち識滅し、識滅すれば、則ち名色滅し、名色滅すれば、則ち六處滅し、六處滅すれば、則ち觸滅し、觸滅すれば、則ち受滅し、受滅すれば、愛滅し、愛滅すれば、則ち取滅し、取滅すれば、則ち有滅し、有滅すれば、則ち生滅し、生滅すれば、則ち老死・憂・悲・苦惱滅す。是の因緣滅するに由て、則ち大苦蘊滅す。故に有情をして、清淨なることを獲得せしむ。是の如きを名けて、緣滅理趣となす。若し菩薩、彼れに於て、是の如く了知する。是れを名けて入甚深理趣となす。諸の聲聞、緣覺の能く雜染に於て、清淨を得る者に非ず。此れは是れ諸佛如來の境界なり。若し菩薩、佛の威神加持の力を以てせば、則ち能く此に於

(一) 薩迦耶 梵語  
有身見と譯す。假  
人の身體の五蘊假  
和合なるを知らず  
して執は常住なり  
と執着する考への  
こと。

(二) 緣起善巧智  
十二因緣を緣起善  
巧と稱し其の理  
を觀する智慧を斯  
くいふ。  
(三) 邊見 斷見又  
は常見の一邊に執  
着する惡き考への  
こと。

て分に隨て覺悟す。復次に、甚深とは、(一)薩迦耶と名く。薩迦耶清淨なるが故に、一切の法清淨なり。何を以ての故に、此の薩迦耶根本を推求するに所得なきが故に。その所得なきを即ち甚深となす。諸佛我れに於て皆な所得なし。我れ本清淨なれば、我が清淨なるが如く、一切の法も亦た清淨なり。何の因緣を以て清淨と名く。謂はく、彼の諸法は本來不生にして起滅する所なきが故に、清淨と名く。復次に、暗なく、明なく、阿賴耶なき眞實の勝義を名けて、甚深となす。彼の眼滅なく、乃至亦た意滅なく、境界あることなし。是の境界なきは、則ち是れ眞實、第一義諦にして、名けて甚深となす。亦た心意の執着なく勝義は以て測り難く、見難く、覺すべからざるが故に、此の諸類に於て甚深の法理は、但だし假名を以て世諦に隨順して他の有情に於て分別顯示す。是れを菩薩甚深の佛法理趣に入ることを得、一切の聲聞緣覺測り難しとなす。善男子、云何んが菩薩、(三)緣起善巧智に入りて、一切の(四)邊見を遠離すや。善男子、緣起とは、所緣なき、是れ緣起なり。事なく、成就なき、是れ緣起なり。無常・苦・無我・寂靜是れ緣起なり。我なく・有情なく・命者なく・養育なく・補特伽羅なく・人なく・儒童なき、是れ緣起なり。生なく、起なき、是れ緣起なり。所有なく・用なく・空無相寂

靜にして、所行なく戲論なし。是の故に、無戲論の法と名く。是の如く生ずるを是れ生となす。是の如く滅するを是れ滅となす。復次に、我なく・有情なく・壽命なく・養育なく・補特伽羅なく・人なく・儒童なきときは、則ち法の縁生たるべきことあることなし。彼れに於て、我の主宰の名なきが故に。譬へば草木・牆壁・影像一切の諸法の如きも、亦復た是の如し。外の諸法の所の如く、生の時生じて所有なく、滅の時滅して所有なし。内法も亦た爾り。生の時生じて所有なく、滅の時滅して所有なし。縁起の法を除けば、實の所生なし。縁を闕かば、滅することなし。是の如く、相應するときは則ち一切の邊見悉く皆離するなり。云何んが邊見。邊見とは、(一)斷と名け、(二)常と名づく。生の時も生せず、壞の時も壞せず、生なく、壞なく、斷常に於て、邊自然に清淨なり。自清淨なるが故に、諸の邊見に於て、皆な清淨なることを得。善男子、是れを菩薩、縁起善巧智に入りて、邊見を遠離すとす。善男子、云何んが菩薩、如來の印を以て、眞如を印し、(三)善巧智を間斷せざる。善男子、如來(四)印、印とは、不間斷の印なり。生なく、轉なく、所取なく、動なく、所動なく、一切世間、人天、阿修羅、傾動する所なし。何を以ての故に、世間、人天、阿修羅、彼の印を以て印す。是の如

(一)斷 斷見のこ  
とにして、即ち吾  
人の身體は一期を  
經過せば斷滅する  
ものと考ふる誤り  
たる考へ。  
(二)常 常見のこ  
とにして、即ち身  
體は常住なるもの  
と考ふる誤りたる考  
へ。  
(三)善巧智 佛の  
衆生を救濟するた  
めに起す種々の方  
便の智識のこと。  
(四)印 決定の義  
なり。

く如來印とは、究竟不生の印・究竟空性の印・究竟無相の印・究竟無願の印・究竟無爲の印・究竟離欲の印・究竟眞如の印・究竟實際の印・究竟虚空の印なり。善男子、譬へば、空中に印して所現なきが如く、是の如く如來印は、五眼に於て、光明の相を現せず。自相印を以て之を印す。故に乃至、如來は一切の法に於て、言説を施設し、みな如來印を以て之を印す。是れを施設となす。彼のあらゆる識及び境界の法は、皆是れ作法安立して、彼の法に於て種種安立の相を作さず。眞如の印を以て、之を印して、間斷あることなし。云何んが眞如に於て間斷す。若し諸法を分別して、上中下を見るを名けて、間斷となす。若し諸法に於て、分別する所なきを、無間斷と名く。復次に、多分別に於て、分別を生じ、彼の眞如に於て能く壞亂なし、譬へば有情空中に行くに、而も彼の虚空破壞あることなきが如し。是の如く一切の有情は、眞如の中に於て、行きて而も、彼の眞如斷壞あることなし。菩薩是の如く、智を以てするに由るが故に、色に於て、法に於て、眞如の印を以て之を印し、眞如に於て間斷破壞せず。是れを菩薩如來印を以て、眞如を印し善巧智を間斷せずとなす。善男子、云何んが菩薩法界甚深の理趣に入り、一切法と諸の法界と互に相ひ周遍して

平等一性なりと見る。法界とは亦た離欲界と名く、一切の塵を離るが故に。亦た不生界と名く、聚集なきが故に。不相違界なり、本無生なるが故に。無住界なり、無等なるが故に。無來界なり、無礙なるが故に。無住界なり、生起せざる故に。如如界なり、三世平等なるが故に。無我界なり、本來清淨なるが故に。無壽者界なり、勝義に由るが故に。無了別界なり、所住なきが故に。無阿頼耶界なり、染汚なきが故に。無生起界なり、性決定するが故に。如虛空界なり、性清淨なるが故に。如涅槃界なり、戲論なきが故に。是の如きを名けて法界理趣に入ると爲す。若し菩薩是の如き理趣に入れば、凡そ演説する所の一一の語言皆な法界理趣と互に相ひ周遍す。即ち欲界と、法界と無二無別なりと知る。復次に、欲性法界と、瞋性法界と無二なり。瞋性法界と癡性法界と無二なり。癡性法界と煩惱性法界と無二なり。煩惱性法界と欲性法界と無二なり。欲界性法界と色界性法界と無二なり。色界性法界と無色界性法界と無二なり。無色界性法界と空性法界と無二なり。空性法界と眼界性法界と無二なり。眼界性法界と色性法界と無二なり。色性法界と眼識界性法界と無二なり。眼識界性法界と乃至意識界性法界と無二なり。意識界性法界と意識界性法界と無二なり。意識界性法界と、蘊界性法界と無

二なり。蘊界性法界と地水火風界性法界と無二なり。地水火風界性法界と空性法界と無二なり。乃至八萬四千の法蘊行一切法法界と無二なり。是れを一切の法性法界と爲す。若し菩薩平等智に由り、是の如き法界に入らば、則ち能く一切法平等性理趣を見る。善男子、是れを菩薩法界理趣に入ると爲す。

善男子、云何んが菩薩、意樂堅固なること、猶ほ金剛の若く、此の大乗に住して傾動あることなき。善男子、菩薩、十二種の法を成就せば、意樂堅固なること、猶ほ金剛の若く、人天世間のために壞せられず。云何んが十二、謂はゆる菩提心、意樂増上意樂壞せざるが故に。施・戒・忍・精進・禪定・般若に於て壞せざるが故に。大慈大悲壞せざるが故に。四攝法壞せざるが故に。有情を成熟して壞せざるが故に。佛國土を淨ふして壞せざるが故に。生死を厭患せず壞せざるが故に。善根を厭足することなく壞せざるが故に。相好を莊嚴せんがために無遮施の會を設けて壞せざるが故に。正法を護らんがために身命を棄捨して壞せざるが故に。所有の善根を一切有情に廻施して壞せざるが故に、一切の佛法を積集して壞せざるが故に、善男子、若し菩薩、是の如き法を修習して壞せず。當に知るべし。爾の時名けて堅固金剛不壞意樂を成就すとす。金

(二) 隨眠 佛道を修する際、怠意より生じて起る一種の睡眠の煩惱。

剛實の能く諸實を摧きて自體壞せざるが如し。是の如く菩薩堅固意樂を成就して、能く一切の有情、煩惱(二)隨眠を摧きて而して自體壞せず。善男子、是れを菩薩金剛堅固意樂を成就して、此の大乗に於て傾動あることなしと爲す。善男子、云何んが菩薩、自境界に於て清淨なること佛境界の如き。善男子、佛境界とは境界あることなし。境界を離れて一切清淨なり。彼の菩薩自境界及び佛境界悉く清淨なるに由なるが故に眼境界を淨むれば、即ち佛境界なり。亦た佛境界及び眼境界無く、近無く遠無し。何を以ての故に、境界と佛境界とを遠離す。亦た境界を遠離して、及び眼の境界無し。其の耳境界即ち佛境界なり。亦た佛境界無く、遠近あることなし。何を以ての故に、境界と佛境界とを遠離し、亦た遠離の境界及び耳境界無し。其の鼻境界即ち佛境界なり。亦た佛境界無く、遠近あることなし。何を以ての故に、境界と佛境界とを遠離し、亦た遠離の境界及び鼻境界無し。其の舌境界即ち佛境界なり。亦た佛境界無く、遠近あることなし。何を以ての故に、境界と佛境界とを遠離し、亦た遠離の境界及び舌境界無し。其の身境界即ち佛境界なり。亦た佛境界及び身境界無く、遠近あることなし。何を以ての故に、境界と佛境界とを遠離し、亦た遠離の境界及び身境界無し。其の意境界即ち佛境界なり。亦た佛

境界無く、遠近あることなし。何を以ての故に、境界と佛境界とを遠離し。亦た遠離の境界、乃至蘊處界十二因縁無きことも亦復た是の如し。善男子、若し菩薩佛境界に入らば、境界一切境界を遠離す。若し自境界清淨平等なる、是れを即ち名けて佛境界に入るとなす。是の如く六種の境界あらゆる影現して、彼れ皆な諸佛境界に入り、取著を生せずして、悉く遠離するが故に。是の如く如來の境界は染礙あることなし。一切の境界染せず、礙せざることも亦復た是の如し。善男子、是の如く解さば、是れを菩薩佛界清淨に隨入して、自界清淨なることを成就すと爲す。

善男子、云何んが菩薩、陀羅尼を獲得して法行を忘るゝこと無き。善男子、菩薩應に此陀羅尼に於て作業すまを修持すべし。云何んが修持す。善男子、三十二種の陀羅尼を修する法あり。謂はゆる法を求むるが故に。法を愛樂するが故に。法苑樂しむが故に。法流に隨ふが故に。法に隨順するが故に。尊上の法なるが故に。多聞者を承事ヒトトクヤ供養するが故に。常に和上及び阿闍梨に於て我慢あることなく恭敬供養するが故に。法を求めて厭ふことなきが故に。教授者に隨順して逆はざるが故に。說法者を敬愛すること佛の如く、其の短を求めざるが故に。所聞の法を、悉く皆な受持するが故に。懈怠せざるが故に。法

を恠まざるが故に。所行の法施して怖望なきが故に。所聞の法に於て理の如く作意するが故に。所聞の法に於て善く觀察するが故に。多聞を求めて齊限なきが故に。常に梵行に於て休息なきが故に。常に遠離を樂つて心寂靜なるが故に。常に勤めて六隨念を修習するが故に。(一)六染法に於て常に棄捨するが故に。(二)六和敬に於て恒に捨てざるが故に。一切の有情に於て無礙心を起すが故に。縁生の法に於て順忍を修するが故に。三脫門に於て作意觀察して驚怖せざるが故に。聖種杜多の功德を捨てざるが故に。正法を護持して心下劣なきが故に。衆生を觀じて大悲を起すが故に。正法を求めて身命を惜まざるが故に。大智行を修して愚惑を離るが故に。有情を成就して懈倦せざるが故に。是の如きを名けて陀羅尼を修して忘失の業なしとなす。復次に善男子、若し菩薩是の陀羅尼を得已て、佛の所説に於て悉く能く遍持して忘失せざらしむ。謂はゆる所聞の法忘失あることなし。念じて忘せざるを以て、覺悟を捨つるを以て、慧の照了するを以て、一切無盡文字に入り、諸の言音を得、類に隨て善く解する智、無礙の辯を得、演説して滯ること無き智、了義の經に於て理趣に入る智、不了義の經に於て理趣に入る智、世俗に入りて無盡に説く智、勝義に入りて、斷説せざる智、正斷精進に於て無退を得る智、

(一)六染法に於て常に棄捨するが故に。(二)六和敬に於て恒に捨てざるが故に。一切の有情に於て無礙心を起すが故に。縁生の法に於て順忍を修するが故に。三脫門に於て作意觀察して驚怖せざるが故に。聖種杜多の功德を捨てざるが故に。正法を護持して心下劣なきが故に。衆生を觀じて大悲を起すが故に。正法を求めて身命を惜まざるが故に。大智行を修して愚惑を離るが故に。有情を成就して懈倦せざるが故に。是の如きを名けて陀羅尼を修して忘失の業なしとなす。復次に善男子、若し菩薩是の陀羅尼を得已て、佛の所説に於て悉く能く遍持して忘失せざらしむ。謂はゆる所聞の法忘失あることなし。念じて忘せざるを以て、覺悟を捨つるを以て、慧の照了するを以て、一切無盡文字に入り、諸の言音を得、類に隨て善く解する智、無礙の辯を得、演説して滯ること無き智、了義の經に於て理趣に入る智、不了義の經に於て理趣に入る智、世俗に入りて無盡に説く智、勝義に入りて、斷説せざる智、正斷精進に於て無退を得る智、

(一)毘鉢舍那と譯す梵語、觀見と譯す梵

四神足に於て遊戯を起す智、諸根の中に於て差別を得る智、諸力の中に於て無動を得る智、七覺支に於て開悟を得る智、八聖道に於て入理を得る智、奢摩他に於て心住することを得る智、(二)毗鉢舍那に於て法決擇を得る智、智解脫に於て隨順を得る智、諸の辯説に於て深入することを得る智、諸の神通に於て生起を得る智、諸の波羅蜜に於て分別することを得る智、四攝法に於て隨機を得る智、諸の音聲に於て語路を得る智、決定の法に於て決擇を得る智、諸の經義に於て無間斷を得る智、諸の文字に於て無盡を得る智、諸の有情に於て歡喜を得る智、求法の者に於て根に稱ひ法を説くことを得る智、佛の所説に於て念總持を得る智、一切文字に於て詞句に入ることを得る智、諸の垢淨に於て如實覺を得る智、諸の業縁に於て果報を悟ることを得る智、一切の法に於て光明を得て翳なき智、是れを陀羅尼と名く。陀羅尼を得て身語心を平等にする者は能く無盡の法を雨ふらし、能く諸の煩惱を息め、能く一切の諸佛法を生ずる故に、此の陀羅尼甚深の理を得るに由るが故に、常に忘失することなし。是の故に名けて菩薩陀羅尼を得法行を忘ることなしと爲す。善男子、云何んが菩薩如來加持無礙辯才を獲得す。善男子、若し菩薩常に如來の加持せらるるを蒙らば、二十四種の無礙辯才を得。云何んが名け



て二十四種となす。謂はゆる迅疾の辯・利捷の辯・無礙の辯・無滯の辯・善詞の辯・甚深の辯・間錯衆音の辯・勝妙莊嚴の辯・無沈沒の辯・無畏の辯・種種偈讚の辯・修多羅緣起本事の辯・能摧伏他の辯・說差別無盡句の辯・顯現微妙の辯・端嚴威徳の辯・說法無間の辯・大衆莊嚴の辯・斷諸疑惑の辯・出世法の辯・不錯失の辯・慈悲喜捨悦可衆心の辯・宿命通の辯・佛所加持の辯・善男子、是の如き二十四種の辯、二十四種の業を修して、而して成就することを得。何んが二十四種の業ぞ。謂はゆる師長の教誨を逆らはざるが故に迅疾辯を獲。往來諂なきが故に利捷辯を獲得す。諸の煩惱を離るゝが故に無礙辯を得。雜住を好まざるが故に無滯辯を得。間語を離れざるが故に善詞辯を得。緣生を悟るが故に甚深辯を得。種種の施を以ての故に間錯衆音辯を得。如來の塔廟を嚴飾するが故に勝妙莊嚴辯を得。菩提心を捨てざるが故に無沈沒辯を得。善く戒蘊を護るが故に無畏辯を得。種種幢幡鈴蓋を施すが故に說種種偈讚辯を得。種種の捨施を諸の師長に承事恭敬するが故に、說修多羅緣起本事辯を得。貧匱の有情を逼惱せざるが故に能摧伏他辯を得。無盡の寶藏を施して他をして法に入らしむるが故に說法差別無盡句の辯を得。所說眞實にして麁獷なきが故に、顯現微妙辯を得。尊教を輕毀し及び他人を離間せざる

が故に端嚴威徳辯を得。自得の法に於て住持するが故に說法無間辯を得。他を誘毀せず歡喜の心を以て所愛の物を施すが故に天衆莊嚴辯を得。法に於て師奉せず聞の如く説くが故に斷一切疑辯を得。一切を觀じて皆な師長の如く逼惱を加へず、病者に藥を施すが故に世出世法辯を得。他の過を求めず常に自ら省察するが故に不錯失辯を得。平等心を以て諸の有情を觀じて涅槃道に置き一切利養恭敬及び名聞に著せざるが故に慈悲喜捨悦可衆心辯を得。善言柔軟如説に修行して心濁亂なきが故に宿命通辯を得。大乘を誘せず、小乘を樂はずして有情を悲愍するが故に佛所加持辯を得。是れを二十四種辯才の業を成就すと名く。復次に其他の有情をして究竟に到らしむるが故に名けて辯才と爲す。他に於て住持して能く警覺せしむるが故に名けて辯才と爲す。他に於て歡喜の意相續するが故に名けて辯才となす。他の有情に於て隨心智を説くが故に名けて辯才となす。善男子、是の如く法功徳智を成就す。是れを菩薩佛加持無礙辯才を獲となす。善男子、云何んが菩薩生死中に於て自在を得。善男子、菩薩十二種の法を成就して生死の中に於て自在を得。云何んが十二。謂はゆる惡友を遠離するが故に。善友に親近するが故に。佛の所許に於て清淨を見るが故に。戒蘊清淨にして三摩鉢底より智慧方便を起

し、而して雙び運ぶが故に。不退神通を獲るが故に。諸法は無生なりと觀するが故に。本願を滿するがため生死の中に於て生を受くるが故に。有情を觀じて大慈を起すが故に。大悲定を以て諸法幻化の如しと觀察するが故に。一切法不生滅を知るが故に。夢性の法の如く虚妄ならざる法に於て如實に觀察するが故に。佛世尊威神加持を以て或は生死を現じて生死に染らざるが故に。是れを十二となす。若し菩薩此の十二法を成就せば、能く無量阿僧祇所生の處に於て示現して身を受け廣大に一切の有情を利益す。善男子、是の如くの一切は二種の根より建立する所なり。謂はゆる神通智と及び大悲根となり。是の如きを名けて菩薩摩訶薩生死の中に於て神通を獲自在を得となす。

善男子、云何んが菩薩、怨敵を摧伏して(二)四魔を超越せん。善男子、若し菩薩如幻智を以て一切の五蘊諸法皆な幻化の如しと通達して蘊魔を超越し、諸法に通達して、本性清淨にして煩惱魔を超え縁起に通達すれば死魔を超越し、菩提心を退せざるが故に天魔を超越す。復次に菩薩是の如く觀するが故に能くあらゆる障を害し、菩薩一切魔業に於て魔使りを得ず。何をか魔業と謂ふ。謂はく、小乘を愛樂する、是れを魔業となす。菩提心を護らざる、是れを魔業となす。諸の有情に於て簡別して施を行する。是れを魔業と

(二)四魔 五蘊  
煩惱魔、死魔、天  
魔のこと。

なす。生處を樂求め、而して禁戒を持す。是れを魔業となす。色相を求めんがため忍辱を修す。是れを魔業となす。世間の事を作して相應精進する、是れを魔業となす。禪に於て味著する是れを魔業となす。慧を以て下劣の法を厭離する是れを魔業となす。生死に在り、而して疲倦ある、是れを魔業となす。諸の善根を作し、而して廻向せざる。是れを魔業となす。煩惱を厭離する。是れを魔業となす。己が過を覆藏する是れを魔業となす。菩薩を憎嫉する、是れを魔業となす。正法を誹謗する。是れを魔業となす。恩に背て報いざる、是れを魔業となす。諸度を求めざる、是れを魔業となす。正法を敬せざる、是れを魔業となす。法を慳惜する、是れを魔業となす。利を希ひて法を説く是れを魔業となす。方便して有情を成就することを離る。是れを魔業となす。四攝法を捨つる。是れを魔業となす。禁戒を毀破する、是れを魔業となす。持戒の者を輕んずる、是れを魔業となす。聲聞行に順する、是れを魔業となす。緣覺乘に順する、是れを魔業となす。無爲を求むることを要す、是れを魔業となす。有爲を厭離する、是れを魔業となす。心疑惑を懷て有情を利せざる、是れを魔業となす。所聞好んで疑ひ善く如理作意に通達せざる、是れを魔業となす。好んで諂誑を懷きて假に哀愍を示す、是れを

魔業となす。麤獷愚罵なる、是れを魔業となす。罪に於て厭はざる、是れを魔業となす。自法に染着する、是れを魔業となす。少聞の便足る、是れを魔業となす。正法を求めざる、是れを魔業となす。非法を樂求する、是れを魔業となす。障蓋纏シヨウガイテンに於て對治することを樂はざる、是れを魔業となす。心口を淨せざる、是れを魔業となす。沙門の垢を忍ぶ、是れを魔業となす。善男子、是の如く、乃至好んで十不善業を行じ、善法を捨つる、是の如きは一切悉く魔業となす。若し菩薩四法を成就せば能く超越す、云何んが四となす、謂はゆる菩提心を忘れざるが故に。勤めて六度を修して放逸せざるが故に。善巧智に住して有情を成就するが故に。甚深の理に住して正法を護持するが故に。善男子、菩薩若し此の法と相應し、決定して能く諸魔怨敵シヨウマフンテキを摧く、是れを菩薩四魔を超出すとなす。

善男子、云何んが菩薩無量福德資糧を積集して諸の有情のために依止する所と作るや、善男子、若し菩薩一切の有情に於て同體の大慈を起して禪定に住し、來求者を見れば、悉く皆な捨施す。福無盡を以て寶手を得、他をして受用せしめ、意樂清淨にして心平地の如く、高下を離れて希望する所あらば豐饒利益す。戒清淨なるが故に、心著なきことを得善く諸根を護り、復能く一切の施會を成辨す。陀羅尼タラニを得、辯才を成就し是の如く等の善根を積集するを以て菩提に廻向し普ねく有情に施し、外の四大の如きは一切の世間依住す。是の如く内の四大も一切の依住となる。菩薩是の思惟を作さく、我れ積集する所の一切善根法智善巧一法として有情のために依住となさざることあることとなし。是れを菩薩無量福德資糧を獲得して諸の有情のために依住する所と作るとなす。

善男子、云何んが菩薩無佛世に出で、諸の有情のために佛事を作さん。善男子若し菩薩、處非處智シヨヒシヨチに出生せんがための故に、十力業を修し、漏盡智ロウジンチを出生せんがための故に、四無畏業を修し、三十無礙智ムサヤチを出生せんがために十八不共法業を修し、佛眼光明ブツガンを出生し得せんがための故に、五眼悉知業を修し、一切神通を出生せんがための故に宿命業を修し、菩提を成就満足することを獲んがための故に、具足一切善法を修し、身口意諸の煩惱業を斷じ、相好莊嚴を出生せんがための故に一切福資糧業フクシヤウゴウを修集し、十地を出生し一切佛法に灌頂を得せしめんがための故に、一切智資糧業を修集す。是の如く善男子、若し菩薩具さには是の如くの業を修し已て、無佛世に於て能く有情のために廣く佛事

を作し而して之を成就す。

善男子、云有んが菩薩海印三摩地を獲得して一切有情の心行に染せざる。善男子、何んの因縁を以て名けて海印三摩地となす。瞻部州諸の有情等、若干色類の如きは、皆な海中より影像を現するが故に大海と名く。是の如く若干の有情、一切心色の類、乃至音聲、彼の諸の影像皆な菩薩の心海中より現す。是の故に名けて海印三摩地となす。譬へば大海の同一減味なるが如し。菩薩の一味法解脱智も亦た復た是の如し。譬へば大海の潮限を越えざるが如し、菩薩時非時を觀するが故に、菩提を成ずる時道場に坐することも越えざるも亦復た是の如し。譬へば大海の死屍を宿さざるが如く、菩薩一切習氣煩惱の與め及び聲聞緣覺の心と俱ならざること亦復た是の如し。譬へば大海萬流を容納して不増不減なるが如く、菩薩一切の諸法を容受して増減あることなきことも亦復た是の如し。譬へば大海の其の廣きこと涯無きが如く、菩薩の慧用無邊なることも亦復た是の如し。譬へば大海の深うして底を得難きが如く、菩薩の智海一切の聲聞緣覺測り難きことも亦復た是の如し。譬へば大海の能く無量世界の依止と作るが如く、菩薩諸の有情の依止となることも亦復た是の如し。善男子、是れを菩薩善く海印三摩地

に入り已て一切有情心行に染せずとなす。

善男子、云何んが菩薩、無染着の心を得ること虚空風の如く障礙あることなきや。善男子、若し菩薩一切の法に於て、見纏を遠離して心の所着なきこと、譬へば大風の虚空に於て染着する所なきが如し、是の如く、菩薩一切の法に於て、心所着も無きことも亦復た是の如し。是れを菩薩無染着を得、心虚空風の如く障礙あることなし。

國譯大集大虚空藏菩薩所問經卷第三終